

—茨城県土浦市—

佐々木建設株式会社土砂採取工事
に伴う埋蔵文化財調査報告書

下郷遺跡

下郷古墳群

2001(平成13)年7月

佐々木建設株式会社
土浦市教育委員会
下郷古墳群遺跡調査会

佐々木建設株式会社土砂採取工事
に伴う埋蔵文化財調査報告書

しも ごう
下郷遺跡

しも ごう
下郷古墳群

2001(平成13)年7月

佐々木建設株式会社
土浦市教育委員会
下郷古墳群遺跡調査会



第5号住居跡出土弥生土器



第4号住居跡出土石英製石器

序

土浦市は霞ヶ浦や桜川の水に恵まれ、太古から人々が生活するのに適したところがありました。そのため市内には貝塚、古墳、集落跡など数多くの遺跡が存在しております。これらの遺跡は当時の様子を知る手掛かりとなることはもちろんのこと、現代の私達が豊かに生活することのできる先人の業績でもあります。

このような貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えることは私達の大切な任務であり、郷土の発展のためにも重要なことと思われます。

このたびの調査は、佐々木建設株式会社の計画する土砂採取工事事業に伴い、周知の遺跡である下郷遺跡・下郷古墳群の発掘調査による記録保存を目的として行われたものであります。

遺跡内からは、縄文時代から古墳時代にかけての集落跡や古墳等が確認されました。特に縄文時代では、前期初頭における生活の痕跡等が確認されました。弥生時代の住居跡の一つからは、微細な石の剥片が多量に出土し、石器利用の様子が伺われます。また、古墳時代のものとしては、古墳の周辺に土壙墓と考えられるものが並んで見つかり、貴重な調査事例といえます。

この調査によって、土浦東部の田村地区における古代文化の究明にいささかなりとも役立てていただければ幸甚であります。

最後になりましたが、調査から報告書の発刊にあたり、佐々木建設株式会社をはじめ、関係者の皆様方のご協力とご支援に対し、心から厚く御礼申し上げます。

平成13年7月31日

土浦市教育委員会

教育長 尾見 彰一

目 次

巻頭カラー(第5号住居跡出土弥生土器、第4号住居跡出土石英製石器)

序	
目次	
例言	
凡例	
第1章 調査経過	P1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第3節 調査の方法	2
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3節 基本層序	8
第3章 遺構・遺物	11
第1節 竪穴住居跡	11
第2節 土坑	35
第3節 集石	47
第4節 溝	50
第5節 古墳	53
第6節 道路遺構	61
第7節 遺構外出土遺物	62
第4章 調査エリア外貝ブロック	74
第5章 調査のまとめ	75
写真図版 (PL)	
抄録	
第14図 第4号住居跡遺構実測図	24
第15図 第4号住居跡石英出土状況図	25
第16図 第4号住居跡出土遺物実測図(1)	26
第17図 第4号住居跡出土遺物実測図(2)	27
第18図 第5号住居跡遺構実測図	30
第19図 第5号住居跡出土遺物実測図(1)	31
第20図 第5号住居跡出土遺物実測図(2)	32
第21図 第6号住居跡遺構実測図	33
第22図 第6号住居跡出土遺物実測図	34
第23図 土坑遺構実測図(1)	36
第24図 土坑遺構実測図(2)	37
第25図 土坑遺構実測図(3)	38
第26図 土坑遺構実測図(4)	39
第27図 土坑遺構実測図(5)	41
第28図 土坑遺構実測図(6)	42
第29図 土坑出土遺物実測図	43
第30図 集石遺構実測図	48
第31図 集石遺構出土遺物実測図	49
第32図 溝遺構実測図(1)	51
第33図 溝遺構実測図(2)	52
第34図 第13号古墳(TM-1)周溝括れ部平面図	54
第35図 第13号古墳(TM-1)周溝括れ部断面図	54
第36図 第13号古墳(TM-1)全体図	55
第37図 第13号古墳(TM-1)土層図	57
第38図 第13号古墳(TM-1)出土遺物実測図	59
第39図 第15号古墳(TM-2)遺構実測図 ・出土遺物実測図	60
第40図 道路遺構実測図	61
第41図 遺構外出土遺物(1)	63
第42図 遺構外出土遺物(2)	64
第43図 遺構外出土遺物(3)	65
第44図 遺構外出土遺物(4)	68
第45図 遺構外出土遺物(5)	69
第46図 遺構外出土遺物(6)	70
第47図 遺構外出土遺物(7)	71
第48図 遺構外出土遺物(8)	72

図版目次

第1図 周辺遺跡分布図	4
第2図 周辺古墳分布図	7
第3図 基本土層図	8
第4図 下郷遺跡・下郷古墳群全体図	9
第5図 第1号住居跡遺構実測図	12
第6図 第1号住居跡遺物出土状況図	13
第7図 第1号住居跡出土遺物実測図	14
第8図 第2号住居跡遺構実測図 ・出土遺物実測図	15
第9図 第3号住居跡遺構実測図 ・遺物出土状況図	17
第10図 第3号住居跡出土遺物実測図(1)	19
第11図 第3号住居跡出土遺物実測図(2)	20
第12図 第3号住居跡出土遺物実測図(3)	21
第13図 第3号住居跡出土遺物実測図(4)	22

表目次

第1表 周辺古墳一覧	P 6
第2表 土坑一覧	45

写真図版目次

P L 1	航空写真(国土地理院昭和57年撮影)、遺跡全貌	跡4、第4号住居跡9~19、第4号住居跡4拡大
P L 2	試掘調査状況、基本層序、第1号住居跡完掘、第1号住居跡P 11土層、第1号住居跡P 11遺物出土、第2号住居跡完掘、第3号住居跡完掘、第3号住居跡遺物出土	P L 11 第4号住居跡20~22、第4号住居跡23~28(30+31)、第4号住居跡29、第5号住居跡1、第5号住居跡2、第5号住居跡3、第5号住居跡2内石器(18·19)、第5号住居跡4~6
P L 3	第4号住居跡完掘、第4号住居跡石英出土状況、第5号住居跡完掘、第5号住居跡遺物出土、第6号住居跡完掘、第6号住居跡遺物出土、第1号土坑遺物出土、第14号土坑完掘	P L 12 第5号住居跡7~11、第5号住居跡12~14、第5号住居跡15~19、第5号住居跡20、第6号住居跡1、第6号住居跡1拡大、第6号住居跡2·3、第6号住居跡4、第6号住居跡5
P L 4	第21号土坑完掘、第3号土坑完掘、第13号土坑土層、第13号土坑完掘、第37号土坑土層、第34号土坑完掘、第36号土坑完掘、第17号土坑完掘	P L 13 第1号土坑1、土坑出土繩文土器、土坑出土繩文土器、第18号土坑出土鐵鐵7(表裏)、集石出土繩文土器、集石出土繩文土器・石器、第13号古墳出土遺物、第15号古墳出土埴輪1
P L 5	第76号土坑完掘、第63号土坑遺物、第28号土坑完掘、第2号溝完掘、第13号古墳完掘	P L 14 第15号古墳出土埴輪、遺構外土器・陶器・瓦、遺構外(現代墓)陶器、遺構外土製品47~53、遺構外旧石器66~72、遺構外石器76·77、遺構外石器83、遺構外石器64、遺構外(現代墓)鐵製品57、遺構外(現代墓)鐵製品56、遺構外(現代墓)鐵製品58
P L 6	第13号古墳調査前、第13号古墳周溝土層、第13号古墳埴丘土層、第13号古墳周溝活れ部スロープ遺構、第13号古墳周溝内階段状遺構、第13号古墳主体部確認、第13号古墳埴丘検出現代墓	
P L 7	第15号古墳完掘、第1号道路遺構、第2号道路遺構、調査エリア外貝ブロック、作業風景	
P L 8	第1号住居跡2、第1号住居跡3·5、第1号住居跡6、第1号住居跡1·4·7~19、第1号住居跡20、第2号住居跡1·2、第2号住居跡3·4、第3号住居跡1	
P L 9	第3号住居跡3、第3号住居跡4~10、第3号住居跡11·12、第3号住居跡13~16、第3号住居跡17~24、第3号住居跡25~31、第3号住居跡32~35·39~42	
P L 10	第3号住居跡36~38·43·44、第3号住居跡45~49、第4号住居跡1~3、第4号住居跡6~8、第4号住居跡5、第4号住居	

例 言

1. 本書は下郷古墳群遺跡調査会が実施した、土浦市田村町字吉池2218番地の1他に所在する下郷遺跡と下郷古墳群の発掘調査報告書である。(現地調査では、下郷古墳群のみの名称で調査を実施したが、報告書名は下郷遺跡・下郷古墳群として報告する。両者は重複するものであり、報告書内では明確に区分していない。)
2. 調査は事業者である佐々木建設株式会社の行なう土砂採取工事に伴う事前調査として実施したものである。
3. 下郷遺跡・下郷古墳群の発掘調査は平成12年8月17日から11月4日まで実施した。出土品の整理作業及び報告書の作成は平成13年2月より平成13年6月末日まで行なった。
4. 下郷遺跡・下郷古墳群の発掘調査は開口溝(上高津貝塚ふるさと歴史の広場)学芸員が担当した。遺物の整理及び報告書の作成は開口溝・福田礼子(上高津貝塚ふるさと歴史の広場)文化財調査監修員が担当した。全体の総括そして報告書の編集は、開口溝・福田が行なった。出土品の中で、剥片石器の実測や石器の原稿執筆については塙田恵一氏にご協力頂いた。また、弥生土器の実測については、赤坂亨氏にご協力頂いた。石器以外の原稿執筆は開口溝が行った。
5. 発掘調査及び出土品の整理に関わり、次の諸氏又は諸機関のご協力・ご教示を賜った。記して謝意を表したい。
(50音順 敬称略)
茨城県教育委員会、茨城県県南教育事務所、財団法人茨城県教育財團、海老沢巣、及川謙作、川井正一、小玉秀成、駒澤洋郎、齊田克史、斎藤弘道、清野隆一、高花宏行、千葉隆司、中村哲也、吹野富美男、宮下聰史、矢野徳也、吉澤悟、佐々木建設株式会社
6. 遺物写真は現地調査担当者が撮影し、遺物写真は開口溝が担当した。
7. 本書が関わる出土品及び記録面図・写真などは一括して上高津貝塚ふるさと歴史の広場に保管してある。

8. 下郷古墳群遺跡調査会組織

会長	須田直之	文化財保護審議会長
副会長	五頭英明	土浦市教育委員会教育次長
理事	岩沢茂	土浦市教育委員会文化課長
理事	飯沼正勝	土浦市建築指導課長
理事	大塚博	土浦市文化財保護審議会委員
理事	土肥敏郎	土浦市教育委員会総務課長
監事	官川卓久	土浦市監査事務局補佐
事務局長	来栖稔	上高津貝塚ふるさと歴史の広場館長
事務局員	石川功	上高津貝塚ふるさと歴史の広場主幹
事務局員	黒澤泰彦	上高津貝塚ふるさと歴史の広場主幹
事務局員	開口溝	上高津貝塚ふるさと歴史の広場主幹
事務局員	宮本礼子	土浦市教育委員会文化課主事
調査組織		
調査主任	開口溝	上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員
調査員	阿部有花	立正大学大学院生(平成12年11月4日まで)
調査補助員	高野麻希	東京学芸大学学生(平成12年11月4日まで)
調査作業員		
	天谷瑛子、石神洋、大久保敦子、大塚富美江、大坪美知子、大野欣子、小野豊、木村毅、木村時政、河合淳子、小松崎廣子、斎藤尽志、椎名喜代作、中島秀雄、中島とみ子、中野富美子、浜田久美子、福田美代子	
事務員	鈴木ひと美	

整理作業

調査主任	開口溝	
調査員	福田礼子	
調査補助員	窪田恵一	(平成13年4月より)
	赤坂亨	筑波大学大学院生(平成13年3月末まで)

整理作業員

天谷瑛子、新井栄子、石山春美、小松崎廣子、長嶋道子、浜田久美子、大久保敦子、中野富美子

凡　例

1. 下郷遺跡・下郷古墳群の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅺ系座標を原点として、X = + 9,952 m、Y = + 37,128 m の交点を基準点（A-1区）とした。

調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を 20 m 四方の大調査区に分割し、さらにこの調査区を東西及び南北に各々 5 等分し、4 m 四方の小調査区（グリット）を設定した。調査においては 4 m 四方の小調査区（グリット）を基本として使用し、大調査区には特別に名称を与えていない。調査区の名称はアルファベットとアラビア数字を用い、北から南へ 1、2、3 … とし、西から東へ A、B、C … とし、A-1 区 のように呼称した。

2. 遺構・土層に使用した記号は次のとおりである。

遺構 壑穴住居跡…S I 土坑…SK 集石…SS 溝…SD 古墳…TM P…柱穴・ピット

弥生時代壙穴住居跡内 P 1 ~ P 4 …主柱穴 P 5 …入り口ピット

土層 K …擾乱 S L …ソフトロームブロック H L …ハードロームブロック P …土器 S …石

3. 遺構・遺物の実測図中の表示は以下のとおりである。

焼土 須恵器 敲打痕 織維

この他の実測図中の表示は、その図面中に指示してある通りである。

4. 土層観察と遺物における色調の同定は、「新版標準土色帖」（小山正忠、竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

5. 本書の遺構・遺物の表示は次のとおりである。

(1) 水系レベルは海拔高度を示す。

(2) 遺物番号は本文、挿図、写真図版とも一致する。

(3) 遺構の縮尺は基本的に 1/60 で、炉・ピットセクションについては 1/30 である。古墳全体図は 1/100 で、セクションは 1/50 である。

(4) 遺物の縮尺は原則として土器が 1/3、石器は遺構内の剥片石器を等倍、礫石器を 1/3、大型のものを 1/4 とした。また弥生時代の石英製石器は 1/2 とした。遺構外の剥片石器は 4/5、礫石器は 1/3、大型のものは 1/4 とした。鉄器は 1/3 で表示した。器種や大きさにより異なる場合もあり、それらについては個々にスケールで表示した。

(5) 「主軸方向」は壙穴住居跡の場合、主柱穴間の 2ヶ所の中間地点を結んだ長軸線が、座標軸からみてどの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。例 (N - 46° - W)

(6) 遺構の計測値で () で表現されたものは推定値である。遺物観察表中の計測値欄の A は口径・B は器高・C は底径を示す。また、器高欄 () は現存高を表し、口径・底径欄の [] は回転復元径を表す。

(7) 遺物観察表中の胎土の項目における△・○・◎の表記は、△…微量、○…中量、◎…多量を意味する。これらの判断は明確な基準がある訳ではなく主観的なものである。

(8) 遺物観察表中の備考には、残存率 (%)・出土層位・その他の特記事項を記した。

第1章 調査経過

第1節 調査に至る経緯

本事業は、佐々木建設株式会社の行う土砂採取工事事業により調査に至った。その始まりは1999(平成11)年4月8日にさかのぼる。佐々木建設株式会社(以下「事業者」)による市内田村町地内の土地について、「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて(照会)」が提出された。土浦市教育委員会(以下「市教委」)では、市内埋蔵文化財地図での確認及び現地踏査を行った。

今回照会のあった土地は山林となっていたが、周知の遺跡である下郷遺跡・下郷古墳群の範囲内にあり、新規発見の古墳らしい塚も1基確認された。また、同所の隣接地は1997(平成9)年に(財)茨城県教育財團により発掘調査が実施されている。

以上の状況から、照会の土地について、土砂採取等の土地の改変行為を行う場合は発掘調査が必要となる旨を、事業者宛て解答した。そして、発掘調査に至った場合の調査範囲・期間そして調査費用については、試掘調査を実施して算出したい旨を伝えた。協議の結果、照会の土地における埋蔵文化財の試掘調査を実施することで合意した。

試掘調査は、事業主のご協力によって照会の土地である2,300m²の面積を対象に、1999(平成11)年6月15日から16日にかけての2日間で、重機を使用して実施した。調査方法は、トレーナーを7本設定して、事業面積の約9%の面積を調査した。この結果、竪穴住居跡や土坑、そして古墳などが確認された。

この後、協議の結果、事業主にとって照会地の現状保存は困難なことであり、埋蔵文化財の記録保存を目的とした発掘調査を実施することで合意した。実際の発掘調査は、事業主の事業計画との調整を行い、2000(平成12)年8月17日から11月4日まで実施した。調査の実施にあたっては下郷古墳群遺跡調査会を組織して調査にあたった。

第2節 調査経過

2000(平成12)年

- 8月17日 テントの設営、調査区内外の草刈り、遺構確認。
- 8月18日 遺構確認、方眼杭打ち。
- 8月19日 TM-1の墳丘コンタ図作成。TM-2の周溝調査・土坑の調査開始。
- 8月23日 佐々木建設株式会社社長が来訪。
- 8月31日 TM-1の墳丘を十字ベルトを残し排除開始。竪穴住居跡の調査開始。
- 9月1日 SI-4の石英礫剥片の取上げ開始。夜半に大風吹き、テント一部破損。
- 9月20日 TM-1の周溝調査開始。
- 9月21日 SI-4の石英礫剥片の取上げ終了。
- 10月5日 佐々木建設株式会社社長が来訪。
- 10月14日 TM-1の現代墓の人骨が納められた甕取上げ。
- 10月20日 土浦市文化財保護審議委員の方々来訪。

10月24日	旧石器時代遺物検出のためのローム層の掘り下げ。
10月31日	遺構全景撮影。
11月4日	遺構調査終了。現場器材撤収。
2001(平成13)年	
2月13日	整理作業開始。遺物の洗浄。
3月1日	遺物の注記開始。台帳付け。
3月13日	遺物の接合、石膏復元開始。
3月21日	遺物実測開始。
4月5日	トレース開始。
5月1日	図版作成開始。
5月22日	原稿執筆開始。
6月上旬	遺物写真撮影。
6月下旬	整理作業終了。

第3節 調査の方法

調査区（第4図）は確認調査の結果導き出されたものである。調査対象面積は約1,700m²であり、表土排除は暗褐色土（遺物包含層）上面でおこなった。表土排除後、佐々木建設株式会社のご協力により、調査エリア内に国家基準に則した20m間隔の方眼杭を設定した。実際の調査にあたっては、20m間隔の方眼杭の間を4m間隔に細分した。これらの方眼の呼称は、西端から東にA、B、C、D…とアルファベットを用い、北端から南に1、2、3、4…とアラビア数字で呼称した。各4m間隔の方眼（グリッド）は上記の表記を使用して、例えばA-4（G r）グリッドというように表現した。また、調査エリア外の1ヶ所にベンチマークを設定した。

竪穴住居跡の調査は、長軸と短軸方向に土層観察用ベルトを設定し、遺物や床面などの検出を行った。遺物の取上げについては、出土遺物を極力残して平面と垂直位置を記録した。その他の遺物に関しては、遺構内の区一括として取り上げた。遺構内の区の呼称方法は、住居跡内を時計回りに1・2・3・4区の設定を行った。微細な石英の剥片が多数出土した第4号住居跡に関しては、肉眼で認識し得た剥片すべてに対して、平面・垂直位置を記録した。

土坑については、長軸または短軸方向にベルトを設定して調査した。古墳の墳丘については、現況の墳丘最高位付近に十字のベルトの交点が来るよう設定をし、その末端は周溝にもかかるようにした。この他、古墳の周溝については適宜ベルトを設定した。第13号古墳の後円部に埋められていた、人骨を納めた後世の甕については、取上げを行い持ち帰った。

現地での遺構図面の測量は1/20を基本とした。しかし、古墳の墳丘の現況図や完掘後の全体図に関しては1/50で、平板測量を行った。

現地での遺構の写真撮影には、脚立やローリングタワーを使用した。

写真的撮影は住居跡の場合、土層セクション写真→遺物出土状況写真→（遺物出土状況接写）→炉セクション写真→遺構完掘状況写真の順序でリバーサルフィルムとモノクロームフィルムで撮影した。カメラは、35mmカメラと6×7カメラを使用して撮影した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境 (第1・2図 PL1)

下郷遺跡・下郷古墳群は、茨城県土浦市田村町字吉池2218番地の1他に所在し、JR常磐線土浦駅の北東約3.5kmの台地上に位置する。

土浦市は茨城県南地域の中核都市であり、人口は約13万人を越える。本市の東方には霞ヶ浦（土浦入り）が広がり、北西方向には筑波山塊の山並みや筑波山の頂が遠望できる。本市に隣接する市町村としては、東に新治郡霞ヶ浦町、北に新治郡千代田町、西につくば市・新治郡新治村、南に牛久市・稻敷郡阿見町が存在する。

土浦市の地形は、大きく分けると市内中央部を流れる桜川によって形成された桜川低地と、その北岸・南岸の台地に分かれる。北岸の台地は新治台地、南岸の台地は筑波稲敷台地と呼ばれ、いずれの台地も標高25～30m前後を測る。

新治台地は筑波山塊の南東部に広がり、筑波山塊・桜川・恋瀬川・霞ヶ浦に囲まれ、半島状に突き出ている。この台地は、小河川により開析された谷が樹枝状に入り込む様子が見られる。この台地を刻み込む河川として、市の北部には筑波山塊に源を発し恋瀬川を通じて高浜入りに注ぐ天の川がある。そして、市の東部には台地中央部に源を持つ境川や田村川がある。霞ヶ浦町においては川尻川等がある。境川や田村川の河口地域には広大な沖積地が広がり、現在その多くは蓮田として利用され、レンコンの生産量日本一を誇っている。また、台地内を刻む谷は水田として利用されることが多い。

下郷遺跡・下郷古墳群の存在する台地は、田村川によって開析され、細長い馬の背状を呈し、標高26～27mを測る。同台地の南方の谷は樹枝状をなし複雑な地形を見せている。

第2節 歴史的環境 (第1・2図)

下郷遺跡・下郷古墳群が存在する手野・田村地区には、多くの遺跡等が存在する。

今回の調査区隣接地は、(財)茨城県教育財團により国道改築工事に伴い発掘調査が実施されている(以下は財團エリアと呼ぶ)。この中から旧石器時代の安山岩を主体としたブロックが確認され、台形石器や多数楔形石器等が出土している。特筆すべきは石器集中ブロックと炉址が確認されたことである。同様な状況は、田村町の寺畠遺跡(第1図7)の調査でも確認されている(註1)。

縄文時代のものとして、財團エリアでは縄文時代前期を中心にして遺構・遺物が出土した。特に、前期海積下層式の竪穴住居跡群が市内では初めて確認された。同期の遺物がまとまって出土した遺跡として、周辺では田村町金澤遺跡(第1図10)がある(註2)。

弥生時代のものとして、財團エリアでは後期前半に位置付けられる竪穴住居跡群が確認された。市内東部地域において、後期前半の竪穴住居跡群が確認された遺跡として、沖宿町六十塚遺跡(第1図16)がある(註3)。いずれの遺跡でも、竪穴住居跡から石英礫を割った剝片が多数出土し、特徴的な出土遺物といえる。この石英礫は、天の川や雪入川の上流域の沢で現在でも採集できる(註4)。

古墳時代では、財團エリアで前期の竪穴住居跡群が確認されている。今回の調査エリアでは確認されていない。遺跡周辺で古墳時代の集落が調査された遺跡は、五斗落遺跡(第1図4)(註5)、弁ノ内遺



第1図 周辺遺跡分布図

跡(第1図5)(註6)、石橋南遺跡(第1図12)(註7)、金澤遺跡、尻替遺跡(第1図13)(註8)、寺畠遺跡、入ノ上遺跡(第1図14)(註9)等がある。

これまでの調査により、下郷遺跡・下郷古墳群が存在する馬の背状の台地の土地利用として、古墳時代前期までは集落として利用され、その後は墓域として利用されたことが分かる。下郷古墳群周辺での前期古墳としては、本古墳群の北西1.5kmに王塚古墳(第1図3)・后塚古墳(第1図2)が存在する(註10)。いずれも市指定文化財となっている。また同期の方形周溝墓として、田村町窓芯清水西遺跡(第1図8)で確認され(註11)、財團エリア内にも推定されるものがあるが明確ではない。

現在のところ下郷古墳群内では、古墳やその痕跡が18基(第2図1~18で古墳番号と対応)を数える。1980年には第3号墳が調査されている(註12)。財團エリアでは第1・2・10・11・12号墳の5基の古墳が調査された。現状で最古のものは、6世紀前葉の遺物が出土した第1号墳である。同古墳群の南方には、複数の古墳(群)が田村川により開析された谷に面して所在する。(第2図19)は池島古墳、(第2図20)は山王古墳、(第2図21)は田村上郷古墳(註13)、(第2図22)は柏原南古墳、そして(第2図23~29)が田村舟塚古墳群(註14)である。また、谷筋が異なるが、(第1図9)は寿行地古墳で、7世紀中葉の円墳が調査された(註15)。

この他、今回の調査エリア内では、古墳群との関わりが想定される土壙墓と想定できる遺構が確認された。これらは財團調査エリアでも確認されている。形態的に特徴があり、複数の形態が存在する。しかしながら、同遺構内の出土遺物が皆無に近いという特徴があり、時期判定は難しい。

古代については、財團エリアから遺物が若干確認されたのみであるが、周辺には同期の集落遺跡も多い。特に、9世紀以降のものが多いように思う。加えて、同地域では古代の火葬骨蔵器が多数出土していることが特徴といえる(註16)。そして興味深いことは、集落域と墓域が谷を隔てて存在する様相が見られることである。

この他、時代は下がるが中世の遺物として、財團エリアでは五輪塔の集積が確認された。また、田村川最奥の谷頭には、15世紀後半~16世紀の大型井戸である井戸山遺跡(第1図6)が存在する(註17)。

参考文献

(財)茨城県教育財團「下郷古墳群 茨城県教育財團文化財調査報告第167集」2000

土浦市教育委員会「土浦の遺跡」1983

註記

(註1)土浦市立博物館「第13回企画展「開かれた古代の扉—田村・沖宿遺跡群—」パンフレット 1993

(註2)土浦市遺跡調査会「田村・神宿地区遺跡調査現地説明会資料」1992

(註3)土浦市教育委員会「六十塚遺跡 田村・沖宿区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第9集」1998

(註4)矢野徳也氏より御教授頂いた。

(註5)(註6)茨城県教育財團「五斗落遺跡・大信遺跡・弁ノ内遺跡・原ノ内遺跡・ゴリン山遺跡・真木ノ内遺跡 茨城県教育財團文化財調査報告第43集」1987

(註7)土浦市教育委員会「石橋南遺跡 田村・沖宿区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第7集」1997

(註8)は(註1)(註2)に同じ

(註9)土浦市教育委員会「人ノ上遺跡—都市計画道路田村沖宿線道路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一」1997

(註10)茨城大学人文学部考古学研究室「常陸の前方後円墳(1)ー茨城大学人文学部考古学研究報告第3冊ー」2000

- (註11)土浦市教育委員会「老林清水西遺跡・三夜原東遺跡・新堀東遺跡 田村・沖宿区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第1集」1997
- (註12)土浦市教育委員会「下郷古墳発掘調査報告書」1981
- (註13)石橋 充『茨城県土浦市田村上郷古墳出土の人物埴輪』『埴輪研究会会報』第2号 1996
- (註14)茨城大学人文学史学第6研究室「土浦市舟塚山二号墳調査概報」1983及び(註10)に同じ ※2000年に名称を田村舟塚古墳群で台帳登録。
- (註15)土浦・出島合同遺跡調査会「寿行地古墳発掘調査報告書」1995
- (註16)吉澤 恒『茨城県における古代火葬墓の地域性―土浦市立博物館保管の骨蔵器の資料紹介および県内事例の集 成から―』『土浦市立博物館紀要』第6号 1995
- (註17)土浦市教育委員会「井ノ山遺跡確認調査報告書」1991

第1表 周辺古墳一覧

図版番号	古墳名	規模(m)	形態	発掘調査	参考
第2図 1	下郷古墳群第1号墳	径17.8、高さ1.5。	円墳	1997調査深滅	墳丘中央に土手部・箱式石棺、6世紀後葉の土手部基材・須弥器ハソウ・普賢出現し、蓋上に第1号方舟溝通築・方舟溝通墓と推定。
2	下郷古墳群第2号墳	径12、高さ1.3。	円墳	1997一部調査	1980に摸索削出。
3	下郷古墳群第3号墳	径13.5、高さ1.5。	円墳	1980調査深滅	墳丘中央盛土中に土手部・箱式石棺、直刀・剣等出土。
4	下郷古墳群第4号墳	径11、高さ1.	円墳	未調査、現存	
5	下郷古墳群第5号墳	径13、高さ1。	円墳	未調査、現存	
6	下郷古墳群第6号墳	径16、高さ1.5。	円墳	未調査、現存	
7	下郷古墳群第7号墳	不明	不明	現状で須弥なし	木棺中に積み重ねられた片岩製板石17枚のみ。
8	下郷古墳群第8号墳	不明	不明	現状で須弥なし	大刀・若狭石2枚L1.1X1.7X0.6cmのみ。
9	下郷古墳群第9号墳	不明	不明	現状で須弥なし	積み重ねられた片岩製板石20枚以上ののみ。
10	下郷古墳群第10号墳	全長26.4、後円部径16、 前方部最大幅13.5。	前方後円墳	1997調査深滅	(註)明治時代末に松竹敷設により須弥、人骨・直刀・鎌等出土。人骨と諸物の一帯は裏に人骨同時に見る。平成になり第13号墳後部内部に同費を移設。昭和や蓮池から平安紀手筋のものか。
11	下郷古墳群第11号墳	径18。	円墳	1997調査深滅	主導者は須弥記、第10号墳と重複し、本墳が新しい。
12	下郷古墳群第12号墳	東西13、南北13.2。	方墳	1997調査深滅	主導者は中央から北側によって前式石棺、7世紀紀半。
13	下郷古墳群第13号墳	全長約30、後円部径約20、 前方部最大幅約12、高さ2。	前方後円墳	2000一部調査	主導者は後円部に箱式石棺、板石は複数かかれている。蓮池は須弥器・土器類・小鏡片等出土。
14	下郷古墳群第14号墳	径9、高さ1。	円墳	未調査、現存	須弥には板石に束つた元持二重巻の石の頭あり。
15	下郷古墳群第15号墳	径14、高さ1.5。	前方後円墳	2000一部調査	須弥内から須弥の低い埴輪片がまとまって出土。6世紀後半か。
16	下郷古墳群第16号墳	径15、高さ1.7。	円墳	未調査、現存	蓮池部が割合半されている。
17	下郷古墳群第17号墳	不明	不明	疎滅	(註)1954年、道面工事中に石棺発見、須弥から人骨・直刀等出土。
18	下郷古墳群第18号墳	全長33、幅10、高さ3。	前方後円墳	未調査、現存	作跡地近傍にあり、蓮池に氏族移転からされている。東側削平。
19	飛鳥古墳	径1.4、高さ1.4。	円墳	未調査、現存	近隣して蓮池堂があり、蓮池に片岩製板石使用。
20	山王古墳	全長46、後円部径18、後円部高2、前方部幅20、前方部高3。	前方後円墳	未調査、現存	災害地帯内にあり、前方部が須弥に陥り、大型の片岩石板墓。前方部から5世紀代の墓石他採集。
21	上郷古墳	径30、高さ2。	円墳	未調査、現存	6世紀中葉頃の特徴を持つ人物埴輪等が採集。
22	相模原古墳	径6、高さ0.8。	円墳	未調査、現存	須弥から埴輪採集、須弥に朱丹色等があり。
23	田村舟塚古墳群第1号墳	全長25、後円部幅12、高さ2、 前方部幅10。	前方後円墳	未調査、現存	須弥部上に石輪席。
24	田村舟塚古墳群第2号墳	全長50、前方部幅10、高さ1、 後方部幅20、高さ2。	前方後方墳	1982調査	前方部が最も大きい。前方部の構築は削り出しによる。3世紀後、四半圓に配置付けられる土被器が出土。
25	田村舟塚古墳群第3号墳	径18、高さ廟廻1.5、北側5。	円墳	未調査、現存	
26	田村舟塚古墳群第4号墳	径7、高さ0.5。	円墳	未調査、現存	
27	田村舟塚古墳群第5号墳	径19、高さ1.7。	方墳	未調査、現存	
28	田村舟塚古墳群第6号墳	径15、高さ3。	円墳	未調査、現存	
29	田村舟塚古墳群第7号墳	全長18、前方部幅8、高さ2、 後円部径7、高さ1。	前方後円墳	未調査、現存	

第2図 周辺古墳分布図



第3節 基本層序 (第3図 PL 2)

本層序は、調査区内のB・C・5・6区に設けたテストピット(TP 1)を掘り下げる、その北壁の土層堆積状況を図化したものである。地表面の標高は26.2mで、調査エリア内でも最高位に近い場所といえる。テストピットの深さは地表面から約1.3mを測る。

第1層の表土は、暗褐色(7.5 YR 3/3)を呈し、焼土小(径2・3mm)を微量含み、焼土粒を含む。この他、ローム小・粒を微量含み、径2・3mmの小石が含まれる。

第2層は、黒褐色(7.5 YR 3/2)を呈し、焼土粒・ローム粒が微量含まれる。同様な色調の土層は、調査区内の弥生時代以降の遺構覆土上層や、第13号古墳の埴丘下旧表土に見られた。

第3層は、暗褐色(7.5 YR 3/4)を呈し、縄文時代の遺物包含層と考えられる。今回の調査で検出した遺構のはとんどは、本層下層付近を確認面として検出したものである。

第4層は、褐色(10 YR 4/6)のソフト化したローム層である。同層はクラック状に下層を侵食し、最下層は第8層まで及んでいる。

第5層は、黄褐色(10 YR 5/6)を呈するハードロームで、微細な赤色・黒色スコリアが含まれ、下層の第6層より明るい。

第6層は、黄褐色(10 YR 5/6)を呈するハードロームで、姶良・丹沢火山灰(AT)の火山ガラスが本層を中心に含まれている。この他、微細な赤色・黒色スコリアが第5層よりも多く含まれる。炭化粒子も含まれる。

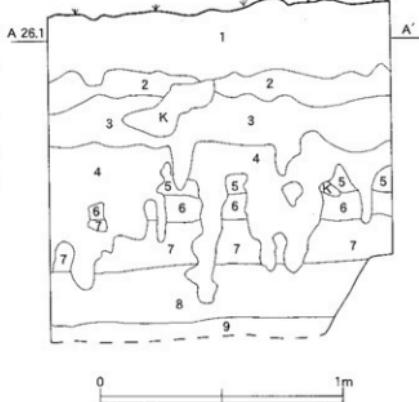
第7層は、褐色(10 YR 4/6)を呈するハードロームで、微細な赤色・黒色スコリアの他、オレンジ色粒子・青灰色粒子や炭化粒や小石が含まれる。

第8層は、褐色(10 YR 4/6)を呈するハードロームで、第7層より暗味が増し上層よりも大きな黒色スコリア・オレンジ色粒・小石を含む。

第9層は、褐色(10 YR 4/6)を呈するハードロームで、第8層よりもしまり弱い。

この基本層序の第6層は、立川ロームのVI～VII層上部層に相当するものと考えられる。

今回の調査区内では、(第4図)のテストピット(TP 1～TP 4)を設けて旧石器時代遺物の検出につとめたが、遺物は検出されなかった。



第3図 基本土層図



第4図 下郷遺跡・下郷古墳群全体図

第3章 遺構・遺物

調査エリア内では竪穴住居跡、土坑、集石、溝、古墳が確認された。各遺構の時代は、縄文時代から中近世以降にわたる。出土遺物は、旧石器時代の遺物が遺構外から出土し、縄文時代、弥生時代、古墳時代については遺構に伴って出土している。中近世の出土遺物は、出土状況が明確でない。

第1節 竪穴住居跡

調査エリア内からは、縄文時代の竪穴住居跡3軒、弥生時代の竪穴住居跡3軒が確認された。以下は時代順に述べる。

第1号住居跡(SH-1) (第5~7図 PL.2-8)

位置 調査区内北端のE・F・2・3区にて確認された。SD-1やSK-62と重複関係にあり、本住居跡が古い。SD-1の底面は、部分的に本住居跡の床面下付近まで達している。

規模と平面形 規模は4.11×3.44mで、床の最深部は0.30mを測る。平面形は楕円形を呈する。

主軸方向 N-29°-E。

壁 北北東方向の壁の一部が、SD-1やSK-62により壊されている。壁は全体的に北北東付近で残りが悪い。壁溝などは存在せず、床面から緩く立ち上がる。

床 床面に硬化面は確認できなかったが、部分的にロームブロック混じりの土が貼り床されていた。

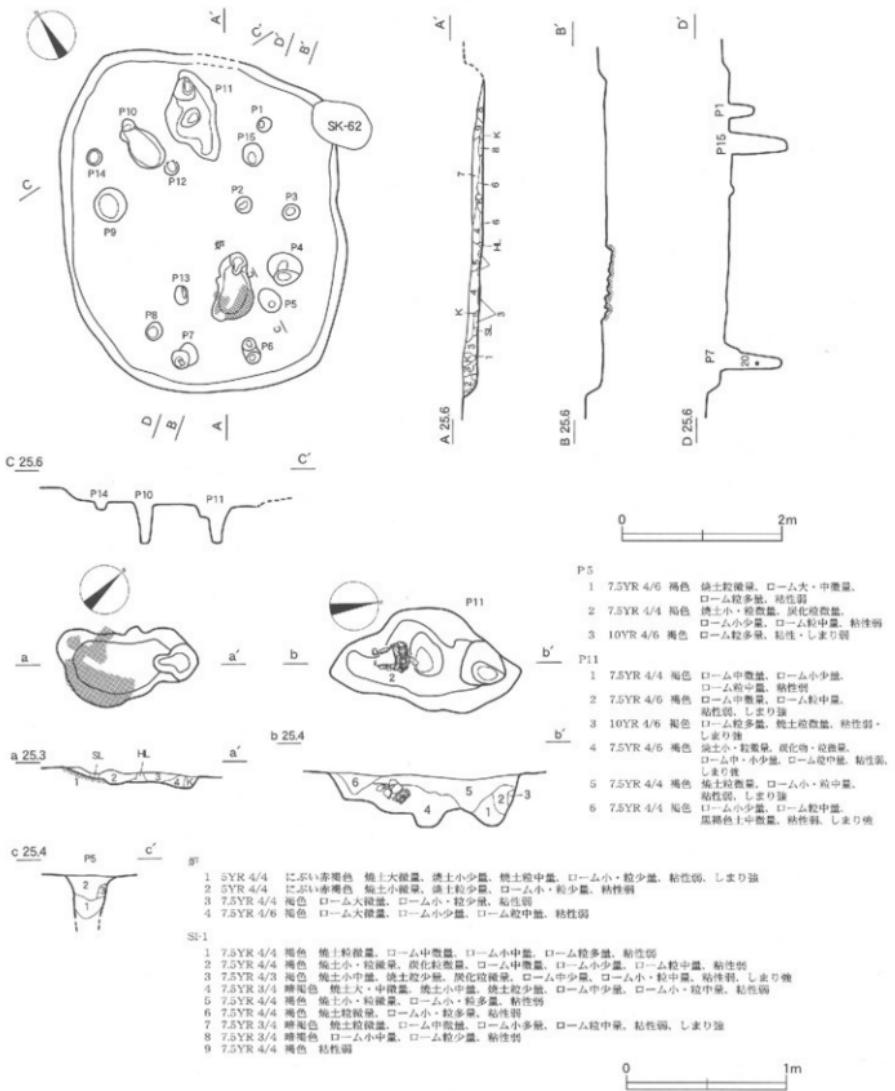
ピット 住居跡内の床面にはP1からP15までのピットが確認された。ピットの深さ(cm)は、それぞれ床からP1-27、P2-12、P3-10、P4-27、P5-81、P6-16、P7-69、P8-9、P9-18、P10-10、P11-底面-23及び底面ピット-46、P12-5、P13-26、P14-6、P15-71である。これらの中で、特に深いのはP5-7-15であり、主柱穴と考えられる。P11については床面の精査時に確認された。当ピットについては、本住居跡に伴うか否かが問題となるが、遺構確認時においてはSD-1との重複部分下にあたり、住居覆土中における重複関係は不明である。ピット土層観察では、住居跡床面と同レベル部分は、SD-1の掘り込みにより削られているものと判断される。先のことにより、ピット覆土の最上層に貼り床等も確認されていない。しかし、当ピット出土土器が住居跡内出土土器とほぼ同様な時期と判断されることや、P11の位置が炉と対をなす壁際の位置から確認されたことなどから、本住居に伴う遺構として扱った。

炉 住居跡内の南側に寄って確認され、平面形は長楕円形を呈し、深さ13cmを測る。

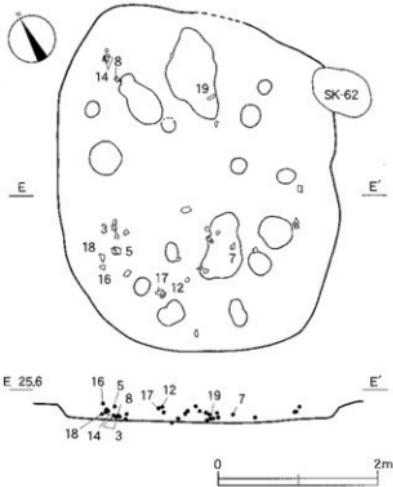
覆土 9層から構成され、第4層に焼土粒が目立って含まれる。

遺物 遺物は、住居跡内の南西側を中心に出土した。その出土状況は、覆土上位から覆土下位にわたり出土している。2の底面と底部側面の一部が欠損した土器は、P11から口縁部をピット底面方向に斜めに向け出土した。底部側面の一部は、SD-1の掘り込みにより破壊されたものか。21は磨製石斧を転用した敲打器である。石斧刃部が残っているが、大半が敲打痕によって失われている。P7内の床面から-42cmの深さから出土した。

1~5・7~10は口唇部の残る破片で、他は口縁部から胴部の破片である。1は櫛歯状工具による施文。3・5はヘラ状工具による、沈線が引かれる。7・8・11・15には半截竹管状工具による爪形文で区



第5図 第1号住居跡遺構実測図



第6図 第1号住居跡遺物出土状況図

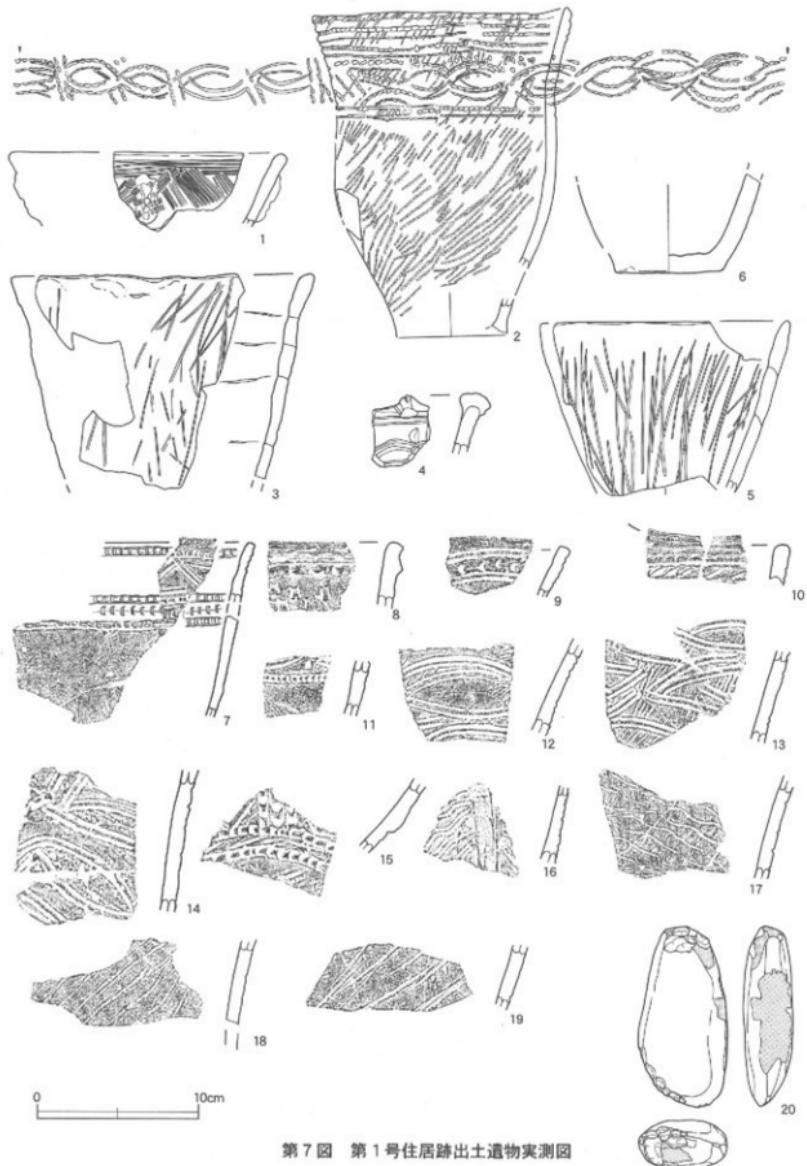
S-1

出所番号	器種	剖面値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考			
第7図 深鉢	A (17.0)		外輪する口縁部で、平底。口唇部内張状。口唇下に櫛歯状工具による横位施文・斜位施文。粘土貼付し側面にも同施文。上面には押文。	砂粒○、雲母△	5%			
1	B (4.8)			褐色				
2 深鉢	A (15.7)		脇部がやや膨らみ、頭部で折れこむ部が裏返る。底面欠損。口唇部内張状で、半截竹管状工具により有筋平行施文間にはすき文が描かれて、後に有筋平行施文による連結木葉文が重複して施文される。一部の張繩文間に縦位の斜位施文。地紋は器面全体にR撫文施文。	砂粒○、雲母△	95%			
	B (19.9)			にぶい褐色	P11出土			
	C (6.8)			良				
3 深鉢	A (18.6)		脇部から直傾する口縁部で、芯部平緩。口唇部内張状。内面に輪縞模様あり。	砂粒○、小石	20%			
	B (12.6)		器面は荒れ、へら打ち具による難い沈痕が引かれ。	にぶい褐色	覆土・下層出土			
4 深鉢	B (4.3)		口縁部破損。口唇部は円環状で突起が付き、合着するように斜位施文が見られる。器面には半截竹管状工具による平行施文が見られる。	砂粒○、黒色粒○	5%			
5 深鉢	A (15.2)		脇部から直傾する口縁部で、口唇部内張状。内面に輪縞模様あり。外表面は全体にケズリがなされ、へら打ち具による難い沈痕が引かれる。	砂粒○、赤色粒○	30%			
	B (10.5)			にぶい褐色	覆土上層出土			
6 深鉢	B (5.5)		底面からやや膨らみ外傾する輪縞。底面はナデラされている。内外面荒れる。	砂粒○、小石	15%			
	C 6.6			にぶい褐色	8片接合			
出所番号	器形	文様	特徴	胎土の特徴	備考			
第7図 7	側面部から口縁部へ外傾する深鉢で、地紋文により区画された口縁部又縁部内に輪縞状文。			砂粒○、赤色粒△	覆土・中層出土			
8	口唇部内張状。	口唇下に平行施文、低峰起唇、斜位施文が見られる。低峰起唇上に刻划文。		砂粒○、素色粒△	覆土上下層出土			
9 浅鉢	か	円環状の口唇部。口唇下に2条の平行施文。その間に刻划文。一部弧線文も見られる。		砂粒△、赤色粒△				
10 深鉢	口縁部の口唇部。	口唇下に輪縞模様。その下に斜位刻み。		砂粒○	接合板あり			
11 深鉢	口縁部	地紋文と刻文が凹込まれ。区画内に張繩文や刻文。地紋は附加条1種繩文。		砂粒○、赤色粒△				
12 深鉢	口縁部	地紋文と刻文。半截竹管状工具による分離木葉文。		砂粒○	覆土中層出土			
13 深鉢	口縁部	地紋文。半截竹管状工具による分離木葉文。		砂粒○	12と同一			
14 深鉢	口縁部	地紋文。半截竹管状工具による張繩文内外には地紋擦痕。		砂粒○、角穂	覆土下層出土			
15 浅鉢	か	口縁部薄文部分。地紋L。爪形文に接まれた低峰起唇。低峰起唇上に斜め刻み。		砂粒○、赤色粒△				
16 深鉢	口縁部	地紋文。中央に粘土貼付がされ、その両側に半截竹管状工具による輪縞状文。		砂粒○				
17 深鉢	口縁部	地紋文と刻文。地紋文に附加条2種繩文L+T。		砂粒○				
18 深鉢	口縁部	地紋文と難い刻文。		砂粒△、赤色粒△、雲母△				
19 深鉢	口縁部	へら打ち具による難い沈痕文。		砂粒△、赤色粒△				
出所番号	注記番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材名称	備考
第7回	SI-1PT7No.1	戚打胎	11.1	5.5	3.0	285.0	蛇紋岩	当初は磨製石斧

画された口縁部文様帶が見られ、区画内に同施文具による文様が描かれている。10は、半截竹管状工具をロッキングさせた有筋平行施文が描かれる。地紋は、12・13・18が撫文系、11・17が附加条繩文、14・15には繩文が施文されているが、9・15は施文の特徴から浅鉢形土器と考えられ、他は深鉢形土器と考えられる。

遺構内から出土した自然礫は1,892gである。

所見 本住居跡のP 11 出土土器は、出土状況から埋納を目的としたものと考えられる。本住居跡から出土した土器は、その特徴から繩文時代前期後半の浮島式期のものといえる。



第7図 第1号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡(SI-2) (第8図 PL 2・8)

位置 調査区内中央のG-8・9区にて確認された。SK-27と重複関係にあり、本住居跡が古い。

規模と平面形 規模は3.08×2.4mで、床の最深部は0.17mを測る。平面形は橢円形を呈する。

主軸方向 N-71°-W。

壁 北方向の壁の一部が、SK-27により壊されている。壁は床面から緩く立ち上がる。

床 床面の炉残欠の周辺に若干硬化面が確認できたが、ほとんどは軟弱である。

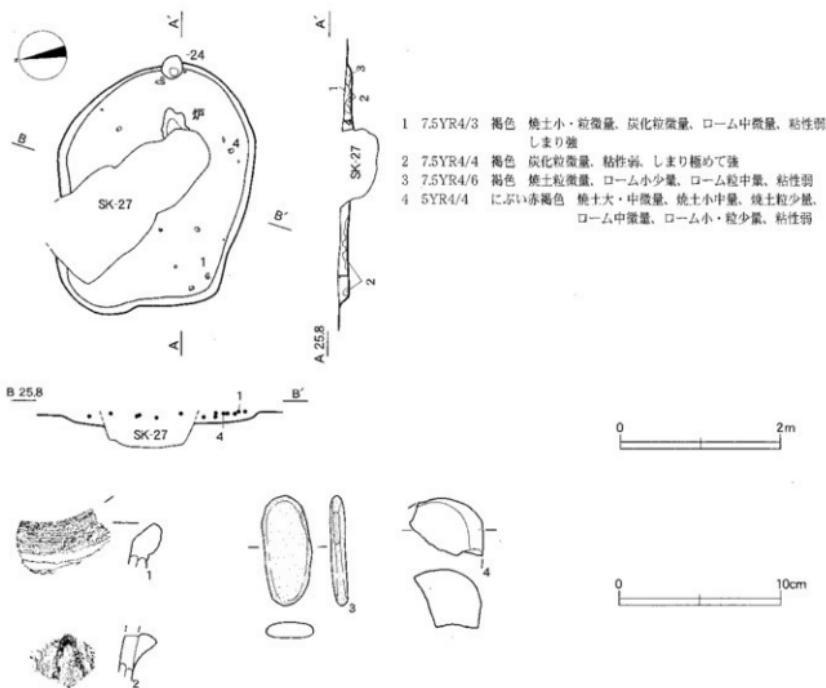
ピット 住居跡内の東端の壁には、ピットが1つだけ確認され、その深さは床から-24cmである。

炉 住居跡内の東側に寄って確認され、平面形は長楕円形を呈すようであるが、SK-27により大きく壊されている。炉床には焼土が一部見られ、全体的に焼固した様子が観察された。

覆土 4層から構成され、第4層に焼土ブロック・粒が目立って含まれる。

遺物 遺物は、住居跡内の覆土中層から出土した。遺物は土器小片が多い。1・2は縄文土器破片で、1は波状口縁部の破片で、2は胸部破片である。

3は敲打器。側縁の一部に凸面の敲打痕が認められる。4は研磨器の破片。



第8図 第2号住居跡遺構実測図・出土遺物実測図

遺構内から出土した自然礫は961gである。

所見 本遺構は、炉の残欠が存在することや一定の掘り込みがあることから、竪穴住居跡とした。その時期については出土遺物から、縄文時代中期中葉のものと考えた。本住居跡から出土した土器は、1・2の縄文時代中期中葉のもの以外に、図示していないが前期後半のものも出土している。本住居跡の時期的な位置付けは前者の土器により判断した。

SI-2

図版番号	器 形 及 び 文 標 の 特 徴				胎土の特徴	備 考
第8図1	波状口縁深鉢の口部破片で、内面内削ぎ式。口唇部に沿って太い浅縁施文化。				石英○、長石○、雲母○	表土上層出土
2	深鉢側面破片。隆起線が下方に向く。隆起線に沿って次筋文施文化。				石英○、長石○、雲母○	阿玉台式
図版番号	注記番号	器 形	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
第8図3	SI 2 No.31	敲打器	6.7	2.8	0.8	29.3
4	SI 2 No.11	研磨器	(3.6)	(4.5)	3.6	(60.9)

第3号住居跡(SI-3) (第9～13図 PL 2・8～10)

位置 調査区内南東端のK・L-15・16区にて確認された。

規模と平面形 規模は5.06×2.94mで、床の最深部は0.35mを測る。平面形は隅丸長方形を呈する。

主軸方向 N-53°-W。

壁 壁は床面から直に立ち上がる。

床 床面にはロームブロックが多く見られやや硬く、炉の周辺に若干硬化部分が確認できた。

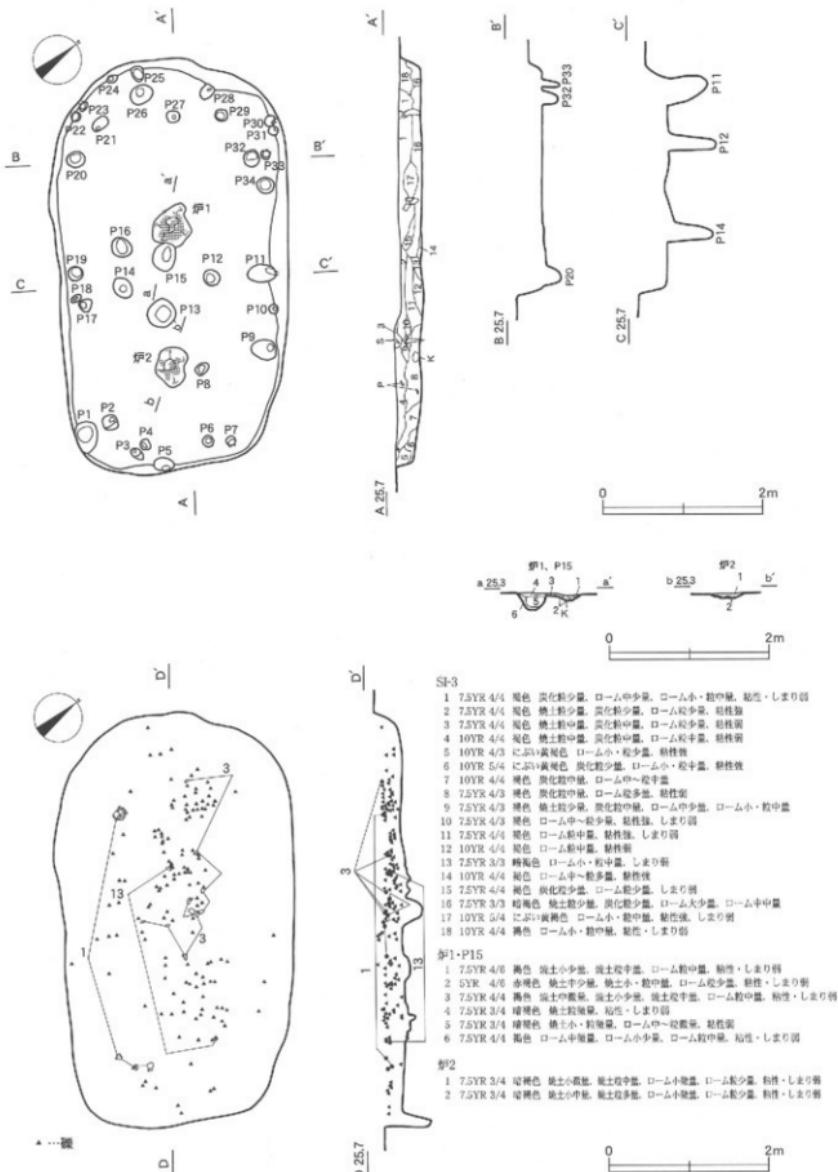
ピット 住居跡内の壁際に多く確認され、炉1・2の周辺にも多い。ピットの総数は34ヶ所で、それぞれの床面からの深さ(cm)は、P 1.-29、P 2.-18、P 3.-15、P 4.-14、P 5.-32、P 6.-13、P 7.-15、P 8.-10、P 9.-33、P 10.-5、P 11.-52、P 12.-57、P 13.-4、P 14.-58、P 15.-21、P 16.-7、P 17.-10、P 18.-12、P 19.-36、P 20.-36、P 21.-20、P 22.-25、P 23.-26、P 24.-8、P 25.-17、P 26.-60、P 27.-7、P 28.-20、P 29.-20、P 30.-8、P 31.-5、P 32.-15、P 33.-5、P 34.-15である。深さ25cmを越えるものをあげると、P 1・P 5・P 9・P 11・P 12・P 14・P 19・P 20・P 22・P 23・P 26であり、P 11・P 12・P 14・P 26は50cmをも越える。特にP 11・P 12・P 14の並びは住居跡内中央を分断するように並び、上屋構造上の主要な柱の痕跡とも考えられる。

炉 住居跡内の中央部に2ヶ所確認され、北西側のものを炉1、南東側のものを炉2とした。平面形はいずれも橢円形を呈する。炉床は炉2より炉1の方が被熱焼土化している。炉床の深さは炉1が7cm、炉2が6cmを測る。炉1の南東縁にはP 15があり、炉との関連性が考えられる。P 15覆土最下層の第6層には焼土粒等は含まれず、第4・5層には焼上粒等が含まれていた。

覆土 覆土は全部で18層から構成される。第3・4層に焼土粒が含まれ、第3・4・7・8層に炭化粒が含まれている。第2・3・10・11・12・13層は、覆土堆積後に掘り込まれたような状況を示している。遺物の出土状況図を見ても、同所付近の疊の分布が散漫な様子が見られ、何らかの影響を受けていると観察される。しかしながら、出土土器の状況からは時期の異なる遺構との重複は読み取れない。

遺物 遺物は土器片と礫・石器が出土している。特に礫は自然礫・被熱礫が数多く出土している。自然礫は遺構内で9,755g出土し、被熱礫603gが出土している。これら遺物の出土状況は、住居跡内の覆土中層を中心に壁際では希薄で、中央部では濃密さを持って出土している。

出土土器は、大きく分けると羽状縄文系土器群と表面縄文・裏面条痕文土器の2種類が混在して出



第9図 第3号住居跡遺構実測図・遺物出土状況図

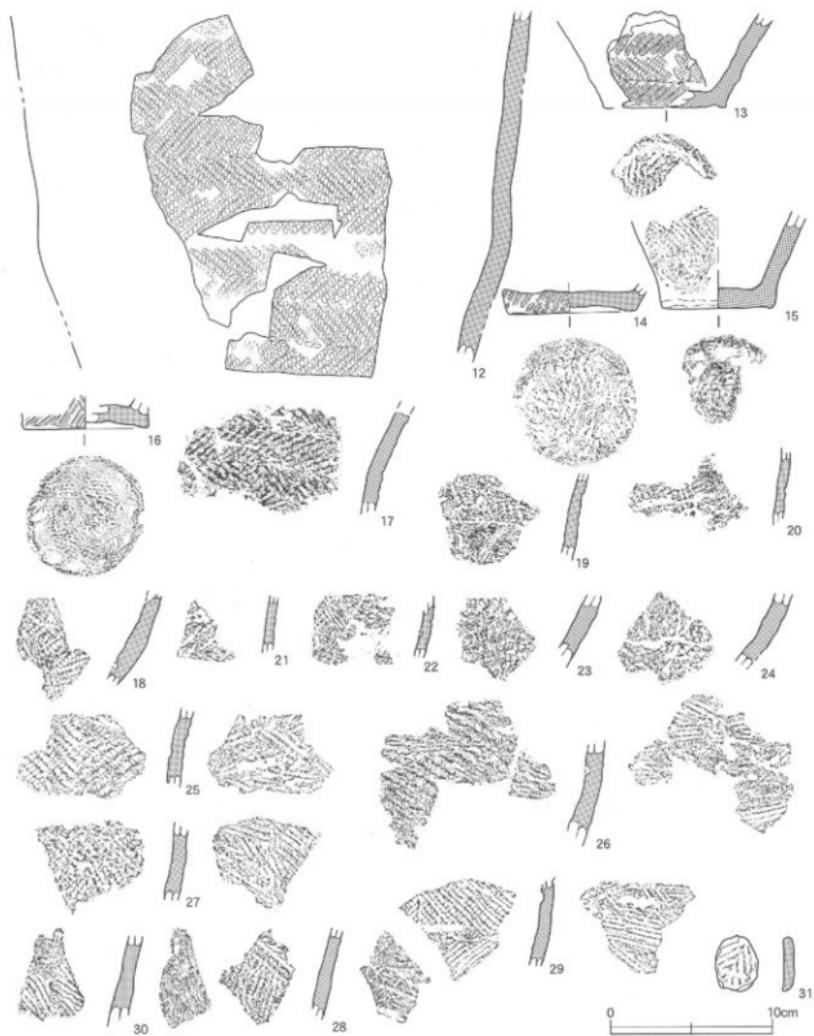
SI 3

図版番号	器種	計測値(cm)	若 幹 及 び 文 横 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考			
第10回 1	深 鉢	A (24.8) B (14.8)	平底の土器で、一部片口状に盛んでいる。口唇部には一部にのみ条痕文。腹、施文部は平地。他は石化。器形は、側部下半で両曲し、口唇まではほぼ直立する。柄部から上には、放射狀のある貝殻模様による刻印単位の条痕文を斜め、横方向に施す。両曲部から下は、RLとLR施文別原体による羽状縞文。内面には織維痕目立つ。	白色粒△、織維○ にぶい黄褐色 良	30% 覆土上層出土			
3	深 鉢	A (30.0) B (28.8)	口縁部は非常に緩い波状を呈するように思える。口唇部は舌状をなし、肥厚する。側部が緩く膨らみ、頭部で緩く外反する。縞文はRLが全面に施文される。内面には全体に植物質のもので縱方向にナゲた痕跡あり。	白色粒△、赤色粒△、織 縞△ 褐色 良	20% 覆土上・中層 出土			
5	深 鉢	A (18.2) B (7.1)	波状口縁の土器で、口唇部が部分的に有段化し緩く外反。口部は舟棒状。縞文はRL・LR施文別原体による羽状縞文。内面平番に働く。	白色粒△、織縞○ にぶい赤褐色 良	20% 覆土上・中層 出土			
11 12	深 鉢	B (7.1)	肩部から外反。上部には、口縁部文様と区画下部に微隆起線。微隆起線に平行して沈模もしくは、施文原体重壓が認文。内面に削突が伴う斜糸の微隆起線と刻文が見られる。RL・LR施文別原体による羽状縞文。	白色粒△、赤色粒△、織 縞○ にぶい褐色 良	30% 覆土中層出土			
		B (21.7)	側部下半に立下りの変換点があり、外反する。胎土にはRL・LR施文別原体による羽状縞文。施文原体の末端部厚度が残る。内面平番に磨く。外面部上半に炭化物付着、下半は被熱する。	白色粒△、赤色粒△、織 縞△ にぶい黄褐色 良	20% 覆土中層と表面 近くのもの複合			
13	深 鉢	B (5.3) C (7.4)	底部破片。底面はやや上げ底。胎土には0段多条のLRとRL施文別原体による羽状縞文。底面に縞文施文。	白色粒△、赤色粒△、織 縞○ にぶい赤褐色 良	10% 覆土中層出土			
14	深 鉢	B (1.2) C (7.8)	底部破片。底面は上げ底。胎土には0段多条のLR施文施文。底面に縞文施文。底面削除して乳白色の付着物あり。被熱により變色する。	砂粒△、織縞△ 灰褐色 不良	5% 覆土中層出土			
15	深 鉢	B (5.4) C (6.6)	底部破片。底面はやや上げ底。RL・LR施文による羽状縞文施文。底面に施文施文。外面部被熱した。内面半削。	白色粒△、赤色粒△、織 縞○ 明赤褐色 不良	10% 覆土下層出土			
16	深 鉢	B (1.3) C 7.6	底部破片。底面は上げ底。表面に斜め方向の条痕文施文。内面には条痕文施文なし。外面部被熱し赤化。底面に条痕文施文。	砂粒△、白色粒△、織 縞○ 明赤褐色 良	10% 覆土中層出土			
図版番号	器種	計測値(cm)	若 幹 及 び 文 纵 の 特 徴	胎土の特徴	備 考			
第10回 2	No.1と同一破片。胎部下半の器形。外延短く条痕施文・縞文施文。			妙粒△、織縞○				
4	深鉢形表凹縫口。縫口部が緩く有段化し外反。RL・LR施文別原体による羽状縞文。内面平滑。			白色粒△、織縞○	覆土中層出土			
6	深鉢形表凸縫口。口唇部が縫口部より有段化。RLとRL施文別原体による羽状縞文。			白色粒△、織縞○	覆土上層出土			
7	深鉢の口縫部が緩く有段化。器面と口縫部に施剥跡のある貝殻模様により剥引・押し引き文。			白色粒△、織縞○	覆土上層出土			
8	深鉢形表凸縫口。表面に剥剝跡のある貝殻模様により剥引・押し引き文。内面に削痕。			白色粒△、織縞○	覆土中層出土			
9	小型十脚。底面口縫か。脇面と口縫部に施剥跡のある貝殻模様により剥引・押し引き文。			織縞○	覆土下層出土			
10	深鉢形表凸縫口。脇面と口縫部に施剥跡のある貝殻模様により剥引・押し引き文。底面に炭化物付着。			白色粒△、織縞○				
第11回 17	深鉢形表凸縫口。表面にRL・LR施文別原体による羽状縞文。			白色粒△、織縞○				
	尖底上部底付近か。RL・LR施文別原体による羽状縞文。			白色粒△、織縞○	覆土中層出土			
18	深鉢形表凸縫口。表面にRL・LR施文別原体による羽状縞文。			白色粒△、織縞○	覆土中層出土			
19	深鉢形表凸縫口。表面にRL・LR施文別原体による羽状縞文。下に放射狀のある貝殻模様により剥引・押し引き文。			白色粒△、表凸△、織縞○				
20	深鉢形表凸縫口。表面に剥剝跡のある貝殻模様の押し引き文。内面方向の削痕。被熱による赤化。			白色粒△、織縞○				
21	深鉢形表凸縫口近くの破片か。剥剝跡のある貝殻模様により剥引・押し引き文。			織縞○	覆土下層出土			
22	深鉢形表凸縫口。表面に剥剝跡のある貝殻模様により剥引・押し引き文。			白色粒△、織縞○				
23	深鉢形表凸縫口。表面にRL施文・表凸後文等の裏面に条痕文施文。被熱により赤化。			白色粒○、織縞○	覆土中層出土			
24	底部付近か。表面にRL施文施文。被熱により赤化。			白色粒○、織縞○	覆土中層出土			
25	深鉢形表凸縫口。表面にRL・LR施文別原体による羽状縞文。			白色粒○、織縞○	覆土中層出土			
26	深鉢形表凸縫口。表面にRL施文施文。裏面に条痕文施文。			白色粒○、表凸△、織縞○	覆土中層出土			
27	深鉢形表凸縫口。表面にRL施文施文。裏面に条痕文施文。			白色粒○、織縞△	覆土中層出土			
28	深鉢形表凸縫口。表面に条痕文施文。裏面に条痕文施文。			白色粒△、織縞○	覆土中層出土			
29	深鉢形表凸縫口。表面にRL・LR施文別原体による羽状縞文施文。裏面に条痕文施文。			白色粒△、織縞○	覆土中層出土			
30	深鉢形表凸縫口。表面に条痕文施文。			白色粒○、織縞△	覆土中層出土			
31	土製内盤。表面に羽状縞文施文。			織縞△				
図版番号	注記番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石片名稱	備 考
第12回32 33	SI-3 No.19 SI-3 No.263	石 磬	1.84	1.46	0.38	1.3	チャート	
34	SI-3 No.28	石 磬	1.46	1.33	0.38	0.8	チャート	摩擦痕あり
35	SI-3 No.251	尖頭器	2.45	1.60	0.59	2.3	チャート	刺離角122°
36	SI-3 1区	楔状石器	2.07	2.64	0.78	5.5	チャート	
37	SI-3 No.236	楔状石器	2.77	1.74	1.25	6.3	チャート	
38	SI-3 1区	楔状石器	3.50	2.74	1.33	9.8	チャート	
39	SI-3 No.146	複刃器	4.50	2.66	0.88	(11.0)	ガラス質黑色安山岩	
40	SI-3 No.255	石 悪	3.20	1.76	0.39	1.8	チャート	刺離角112°
第13回41 42	SI-3 3区	石 磬	2.09	1.61	0.63	2.1	硬質白雲石	元ナイフ形石器



第10図 第3号住居跡出土遺物実測図(1)

土している。主体は前者で、多くの接合関係が見られ、形態が復元できる。大型土器片は覆土上層から目立って出土している。25～29は表面繩文・裏面条痕文の土器で、遺構内から他の遺物と同様な出土状況が見られた。後者の特徴として、胎土には大粒の白色粒が多く含まれる傾向が見られ、また



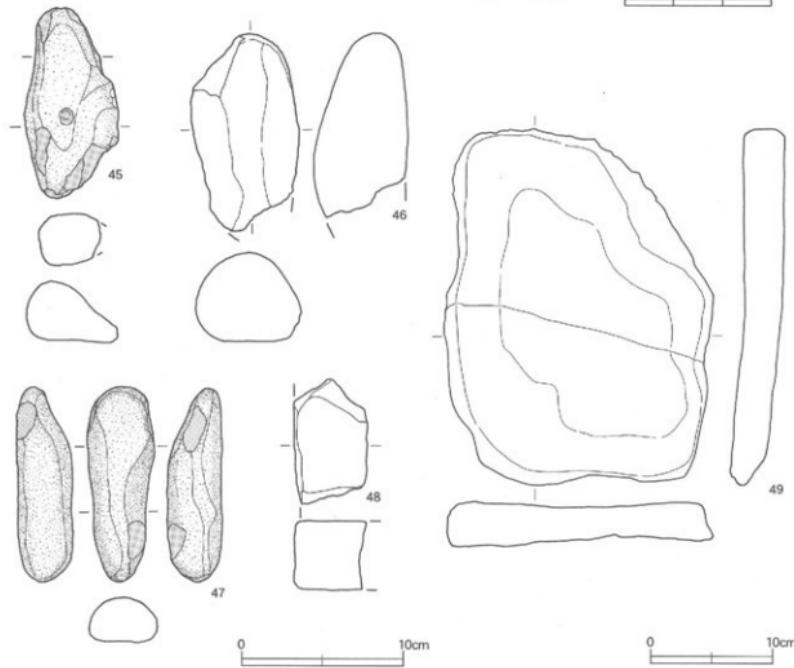
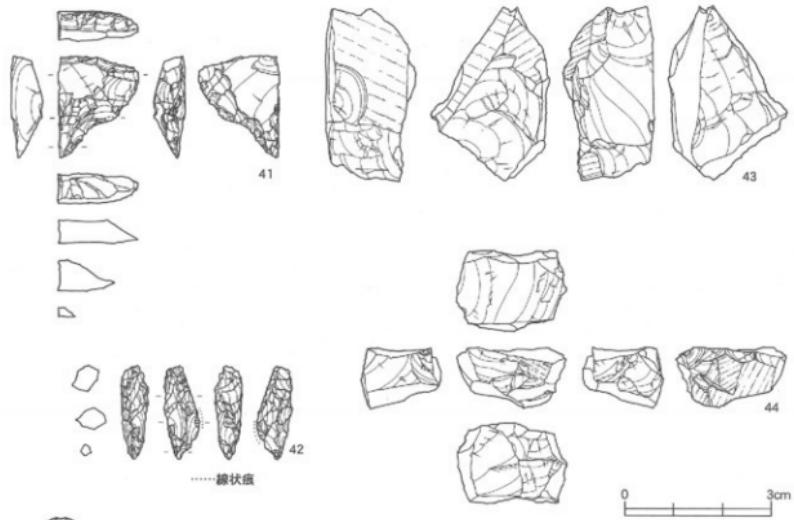
第11図 第3号住居跡出土遺物実測図（2）

縄文施文方法でも縦回転施文が見られる。

石器は遺構内から石鏨3点、尖頭器1点、楔状石器3点、撃器類2点、石錐2点、剥片11点、石核2点、敲打器4点、石皿3点の合計31点を検出した。石鏨は三角形鏨(32・33)と円基無茎鏨(34)がある。尖頭器(35)は周縁加工によって木葉形に整形している。楔状石器(36～38)は器体の一部に両極打



第12図 第3号住居跡出土遺物実測図(3)



第13図 第3号住居跡出土遺物実測図(4)

図版番号	注記番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重積(g)	石材名称	備考
第13図42	SI-3 No.163	石錐	1.93	0.74	0.54	0.8	チャート	摩擦・錐状痕
43	SI-3 No.66	石核	3.61	1.86	2.43	16.2	チャート	
44	SI-3 No.20	石核	1.23	2.25	1.62	5.7	チャート	
45	SI-3 No.224	敲打器	11.6	5.8	4.0	278.2	砂岩	被熱半化粧使用
46	SI-3 No.44	敲打器	(12.1)	6.5	5.7	(487.0)	花崗閃緑岩	
47	SI-3 No.288	敲打器	11.9	4.2	3.1	196.9	砂岩	
48	SI-3 No.212	石皿	(7.6)	(4.6)	4.2	(229.5)	結晶片岩	
49	No.167+No.272	石皿	29.2	22.0	3.7	3,890	花崗閃緑岩	折損面で接合

撃による潰れ線状打面が認められる資料で、形状は多様である。搔器類では周縁加工の複刃搔器(39)と側縁の一部に抉り加工を施した「石匙」(40)を含む。石錐(41・42)の内、41は風化面の状態から旧石器時代のナイフ形石器を転用して錐部を整形した資料と考えている。42は棒状で、側縁の一部に明瞭な線状痕を伴う摩滅曲面が認められる。石核(43・44)は、打面転位を繰り返し不定形剥片を剥離していたと考えられる。石皿は3点あり、内2点は接損面で接合したもの(49)で、使用面にあまり窪みが生じていない。剥片は1cm前後の小型の資料が大半で、これらには節理の発達が弱いチャートが使用されている。

所見 出土土器の主体は、前期初頭の花積下層式土器として位置付けられるものである。破片資料として条痕文系土器群の系統にある表面繩文・裏面条痕文土器も出土しているが、前者の土器とは時間的な隔絶があると考えられる。前者と後者の遺存状況や胎土の違いについても、それを裏付けるものと考える。よって、住居跡の時期は前期初頭の花積下層式期として位置付ける。表面繩文・裏面条痕文土器については、前時期のものが埋没時に入り込んだものと考える。

第4号住居跡(SI-4) (第14～17図 PL 3・10-11)

位置 調査区内中央のH・I-6・7区にて確認された。SK-11と重複関係にあり、本住居跡が古い。

規模と平面形 規模は5.34×4.12mで、床の最深部は0.32mを測る。平面形は梢円形を呈する。

主軸方向 N-37°-W。

壁 南壁の一部が、SK-11により壊されている。壁は床面から緩く立ち上がる。

床 床面は全体的に炉に向けて緩く下がる。床の硬化面はP 2・3の間と、炉の北東部に確認できた。図示されてはいないが、炉の北東部の硬化面下には深さ15cmのピットが確認された。

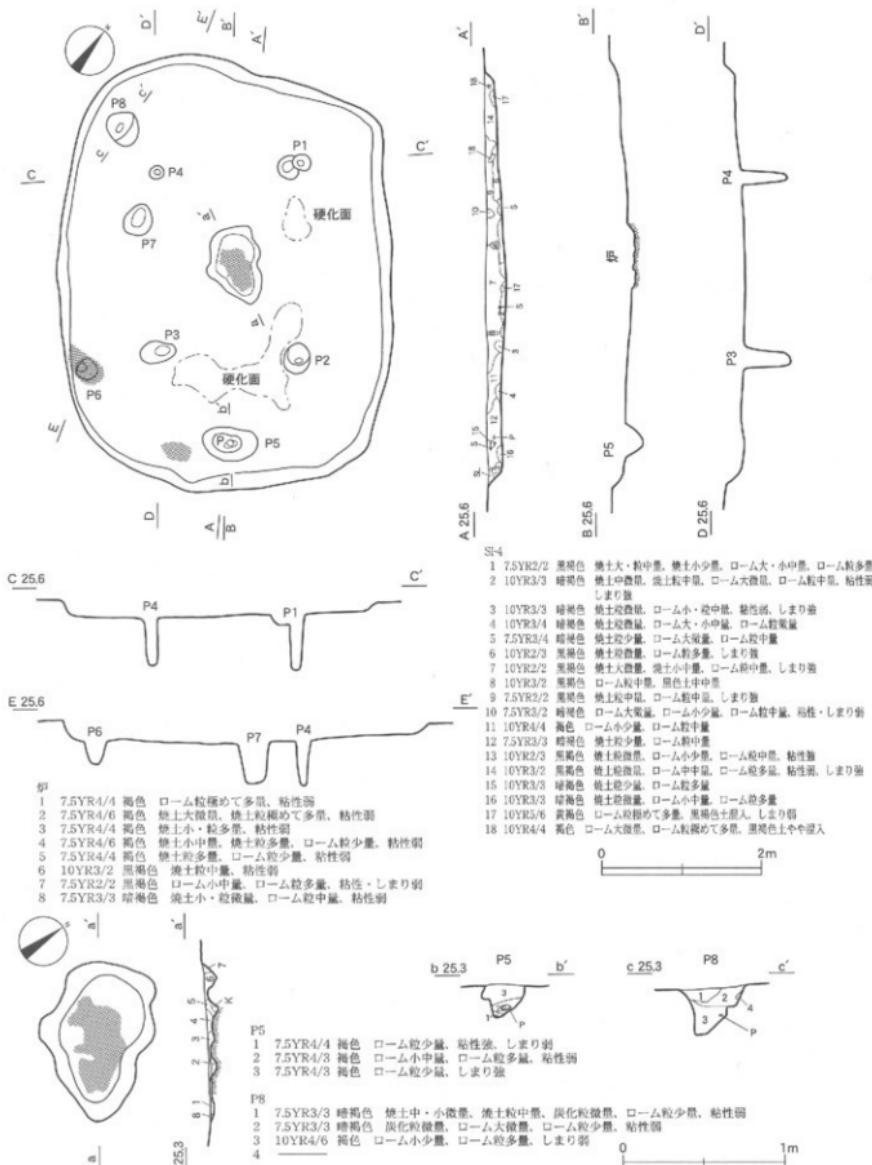
ピット P 1～4が主柱穴と考えられ、P 5が出入口に関わるピットと考えられる。P 6・7・8については、不明である。ピットのそれぞれの深さ(cm)は床面から、P 1・-70、P 2・-69、P 3・-61、P 4・-59、P 5・-38である。

炉 住居跡内の主柱穴に囲まれた中央部から確認され、平面形は長梢円形を呈し、炉床南側が良く焼けている。炉床やその周辺からは石英の微細剥片が出上している。

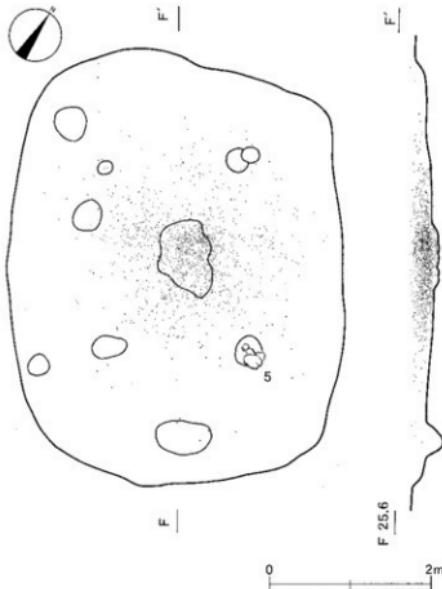
覆土 18層から構成され、P 5・6付近の覆土中層に焼土の堆積が見られた。第7層は黒褐色土で焼土粒が多く含まれているが、炭化物は含まれていない。壁際の上層にはローム粒が多く含まれる。

遺物 遺物は、土器・石器と石英の微細剥片が多量に出土した。土器の出土量は少ない。

5はP 2の上層から出土し、3はP 7内、7はP 5内、18はP 8内、8・13は床面近くから出土している。1・4・14・15は同一個体かと考えられる。3・10も同一個体と考えられる。11～13は櫛齒状工具による施文がなされる。16・17は絡条体により、18・19は附加条1種による施文で、19は羽状



第14図 第4号住居跡遺構実測図



第15図 第4号住居跡石英出土状況図

その特徴から敲打痕付石器と呼ぶ。特に23～25は長軸の両端部に敲打痕が、面として見られる。26は稜縁の各所や面的にも敲打作業による潰れが見られる。27・28は上端部には敲打痕が残り、下端部は欠損したものか。29は出土石英中で一番重量のあるものである。上下端面は他の面に比べ大きな敲打面を残す。また多くの剥離面が残り、整形が行われたものか。30・31は接合資料である。30は住居跡内の中央部から出土し、31は北西壁寄りから出土した。

これら石英製の敲打器や剥片を観察すると、滑らかな自然面が一部に残るものが多く、転石を利用していることが分かる。これらの石器の材料となるものは、転石でも完全な円礫ではなく、やや角の残るものである。剥片の打面を観察すると、両極打撃によると考えられる潰れ線状打面の資料が多いが、その他の単・複剥離面打面が使用されたものも含まれている。

これら石英の敲打器・剥片を含めた1,299点の重量別内訳は、1g以下が927点、1.1g以上10g以下が325点、10.1g以上20g以下が24点、これら合計で全体の約98%を占める。

所見 本遺構で出土した土器は、その特徴から弥生時代後期前半に位置付けられると考えられる。また住居跡内からの石英剥片等の多量出土状況は、土浦市内の遺跡を見る限り、特に後期前半の時期を中心として特徴的に検出されているようである。

石英出土状況

重さ 区分	1g 以下	1.1g 以上 10g 以下	10g 以上 20g 以下	20g 以上 30g 以下	30g 以上 40g 以下	40g 以上 50g 以下	50g 以上 60g 以下	60g 以上 70g 以下	70g 以上 80g 以下	80g 以上 90g 以下	90g 以上 100g 以下	100g 以上 1.00.1g 以上	総 合 数
個数	927	325	24	6	6	2	4	0	1	0	0	4	1,299

構成をとる。6・7・8の底部は、使用による摩耗が感じられない。5の土器はP 2の柱穴上から出土し、胎土の色調は他のものと異なる。

出土土器の特徴は、口縁部に明瞭な複合口縁を持ち、その下端部に押圧を行っている。頸部には櫛歯状工具による施文を行っている。胎土には石英・長石粒・白雲母が含まれている。

本遺構内からは、石英の剥片や敲打器と考えられるもなどを含め1,299点出土し、重量にすると合計で3,437.8gになる。その出土状況は第15図の如く、平面では住居跡内の4本の主柱穴に囲まれた範囲内を中心に出土した。特に断面図における、炉上の覆土中層部分は濃密な出土状況を示している。

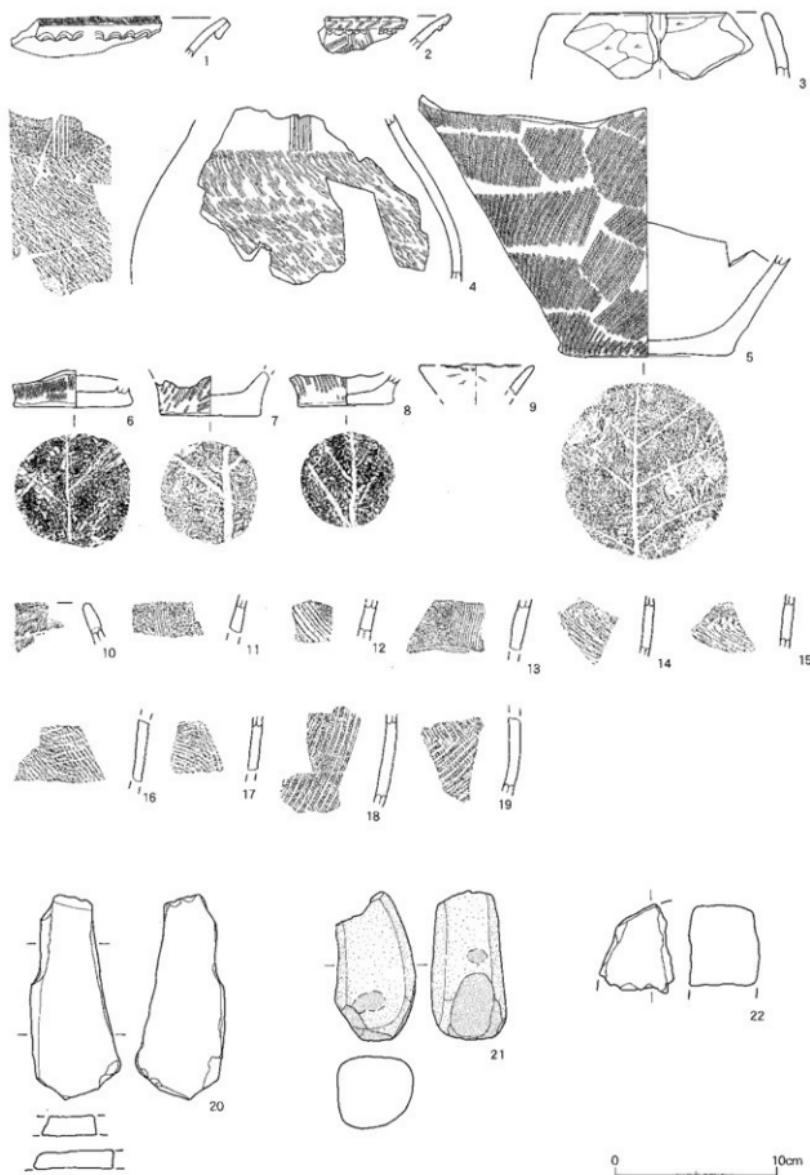
20は偏平礫を使用した砥石。21は角棒状礫を使用した敲打器であり、5の土器の脇から出土した。22は石皿の破片。23～31はいずれも石英製の敲打器と考えられ、

31は接合資料である。30は住居跡内の中央部から出土し、31は北西壁寄りから出土した。

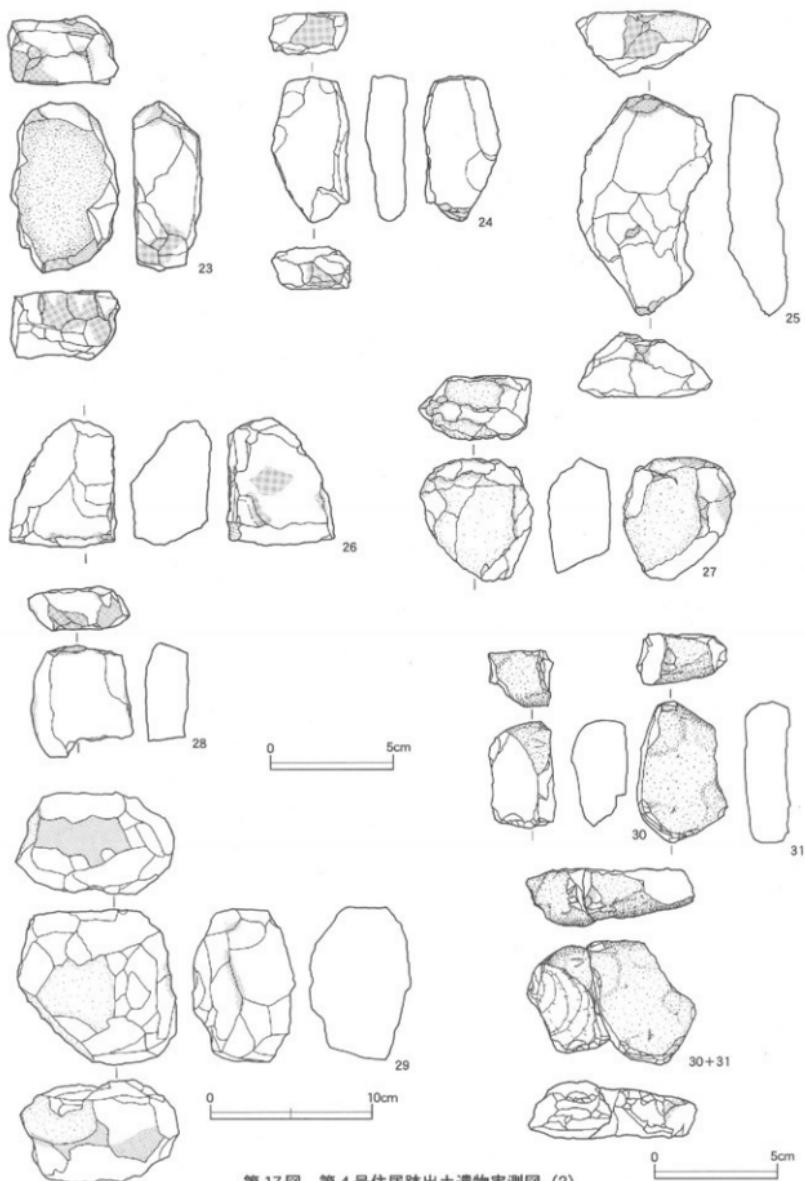
これら石英製の敲打器や剥片を観察すると、滑らかな自然面が一部に残るものが多く、転石を利用していることが分かる。これらの石器の材料となるものは、転石でも完全な円礫ではなく、やや角の残るものである。剥片の打面を観察すると、両極打撃によると考えられる潰れ線状打面の資料が多いが、その他の単・複剥離面打面が使用されたものも含まれている。

これら石英の敲打器・剥片を含めた1,299点の重量別内訳は、1g以下が927点、1.1g以上10g以下が325点、10.1g以上20g以下が24点、これら合計で全体の約98%を占める。

所見 本遺構で出土した土器は、その特徴から弥生時代後期前半に位置付けられると考えられる。また住居跡内からの石英剥片等の多量出土状況は、土浦市内の遺跡を見る限り、特に後期前半の時期を中心として特徴的に検出されているようである。



第16図 第4号住居跡出土遺物実測図(1)



第17図 第4号住居跡出土遺物実測図(2)

SI-4

図版番号	器種	計測値(cm)	諸 形 及 び 文 標 の 特 徴	胎土・色調・施成	備 考			
第16図 1	広口瓶	B (2.5)	肩みのある複合口縁の破片。複合口縁部下端に指標(爪先)痕が巡る。口 唇部に横文と施文。口縁部と肩部は無文。	石英O、長石O、雲母O 暗褐色 良	5% 4と同一個体			
2	広口壺	B (2.2)	複合口縁の破片。複合口縁部下端に施綱を引き、その上を棒状工具で押圧。 U縁部と口唇部には附加条1種(付加2条)施文。肩部には2本単位の施文具 により、縦文と斜位の波線。	石英△、長石△、雲母△ 茶褐色 良	5%			
3	鉢?	A (13.2) B (4.0)	口縁部は内傾する。器面ハラ割りの後ナデ。口唇部は丸みを持つ。	石英O、長石O、雲母O 赤色粒 にぶい褐色 良	5% P7内出土			
4	広口壺	B (10.3)	肩部に最大径を持ち、肩部がすぼまる。肩部には5本単位の櫛縄文施文。 肩部の純文は直前段反燃りRRまたは、附加条1種(付加2条)輪不明で付加 輪反燃りほか。	石英O、長石O、雲母O 暗褐色 良	20% Iと同一個体			
5	壺	B (15.2) C 10.5	大型の底部破片。底部から肩部に外反する。器面には附加条1種(付加2 条)LR+2R。底面に木葉痕、内外面覗れる。	石英O、長石O、雲母O 灰白色 不良	30% P2上出土			
6	広口壺か	B (2.1) C 7.4	底盤破片。接地部がめぐれ上がる。器面には1輪の櫛縄文による縦方向の 施文。底面には木葉痕。内面ナデ。器面に摩擦等なし。	石英O、長石O、雲母△ 暗褐色 良	10%			
7	広口壺か	B (6.4) C 2.4	底盤破片。器面には附加条1種(付加2条)LR+2Rで施文。底面には木葉痕 が見られ、生糞のためにわが寄る。内面ナデ。器面に摩擦等なし。	石英O、長石△、雲母△ 黒褐色 良	10% P5内出土			
8	広口壺か	B (1.7) C 5.8	底部破片。接地部がめぐれ上がる。器面には附加条1種(付加2条)。輪純不 明。付加輪無し。底面には木葉痕。内面ナデ。器面に摩擦等なし。	石英O、長石O、雲母△ 緑褐色 良	10% 床直出土			
9	ミニチフ	A (.70) B (1.0)	口縁部破片。口縁部がハの字形に開く。口唇部つまみ上げ。外面に輪状痕 あり。内外面ナデ。	石英△、長石△、雲母△ にぶい褐色 良	10%			
図版番号	器 形 及 び 文 標 の 特 徴		胎土上の特徴		備 考			
第16図10	3と同一破片。口縁部に輪状痕あり。外面削り。		石英O、長石O、雲母△					
11	頭部の破片。肩に6本単位の櫛縄文工具による施文。		石英O、長石O、雲母△					
12	頭部の破片。肩位に2本単位の櫛縄文工具による施文。		石英O、長石O、雲母△					
13	頭部の破片。肩に12本単位の櫛縄文工具による施文後に横位の波綱。		石英O、長石O、雲母△		床直出土			
14	頭部から胴部の破片。4と同様な縦文施文。胴部にはへら扶工具による格子目文。		石英O、長石O、雲母△					
15	頭部から胴部の破片。4と同様な縦文施文。頭部は無文。		石英O、長石O、雲母△					
16	胴部破片。器面に象鼻形のあいた輪状体と円の詰まった輪状体Rの2種類が施文。		石英△、長石△					
17	16と同一個体。胴部破片。		石英△、長石△					
18	胴部破片。器面に附加条1種(付加2条)LR+2R施文。		石英O、長石O、雲母△		P8内出土			
19	胴部破片。器面に附加条1種(付加2条)LR+2R+RL+2Lによる羽状構成。		石英O、長石O、雲母△					
図版番号	社名番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材名稱	備 考
第16図20	SI-4-No.286	鉢 石	12.6	(5.3)	1.1	(113.3)	砂 岩	豊原中層出土
21	SI-4-No.201	敲打器	9.1	4.7	4.4	333.5	閃綠岩	東南部中層出土
22	SI-4-3K	石 盆	(5.0)	(5.5)	4.2	(128.8)	閃綠岩	
第17図23	SI-4-No.1108	敲打盤付石器	7.0	4.5	2.8	122.7	石 英	中央部下層出土
24	SI-4-No.347	敲打盤付石器	6.0	3.15	1.7	43.2	石 英	中央部中層出土
25	SI-4-No.1032	敲打盤付石器	8.4	5.2	2.6	139.0	石 英	中央部下層出土
26	SI-4-No.198	敲打盤付石器	5.2	4.4	3.55	102.0	石 英	東南部中層出土
27	SI-4-No.337	敲打盤付石器	5.0	4.6	2.6	77.8	石 英	東南部中層山土
28	SI-4-No.440	敲打盤付石器	3.9	4.1	1.8	50.8	石 英	中央部中層出土
29	SI-4-No.11	敲打盤付石器	9.5	9.5	6.2	767.7	石 英	豊原上層出土
30	SI-4-No.30	敲打盤付石器	4.4	2.7	2.3	33.8	石 英	中央部中層出土
31	SI-4-No.13	敲打盤付石器	5.8	3.7	1.8	57.3	石 英	豊原上層出土

第5号住居跡(S-5) (第18~20図 P L 3・11・12)

位置 調査区内中央のG・H-11・12区にて確認された。S D-2と重複関係にあり、本住居跡が古い。

規模と平面形 規模は5.70×4.85mで、床の最深部は0.28mを測る。平面形は楕円形を呈する。

主軸方向 N-54°-W。

壁 北西壁の一部が、S D-2により壊されている。壁は床面から緩く立ち上がる。

床 床面は全体的に平坦である。床の硬化面はP 5からP 2・3付近へと広がり、P 1の北西部にも確認できた。

ピット P 1~4が主柱穴と考えられ、P 5が出入口に関わるピットと考えられる。ピットのそれぞれの深さ(cm)は床面から、P 1.-64、P 2.-72、P 3.-43、P 4.-57で、P 5.-24である。

炉 住居跡内の中央で、P 1・4を結ぶライン寄りに確認された。100×77cmの楕円形で、深さ4cmと浅い。

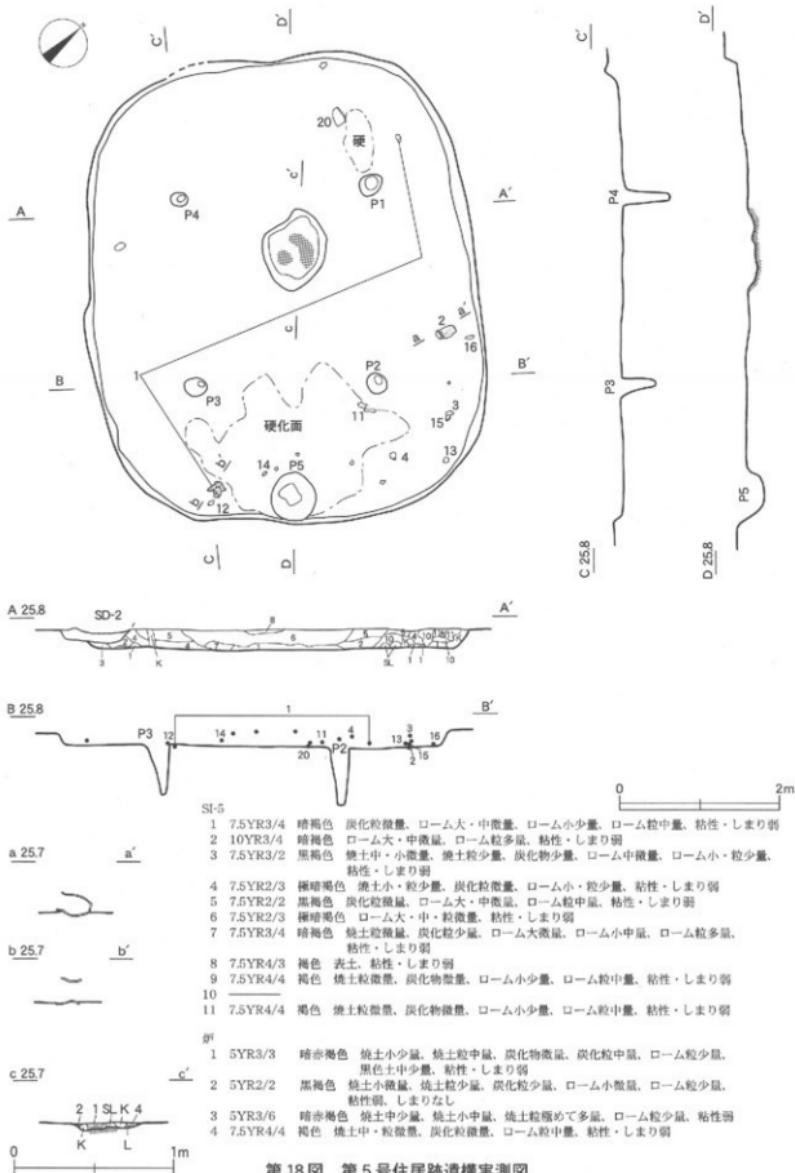
覆土 11層から構成され、第8層は表土である。第3層は黒褐色土で、焼土粒が比較的多く含まれており、炭化物も含まれている。

遺物 遺物は、土器・石器が出土し、特に住居内の東側からまとまって出土した。出土遺物の中には、床面直上のものも見られる。土器は形の分かれるもの3個体が出土している。1は、P 1北側の胴部小片とP 5西側の個体が接合した。1の破片の中でP 5西側の個体は横倒し状態で、床直で出土した。2は東壁寄りからやはり横倒し状態、かつ床直に近い状況で出土した。2の土器内の底部近くには18・19の石器及び礫が入っていた。3は覆土中層から出土した。

本遺構内からも石英の敲打痕付石器や剥片が全部で8点出土し、総重量にすると322.6gである。第4号住居跡のような多量の微細剥片が出土する状況は確認されていない。この石英の重量別内訳は、1g以下が0点、1.1g以上10g以下が2点、10.1g以上20g以下が1点、これら合計で全体の37%を占める。最高重量のものは12の敲打器で154.2gである。これらはすべてP 5の周辺から出土し、第4号住居跡の出土状況とは異なる。

12~14は石英製の敲打痕付石器、15は長軸の両端に敲打痕が残る。16は側面の一部以外全体が擦られており砥石とした。17は長軸の両端に敲打痕が残り、他は砥面となっている。15・17・18は側縁SI-5

回収番号	器種	計測値(cm)	基準及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第19回 1	広口壺	A 15.4 B (22.4)	胴部に最大径を持ち、瓶部上半で縮れ、口縁部が外反する。口縁部は複合口縁となる。颈部は無文で口唇部・口縁部・胴部に附加条1種(付加2条)RL+2Rが施される。頭部と内面はナデ。内面には一種輪槽埴あり。口縁部は胴部最大径部分に炭化物付着。	石英△・長石△・雲母△ 暗褐色 良	90% 北部・南部で接合
2	広口壺	B (20.3) C 7.4	LJ唇部欠損。胴部中位が膨れ、頭部から外反し。口縁部に最大径部分がある。口縁部は複合口縁となるが外反。口縁部から頭部には、4本程度の櫛状工具により縱区画がなされる。縦区画は単位で、間隔は均等ではない。縦区画間には同様工具による山形文が施される。底面にはR鉛文による終条体の施文。底面には木乗底。口縁部と胴部上半に炭化物付着。	石英○・長石○・雲母○ 暗褐色 良 内面にも炭化物付着	90% 東壁際床面上から出土。土器内に18・19の石器入り
3	小型 縦口壺	A 6.0 B (10.1)	胴部下半は欠損する。胴部中位に最大径を持ち、頭部で緩く折れ。口縁部で外反する。口縁部は複合口縁となり、その下端に指摺(爪先)による圧痕が認められる。口唇部は外折・内側から押圧される。口縁部と頭部は無文となる。頭部には附加条1種(付加2条)RL+2Rが施される。	石英○・長石○・雲母△ 暗褐色 良	60% 覆土上層出土 横倒して出土
4	広口壺か	B (5.0) C 6.8	底部破片。底部から胴部に外反する。表面には附加条1種(付加2条)、輪は不明瞭RL+2Rで施文。底面に木乗底。表面に摩耗等なし。	石英○・長石○・雲母△ 暗褐色 良	10%
5	広口壺か	B (2.2) C (8.7)	底部破片。接地面でぐれる。表面には附加条1種(付加2条)RL+2L底面に木乗底。	石英△・長石△・雲母△ 茶褐色 良	5%



第18図 第5号住居跡遺構実測図

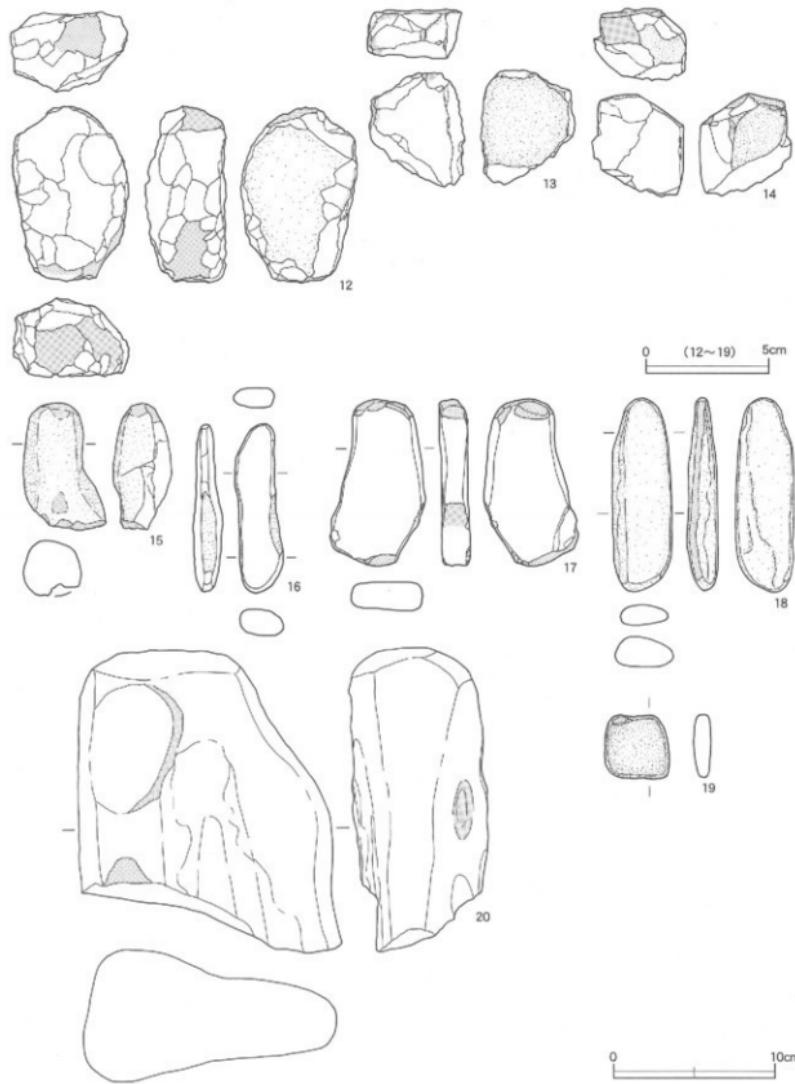


第19図 第5号住居跡出土遺物実測図(1)

図版番号	器形及び文様の特徴	地土の特徴	備考
第19図 6	底部破片。縁面には附加条1種付加2条IR.1-21。底面に木痕痕。	石英○、長石○、雲母△	
7	口縫部破片。縫隙からやや外反、無文。	石英○、長石○、雲母△	
8	口縫部破片。やや外反。口縫部は内外から押正、無文。	石英○、長石○、雲母△	
9	口縫部破片。複合口縫で口縫部には織文施文。縁面は無文。	石英○、長石○、雲母△	
10	縫隙部破片。やや外反する。無文でナデられているのみ。	石英○、長石○、雲母○	
11	縫隙から模様の破片。縫隙12本単位の沈縫が複合して側縫状。縁面には附加条1種。	石英○、長石○、雲母△	

の一部に凸面の敲打が認められる。19は偏平な円碟で、18と共に2土器中から出土した。

所見 本遺構で出土した土器は、その特徴から弥生時代後期前半のものと考えられる。2の土器内から18・19が出土し、興味深い出土例と言える。また、石英の出土状況については、第4号住居跡と異なり微細な剥片が多数出土する様子はない。



第20図 第5号住居跡出土遺物実測図（2）

図版番号	注記番号	型種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材名	備考
第20図12	SI-5 No.17	敲打痕付石器	7.1	4.6	3.3	154.2	石英	堅密床底出土
13	SI-5 No.2	敲打痕付石器	4.6	3.9	2.0	47.8	石英	覆土上層出土
14	SI-5 No.8	敲打痕付石器	4.2	3.7	2.9	61.7	石英	覆土下層出土
15	SI-5 No.19	敲打器	7.6	4.5	3.0	144.6	細粒砂岩	覆土中層出土
16	SI-5 No.13	砥石	10.3	2.7	1.5	72.4	ホルンフェルス	覆土下層出土
17	SI-5 P5	砥石兼敲打器	10.1	5.4	1.7	153.5	砂岩	P5内出土
18	SI-5 No.18B	敲打器	11.8	3.6	1.9	140.0	砂岩	土器2内出土
19	SI-5 No.18C	礫	3.9	3.9	1.0	28.7	砂岩	土器2内出土
20	SI-5 No.19	石皿	(18.2)	15.5	8.1	(2650.0)	細粒砂岩	覆土下層出土

第6号住居跡(SI-6) (第21・22図 PL 3・12)

位置 調査区内中央のD・E-12・13区にて確認された。下郷古墳群第13号古墳(TM-1)と重複関係にあり、本住居跡が古い。

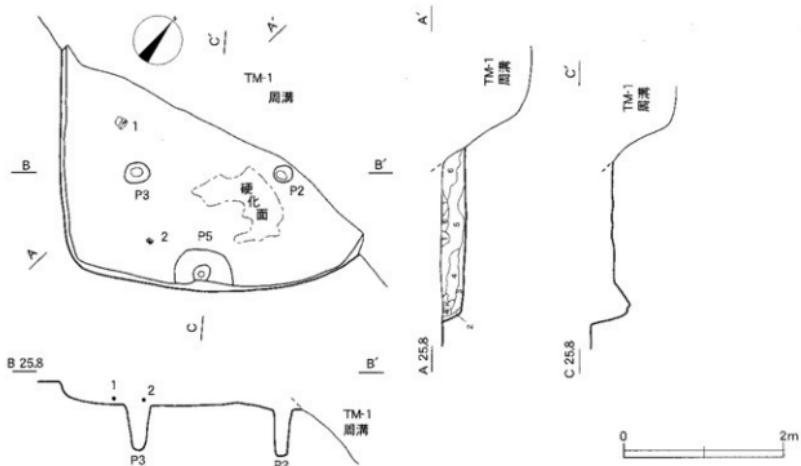
規模と平面形 規模は(2.50)×(3.57)mで、床の最深部は0.29mを測る。平面形は隅丸長方形を呈すると考えられる。

主軸方向 N-38°-W。

壁 北側壁が、TM-1により壊されている。壁は床面から急激に立ち上がる。

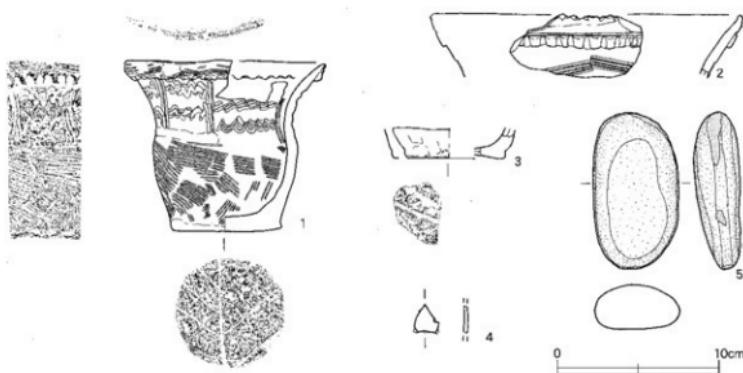
床 残存する床面は平坦である。床の硬化面はP5からP2付近へと広がる。

ピット P1・4は古墳との重複により存在せず、主柱穴と考えられるP2・3と出入口に関わるP5が確認された。ピットの床面からの深さ(cm)は、P2-54、P3-56、P5-21である。



- 1 表土
- 2 10YR4/6 黄褐色 ローム大・粒極めて多量、黒褐色土少量、粘性・しまり弱
- 3 7.5YR4/3 黄褐色 ローム小・粒少量、しまり弱
- 4 7.5YR3/2 黑褐色 ローム小・粒微量、粘性・しまり弱
- 5 7.5YR3/2 黑褐色 燐土小・粒微量、ローム小・粒少量、粘性・しまり弱
- 6 7.5YR3/1 黑褐色 燐七粒微量、ローム小・粒微量、粘性・しまり弱

第21図 第6号住居跡構造実測図



第22図 第6号住居跡出土遺物実測図

SI-6

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考				
第22図 1	壺	A 12.3 B 10.6 C 6.8	底部から頸部上位にかけて緩やかに膨らみ、頸部から口縁部にかけて外反する。口縁部は複数のある複合口縁となり、その下端は棒状工具により押圧される。口唇部と口縁部、そして胴部にはR箇面原形体をもつた絞り条体による施文。頸部には3本単位の櫛歯状工具による縦区画が、5単位見られ。その間に波状文が上下2条で連続する。波状文は3~4本単位の櫛歯状工具で施文。底面には木葉面。底部被熱赤化。	石英○、長石○、雲母△ 暗褐色 良	90% 横倒しで出土				
2	広口壺	A (19.2) B (3.8)	U縁部破片。頸部から外反。口縁部は複合口縁となり、口縫部下端に沈線が引かれ。棒状工具による押圧文が延びる。口唇部は内外より押圧され、頸部には4本単位の櫛歯状工具による山形文が見られる。口縫部施文なし。	石英○、長石○、雲母○ 黒褐色 良	5%				
3	広口壺か	B (1.8) C (8.0)	底部破片。外面は無文で、ヘラナデの痕跡のみ。内面はナデ。底面は木葉度を有する。底盤中央上げ底風。	石英△、長石△、小石 に付い赤褐色 良	5%				
図版番号	注記番号	器種	長さ(cm) (幅(cm))	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材質名	備考	
第22図 4	SI-6 1区	不明鉄製品	(1.7)	1.5	0.3	(2.3)	鐵	板状	
	5	SI-6 1区	敲打器	9.6	5.2	2.8	208.2	砂岩	部分的に被熱

炉 重複により存在せず。

覆土 6層から構成され、壁際の土層にはローム粒が多く含まれる。

遺物 遺物は、土器・石器・鉄製品が出土している。1はほぼ完全な形で横倒し状態で出土した。4は板状の鉄製品の破片と考えられる。この鉄製品の全体の形態は不明。全体的に遺物量が少ない。

所見 本住居跡はTM-1の周溝によってその大半が壊されている。古墳の周溝や墳丘出土の弥生土器と接合を試みたが、接合するものはなかった。また、他の弥生時代の住居跡から出土している石英片は出土していない。本住居跡の時期は、出土した土器の特徴から弥生時代後期前半のものと考えられる。

第2節 土坑

今回の遺跡調査エリア内からは、97基の土坑が確認された。全体的な傾向として、調査区北側に多く確認されている。これらの土坑は、その形態から数種類に分類することができる。以下はその特徴的な形状のものについて述べる。

1群 古墳時代の土坑

長方形または楕円形の平面形を持ち、覆土上層に黒褐色土等が堆積し、その立地や遺物の出土状況から墓壙と考えられるもの。これらには、A類 他類に比べ底面の幅が広く、壁が底面から確認面へ傾斜して立ち上がるものの、B類 挖り込みが「二段地下式構造」(註1)のもので、「2段式土坑」(註2)と呼ばれるもの。そして、C類 底面形が幅の狭い楕円形を呈し、「二段地下式構造」を持たないもの。これら3種類の土坑はいずれも土壙墓と推定され、古墳群と関わりを持つ時期の所産と考えられるもの。

A類 SK-1・6・12・14・18・21・29・35 (第23・24・29図 PL 3・4・13)

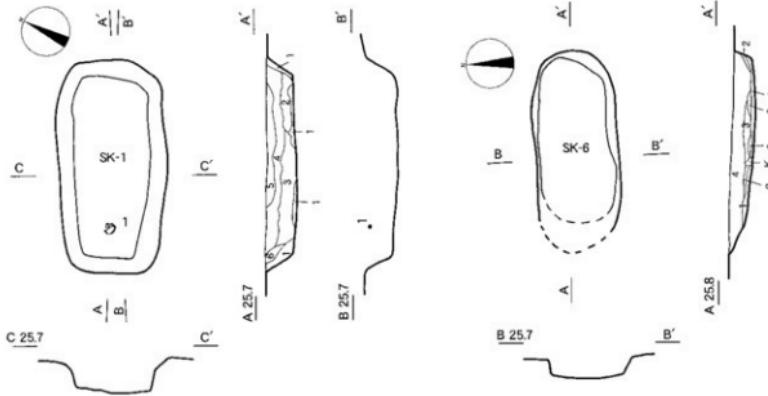
平面形が楕円形や長方形を呈するもので、他類と比べ底面の幅が広い。深さはSK-12の23cmからSK-21の71cmまで見られるが、SK-21以外は50cmを超すものはない。主軸方向には一定の方向性が見られ、SK-21のN-45°-EからSK-29のN-102°-Eの間に収まる。大方の主軸方向の傾向は、東西を中心とした方向と言っても過言ではない。土坑の覆土は、ほとんどが覆土上層に黒褐色土等が堆積している。遺物は流れ込みと考えられる繩文・弥生土器小破片以外、ほとんど出土していない。しかしながら、SK-1の覆土上層から赤彩されたほぼ完形の坏形土器が出土した。また、SK-18からは鐵鏃(註3)が出土した。この鐵鏃は検出時に2片に割れた状態で出土したが、翌日の取上げ時までにその片方を紛失してしまった。先のSK-1の土器の時期は、その形態から古墳時代5世紀末葉段階の時期と考える。

そして、これらのA類土坑の中には、SK-1・35・12・14・21またはSK-18のように調査エリア内東側にて間隔を置いて南北方向に列をなすように確認されているものも見られる。以上のことからA類の土坑は、SK-1と同様な時期と考えることが可能な要素が存在する。また、これらの土坑の立地が、古墳群が造られない空間に占地していることも意味のあることと思われる。当遺跡では、古墳時代前期に集落形成を終え、遅くとも6世紀前葉には墓域化した土地であることから(註4)、これらの土坑も墓壙として造られたと考えたい。特に古墳群と関連を持つ墓壙と考えられる。

これらの土坑の中で、他類のものと重複関係にあるものはSK-18であり、B類としたSK-19よりも古い。

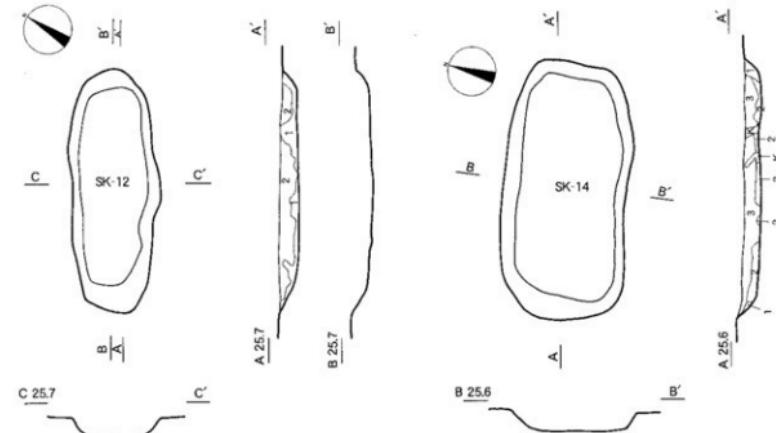
B類 SK-3・13・19・22・37・38 (第24・25図 PL 4)

平面形が長方形を基本としており、上部の掘り込み面と中央の深い掘り込み底面の間に段差を持ち「二段地下式構造」であることが一番の特徴といえる。これらを「2段式土坑」と呼ぶ。深さはSK-13の50cmからSK-3の81cmまで見られるが、SK-13以外は50cmを超す。主軸方向はA類とは異なり、SK-22のN-68°-WからSK-37のN-5°-Eの範囲に見られる。特にSK-19・22を除け



1. 7.SYR 3/2 黒褐色 ローム小少量、ローム粒中量、黒褐色土粒微量、粘性弱
 2. 7.SYR 3/2 黒褐色 ローム中微量、ローム小中量、ローム粒少量
 3. 7.SYR 3/2 黒褐色 ローム中~中少量
 4. 7.SYR 3/2 黑褐色 地下鉄敷設、ローム中~粘少量、しまり弱
 5. 7.SYR 3/2 黑褐色 地下鉄敷設、ローム中~粘少量、黒褐色土中少量、小石、しまり弱
 6. 7.SYR 3/2 黒褐色 ローム小~粘少量、粘性弱

- SK-6
1. 7.SYR 3/4 黒褐色 ローム少少量、ローム粒中量、粘性弱
 2. 7.SYR 3/3 黒褐色 ローム小~粒少量、黒褐色土中微量、粘性弱
 3. 7.SYR 2/2 黑褐色 粘性少、地土粒微量、ローム小~粒微量、黒褐色土中微量、粘性弱
 4. 7.SYR 2/2 黑褐色 粘性少、地土粒少量、ローム小~粘微量、黒褐色土中微量、粘性弱

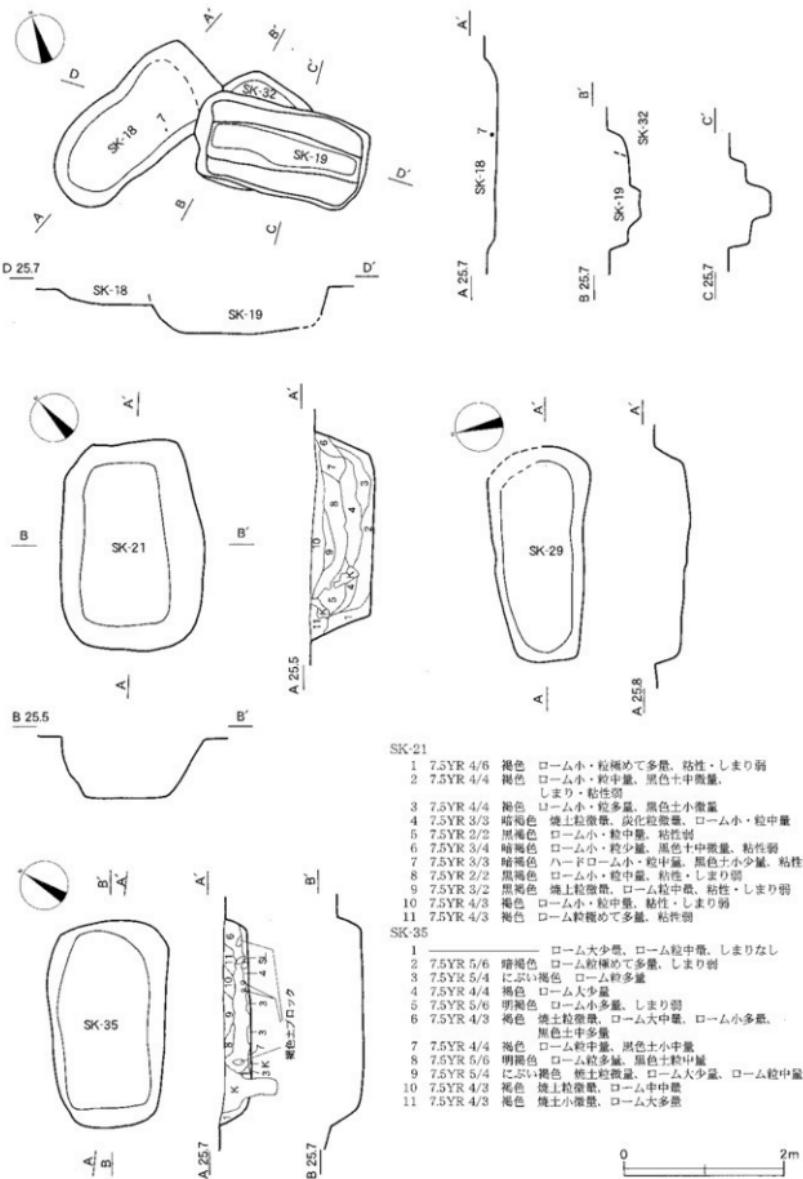


- SK-12
1. 7.SYR 3/2 黑褐色 地土粒微量、ローム大~中量、ローム小少量、
 ローム粒中量、黒褐色土中少量、粘性なし
 2. 7.SYR 2/3 暗褐色 地土粒微量、黒褐色土中少量、粘性弱

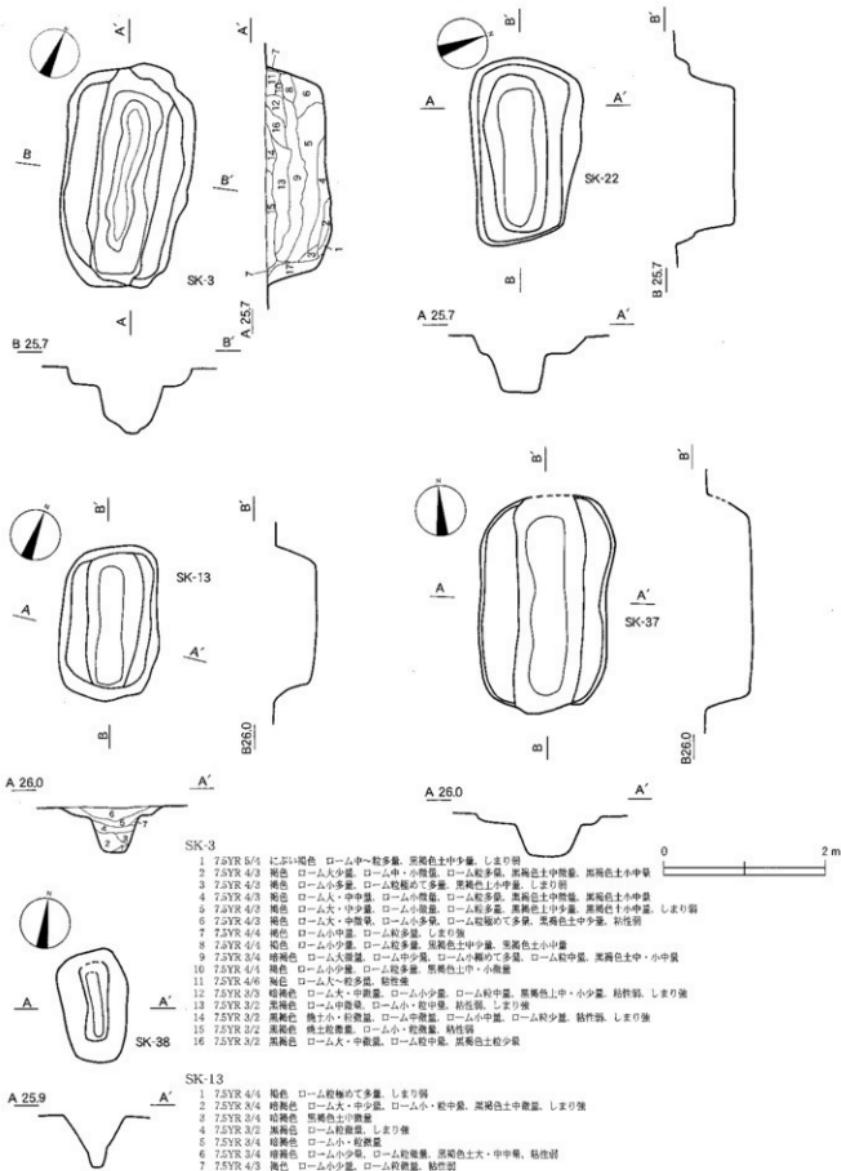
- SK-14
1. 10YR 4/6 黑褐色 ローム小多量、ローム粒極めて多量、黒色土少量、粘性弱
 2. 7.SYR 2/3 暗褐色 ローム大~中量、ローム粒中量、黑色土小少量、粘性弱
 3. 7.SYR 2/3 暗褐色 地上鉄敷設、ローム中~小微量、ローム粒少量、黑色土小少量、粘性弱

第23図 土坑遺構実測図 (1)

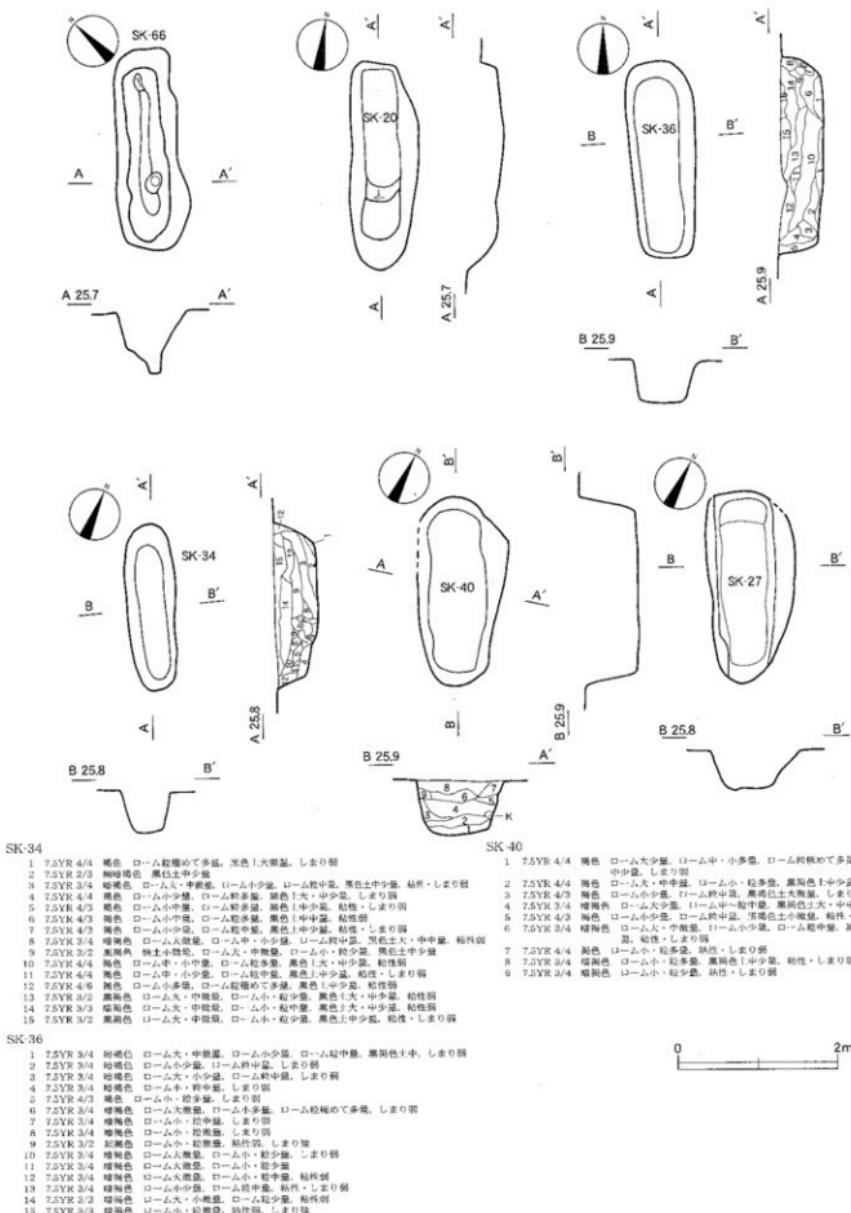




第24図 土坑遺構実測図 (2)



第25図 土坑遺構実測図(3)



第26図 土坑遺構実測図(4)

ばSK-13のN-22°-WからSK-37のN-5°-Eに集中する。大方の主軸方向の傾向は、南北を中心としたものから東西を中心としたものへと幅があるようだ。覆土は、ほとんどが覆土上層に黒褐色土等が堆積している。遺物は流れ込みと考えられる縄文・弥生土器小破片以外、全く出土していない。

そして、B類土坑の中で、調査エリア内にて間隔を置いて列をなすような状況は見られない。これらB類に含めたものについては、形態的にSK-37・SK-38のように大小があるのも特徴といえる。また、本類の上部掘り込み面を除いた中央の土坑の平面形状は、A類に比して概して幅が狭い細身となる特徴がある。また、これらの土坑は、古墳群が造られない空間に占地し、古墳群の周溝とも重複しない。のことから、A類土坑同様に墓壙と考えられ、これらの時期は古墳群と関係を持つ時期が想定される。

これらの土坑の中で、他類のものと重複関係にあるものはSK-19であり、A類としたSK-18よりも新しい。このことが、これらB類とした土坑全てに当てはまるか否かは、それを判断する材料を持ちえないが、形態的な特徴や主軸方向の違いから大幅に違わない時期のものと考える。

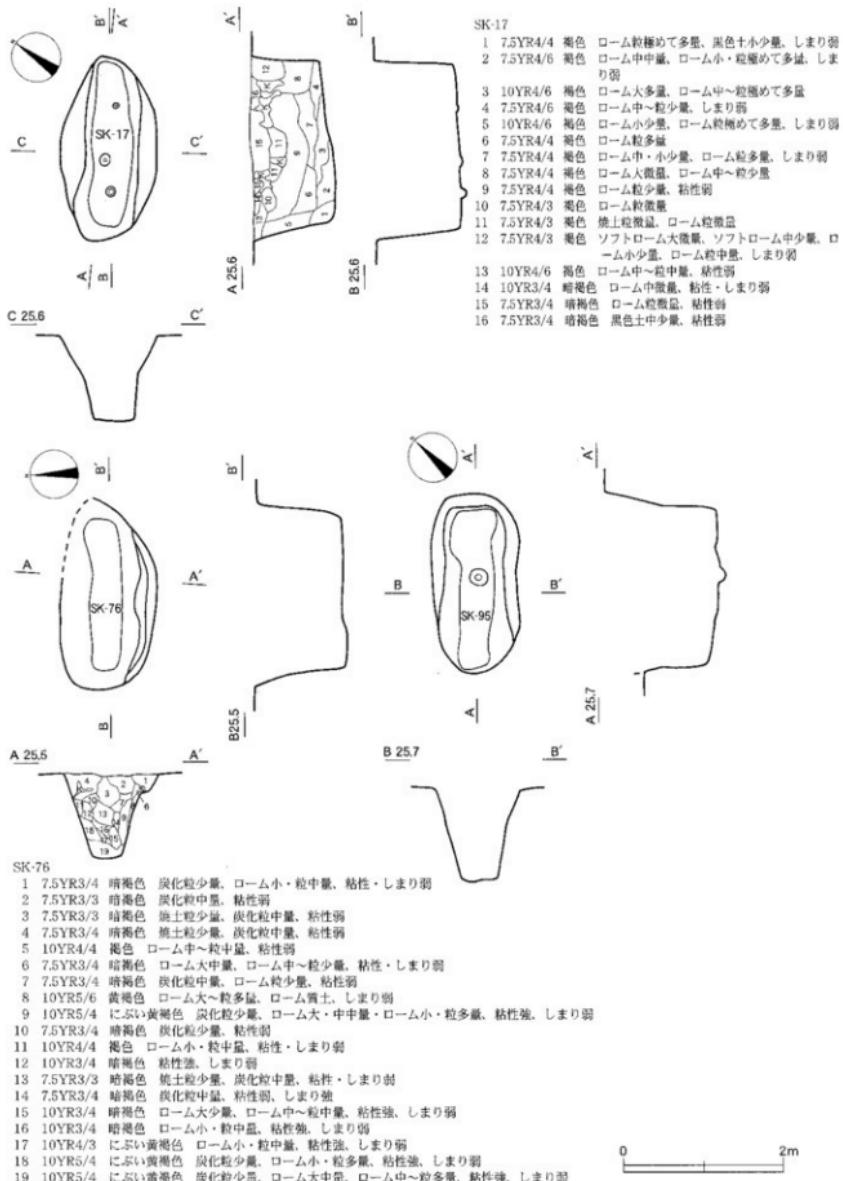
C類 SK-20・27・34・36・40・66 (第26図 PL.4)

本類は平面形が梢円形をなし、B類の上部掘り込み部分を、取り去ったような幅が狭い細身の形態である。SK-66については形態的に他のものと異なるが、平面形が幅の狭い細身であることから本類に含めた。深さはSK-27の44cmからSK-66の76cmまで見られるが、ほぼ40から50cmの間にSK

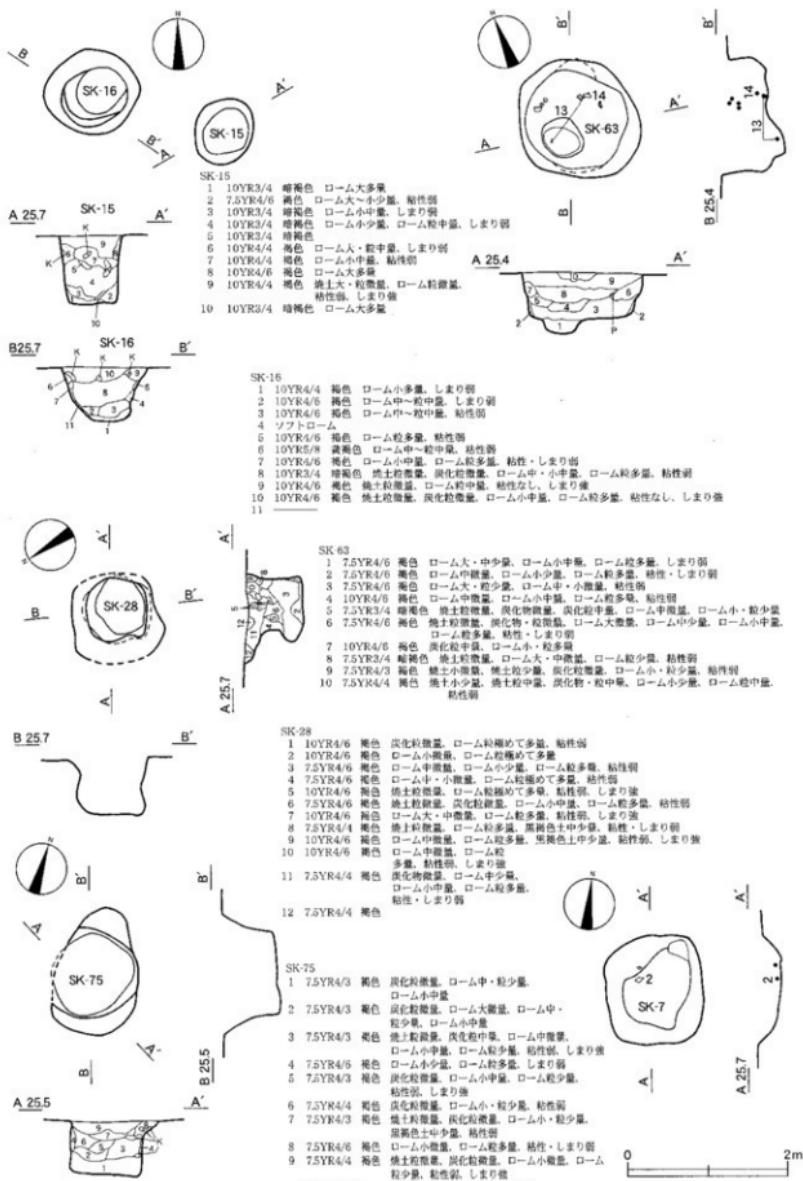
国版番号	基種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第29回 1	土師器 杯	A 14.6	底部は丸底で、口縁部が緩く内凹して立ち上がる半球形の土師器环形土器。	石英△、長石△、雲母△	85%
		B 6.1	底盤及び側面はヘラケグリがなされた後、部分的にナデられている。口縁部はナデされており、一部輪輪板が残る。内面ナデ。内外面ともに赤彩されている。覆土上層で正位の状態で出土。	明赤褐色 良	SK-4 赤彩
11	深鉢	A (21.2)	全体として扁平形。一様に安起が付く口縁部。口縁内面が複合化し厚くなる。	石英△、長石○、雲母○	15%
		B (4.5)	口部下に無文部があり、その下に幅広の平行沈線が巡る。器内には地文RIL横断軸施文。	に付い黄褐色 良	SK-18
13	深鉢	A (20.2)	4単位の環状口縁で、口唇内面が内削ぎ状となり縁を持つ。底部下に	石英○、長石○、雲母○	20%
		B (6.7)	は縫起線が付く。また縫起線による船の腹内斜内凹文が見られる。これに縫起線には角押文が付く。脚部には、ヒダ状文が見られる。	に付い赤褐色 良	SK-63
国版番号	記述番号	基種	長さ(cm) 幅(cm)	厚さ(cm) 重量(g)	材質名 備考
第29回 7	SK-18 No.1	無文瓶	(2.3) 2.0	0.4 (1.5)	鉄・木質

縄文SK

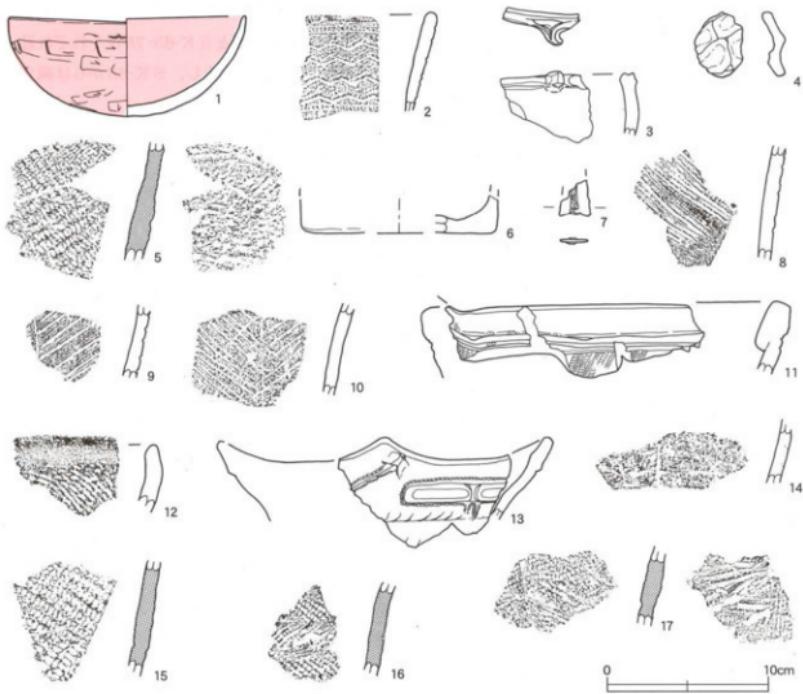
国版番号	器形及び文様の特徴	胎土の特徴	備考
第29回 2	口唇部円錐状の口縁部破片。口縁部文様等を広布して区画。その中に半載竹管状工具の痕跡状文。	砂粒○	SK-7
3	口縁部破片。口唇部は内削ぎされ、上面に三叉文状の凹みあり。口唇下に突起が付き、沈窓溝。	石英△、長石△、雲母○	SK-7
4	焼成粘土塊。指痕痕あり。	石英○、長石○	SK-7
5	深鉢柄部破片。表面にRLとLRによる羽状文。裏面に条痕文。	白色粒、雲母△、鐵錫△	SK-17
6	深鉢底盤破片。復元径11.8cm。底面から直立する。	石英○、長石○、雲母△	SK-17
8	深鉢剥離部破片。斜位にへう状工具による沈窓溝文。	砂粒○	SK-28
9	深鉢口縁部文様帶部破片。半載竹管状工具片側に力をもとおき葉脈状文施文。10と同一。	砂粒○、赤色粒△	SK-16
10	深鉢口縁部文様帶部破片。半載竹管状工具片側に力をもとおき葉脈状文施文。9と同一。	砂粒○、赤色粒○	SK-28
12	口唇下に凹曲する口縁部。筋面落部は無文。下はLR回転施文。	砂粒○	SK-18
14	深鉢剥離部破片。輪輪板を活かしたヒダ状文が見られる。	石英△、長石△、雲母△	SK-63
15	深鉢剥離部破片。器面にRLとLRによる羽状文。	白色粒、雲母△、鐵錫△	SK-76
16	深鉢剥離部破片。器面にRLとLRによる羽状文。文様の幅は狭い。	白色粒△、鐵錫○	SK-76
17	深鉢剥離部破片。器面にRLとLRによる羽状文。裏面に条痕文。	白色粒△、鐵錫○	SK-76



第27図 土坑構造実測図(5)



第28図 土坑構造実測図(6)



第29図 土坑出土遺物実測図

取まる。主軸方向はSK-66を除けば、一定の指向性が見られ、SK-40のN-31°-WからSK-36のN-3°-Wの範囲に集中する。主軸方向の指向性は、南北を中心とした指向性が見い出せる。覆土上層は、ほとんどが黒褐色土等が堆積している。遺物は流れ込みと考えられる縄文・弥生土器小破片以外、全く出土していない。これらは、主軸方向の指向性と全体的に細身であることから、B類との類似性が考えられる。C類についても墓壙と考えたい。これらの土坑についての時期も古墳群と関係を持つ時期が想定される

2群 縄文時代の土坑（第27～29図 PL 4・5・13）

SK-17・76・95は陥穴状の土坑で、それぞれ平面形は梢円形を呈し、壁は上端から底面へ急激に落ちる。特に長軸方向の壁はほぼ垂直となる。それぞれの底面はほぼ平坦で、SK-17・95の底面には浅い小ビットが確認されている。SK-17・95は調査区南端で見つかり、ほぼ同様な主軸方向を持ち、約11m離れている。SK-76は調査区の北端で確認され、SK-17と約19.5m離れている。出土遺物は、縄文時代前期前半のものを主体として出土している。

S K-15・16・63・75は断面形状がバケツ状を呈するもので、S K-15・16とS K-63・75はそれぞれ近接して構築されている。S K-16からは縄文時代前期後半の浮島式土器が出土し、S K-63からは縄文時代中期前半の阿玉台Ia式段階の土器が出土している。

S K-28は袋状を呈する土坑で、底面上部の壁が抉れている。出土遺物は縄文時代前期後半の浮島式土器が出土している。

S K-7は浅い皿状の断面形状を持つもので、平面形は隅丸方形を呈する。出土遺物は縄文時代前期後半の浮島式土器と中期前半の阿玉台式土器が出土している。

これ以外にも縄文時代の土坑と考えられるものが存在する。上記で触れたもの以外については土坑一覧表に概要を記した。

註釈

(註1)田中新史「古墳時代終末期の地域色」『古代探叢』Ⅱ早稲田大学出版部 1985の中で、この「二段地下式構造」の土坑を木棺墓系の終末期土壙(墓坑)の一つとして扱っている。その形態の特徴として、「天井の木板を落し込み、木棺全体を完全に地下深く取めるための明瞭な掘り込みを持つものである。」と説明している。その出現の時期について、東国においては「確実に弥生時代から古墳時代前・中期に遡る例ではなく、終末期」に突然出現すると述べられている。

(註2)(財)鹿嶋市文化スポーツ振興事業団「大塚古墳 113号墳 大塚古墳西遺跡—鹿島淨水場拡張に伴う発掘調査一」1997の考察中で本川 勉氏により「2段式土坑」の名称が用いられている。その特徴として、出土する遺物が極端に少ないことなどをあげている。

(註3)千葉隆司「古墳時代の鉄鏃(3)—茨城県における6・7世紀の様相—」『斐良岐考古』第21号 1999の無茎鏃と考えられる。この鉄鏃の検出時の観察では、その先端部の形態は、東海村遺跡調査会「常陸部原古墳」1990の主体部出土鉄鏃の11に類似し、先端部左右に明瞭な稜を持っていた。

(註4)(財)茨城県教育財団「下郷古墳群 茨城県教育財団文化財報告第167集」2000

第2表 土坑一覧 (数字単位m)

回復番号	遺構名稱	位 置	主 軸	平面形	規模 (長軸×短軸)	深さ	特 故	時 期	備 考
第23回	SK-1	F-4	N-67°-E	長方形	2.60×1.32	0.40	土器破片出土	古墳時代	第29回1
	2	D-6	N-33°-W	長方形	1.57×0.70	0.26		古墳時代	
第25回	3	G-5	N-10°-W	長方形	2.70×1.53	0.81	有段	古墳時代	
	4	E-5	N-58°-W	橢円形	0.73×0.56	0.28		時期不明	
没	5								
第23回	6	D+E-6	N-93°-E	橢円形	2.50×1.04	0.25		古墳時代	
第28回	7	D-5	——	圓丸方形	1.34×1.19	0.23		绳文時代中期前半	第29回2-3-4
没	8								
没	9								
	10	J-7	——	円 形	0.93×0.81	0.20	底面ピット	绳文時代	
	11	I-7	——	不整形	0.82×0.71	0.27		時期不明	
第23回	12	H-8	N-57°-E	橢円形	2.58×1.07	0.23		古墳時代	
第25回	13	D-7	N-22°-W	長方形	1.87×1.23	0.50	有段	古墳時代	
第23回	14	I-9	N-74°-E	長方形	3.19×1.51	0.28		古墳時代	
第28回	15	H-10	——	円 形	0.80×0.75	0.84		绳文時代前期後半	
第28回	16	H-10	——	円 形	1.10×1.04	0.71		绳文時代前期後半	
第27回	17	I-J-13	N-59°-E	橢円形	2.25×1.20	1.04	底面ピット	绳文時代前期後半	第29回5+6
第24回	18	I-J-14	N-65°-E	橢円形	2.30×1.10	0.40	遺構重複	古墳時代	第29回7
第24回	19	J-14	N-58°-W	長方形	2.14×1.10	0.58	有段	古墳時代	SK-15-32重複
第26回	20	J-13	N- 7°-W	橢円形	2.53×0.82	0.45		古墳時代	
第24回	21	K-L-11	N-45°-E	長方形	2.57×1.76	0.71		古墳時代	
第25回	22	K-11	N-68°-W	長方形	2.30×1.37	0.74	有段	古墳時代	
没	23								
	24	J-10	——	円形	0.61×0.54	0.22		時期不明	
没	25								
没	26								
第26回	27	G-S-9	N-27°-W	橢円形	2.34×1.11	0.44		古墳時代以降	
第28回	28	G-8	——	不整形	1.11×1.11	0.70	袋状	绳文時代前期後半	第29回10
第24回	29	F-8	N-102°-E	橢円形	2.64×1.26	0.43		古墳時代	
没	30								
	31	F-9-10	N-83°-E	橢円形	2.47×1.02	0.55	底面ピット	绳文時代	
第24回	32	J-14	——	方形	1.44×1.15	0.22	遺構重複	绳文時代中期中頃	第29回11-12
	33	K-12	N-64°-W	橢円形	0.91×0.60	0.15		時期不明	
第26回	34	E-F-8	N-21°-W	橢円形	2.02×0.57	0.52		古墳時代	
第24回	35	G-7	N-59°-E	長方形	2.54×1.41	0.29		古墳時代	
第26回	36	G-9	N- 3°-W	長方形	2.40×0.88	0.50		古墳時代	
第25回	37	C-8-9	N- 5°-E	長方形	2.64×1.63	0.54	有段	古墳時代	
第25回	38	C-5-6	N- 9°-W	長方形	1.38×0.82	0.63		古墳時代	
没	39								
第26回	40	E-9	N-31°-W	橢円形	2.30×1.11	0.69		古墳時代	
	41	D+E-5	N-26°-W	橢円形	1.75×0.88	0.43		古墳時代	
	42	E-7	——	円形	0.71×0.61	0.22		時期不明	
	43	C-7	N-18°-E	長方形	1.15×0.58	0.39		古墳時代	
	44	B-8	N-22°-E	長方形	1.95×1.17	0.31	底面ピット	近代跡	
	45	H-5	N-48°-E	橢円形	2.27×1.00	0.30		時期不明	風呂木座
没	46								
没	47								
没	48								
	49	D-6	N-35°-W	橢円形	0.95×0.64	0.23		時期不明	
	50	D-E-7	N-81°-E	橢円形	1.49×0.91	0.24		時期不明	
	51	E-6	N-61°-W	橢円形	0.60×0.46	0.28		绳文時代	
	52	D-6-7	N-62°-E	橢円形	0.92×0.58	0.30		绳文時代	
	53	E-5	N-57°-W	橢円形	0.91×0.70	0.18		绳文時代	
	54	E-4	N-29°-E	橢円形	0.86×0.65	0.22		绳文時代前期後半	
没	55								
	56	E-5	N-64°-E	橢円形	1.05×0.72	0.09		時期不明	
	57	F-G-5	N-22°-W	橢円形	0.86×0.42	0.21		時期不明	
	58	F-5	N-52°-E	橢円形	0.49×0.30	0.14		時期不明	
	59	F-5	——	円形	0.66×0.59	0.34		绳文時代	
	60	F-4	N-64°-E	橢円形	0.72×0.51	0.13		時期不明	

図版番号	地溝名称	位 置	主 輪	平面形	面積 (長軸×短軸)	深さ	特 徴	時 期	備 考
	SK-61	F-3	N-72°-E	楕円形	0.53×0.42	0.18		時期不明	
		62	F-3	N-26°-W	楕円形	0.80×0.55	0.25	時期不明	
第28図	63	G-H-3	—	円形	1.45×1.41	0.78	底面ピット	縄文時代中期前半	第29図13・14
	64	H-5	N-30°-W	楕円形	1.63×1.16	0.27	底面ピット	縄文時代	
第30図	65	G-4	N-54°-E	楕円形	1.50×0.97	0.15	礫出土	縄文時代前期	SS-2と同
第26図	66	F-G-7	N-43°-E	長方形	2.46×0.89	0.76	有段	古墳時代	
	67	F-7	—	円形	0.58×0.47	0.20		時期不明	
	68	I-5	N-9°-W	楕円形	0.81×0.55	0.16		時期不明	
	69	I-6	N-17°-E	楕円形	1.35×0.72	0.10		時期不明	
	70	I-5	—	円形	0.33×0.32	0.32		時期不明	
没	71	—	—	—	—	—	—	—	—
	72	I-6	N-54°-W	楕円形	0.67×0.45	0.15		縄文時代	
	73	I-J-6	—	不整形	0.58×0.59	0.16		縄文時代	
	74	I-6	—	円形	0.90×0.79	0.31		縄文時代	
第28図	75	H-4	N-4°-E	楕円形	1.55×1.05	0.67		縄文時代中期前半	
第27図	76	G-3	N-88°-W	楕円形	2.35×1.17	1.16		縄文時代前期前半	第29図15・16・17
	77	G-8・9	—	不整形	0.95×0.78	0.55	袋状	縄文時代前期後半	
	78	H-4	—	円形	1.15×0.96	0.28		縄文時代	
	79	G-8	N-76°-E	楕円形	0.66×0.51	0.40		縄文時代	
	80	F-9	—	円形	0.35×0.34	0.19		縄文時代	
	81	F-9	—	円形	0.29×0.26	0.16		縄文時代	
	82	G-9	N-70°-E	楕円形	1.06×0.53	0.43	底面ピット	縄文時代	
	83	G-9	N-41°-W	楕円形	0.56×0.39	0.16		縄文時代	
	84	H-9	—	円形	0.23×0.24	0.18		縄文時代	
	85	F-8	—	円形	0.25×0.27	0.59		時期不明	
	86	F-7	—	円形	0.37×0.38	0.40		時期不明	
	87	E-8	N-59°-E	楕円形	1.74×0.65	0.35		時期不明	
	88	H-5	N-3°-W	長方形	1.92×0.64	0.29		時期不明	
	89	H-5	—	円形	0.41×0.38	0.21		時期不明	
	90	H-I-4	N-73°-W	楕円形	1.08×0.70	0.25		時期不明	
	91	J-10	N-12°-W	楕円形	7.30×4.10	1.80		時期不明	
	92	A-7	—	円形	0.47×0.45	0.11		時期不明	
	93	B-7	N-2°-W	鱗丸形?	0.95×0.81	0.34		時期不明	
	94	B-7	N-9°-E	楕円形	0.87×0.55	0.17		時期不明	
第27図	95	J-K-16	N-47°-E	楕円形	2.20×1.09	1.46	下部ピット	縄文時代前期前半	
	96	G-6	—	円形	1.03×1.00	0.67	下部ピット?	縄文時代	燒土検出
	97	B-6	—	楕円形?	0.40×0.53	0.26		古墳時代	SD-2と重複

第3節 集石

今回の遺跡調査エリア内からは、数多くの礫が出土している。これらの礫は自然礫（角の取れた転石）が大多数を占め、この中には被熱し赤化したものが相当数出土している。調査エリア内で取り上げた未被熱礫総重量はおよそ97.8kgで、被熱礫総重量はおよそ52.6kgである。これらの礫の帰属時期については、調査エリア内の前期初頭の第3号竪穴住居跡から多数の礫が出土していることから、同様な時期を中心として、盛んに利用されていたことが想定される。

今回の調査では、一定範囲からまとめて出土した礫群を集石として捉えた。これらには掘り込みが伴うものと、そうでないものがある。それぞれの集石には、被熱していない礫に加え、被熱した礫が割合にして半数近く含まれている。しかしながら、各遺構内に焼土の堆積などは確認されておらず、これらの遺構が礫を利用した場なのか、廃棄した場なのか明確ではない。

以下は、各遺構の概要を述べる。

第1号集石(S S-1) (第30図・第31図1~4 PL 13)

位置 K-12・13区から確認。規模 2.7×2.01mで深さ0.12m。掘り込み 皿状の掘り込み。出土遺物 1~4が本遺構から出土したものである。縄文時代前期の土器片が主体に出土。礫の様子 未被熱礫40個（一括取上げ含め）、被熱礫17個（一括取上げ含め）出土している。ほとんどの礫は掘り込み内に収まるが、底面より浮いているものが多い。特にまとまりなく散在している。

第2号集石(S S-2・SK-65) (第30図・第31図5 PL 13)

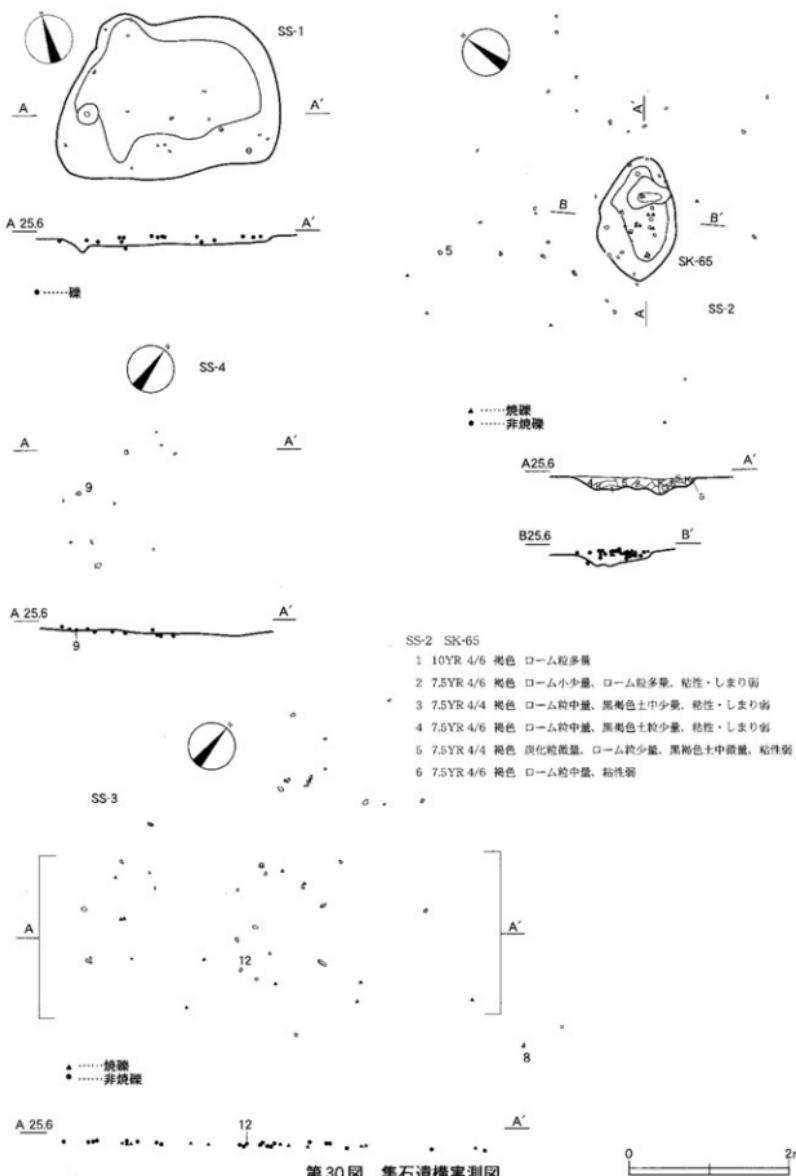
位置 F・G・H-3・4区から確認。規模 5.4×3.6mの範囲。掘り込み 1.52×0.92mの楕円形で、深さ0.18m。第65号土坑と一体となった遺構。出土遺物 5が本遺構から出土したものである。縄文時代前期の土器片が主体に出土している。礫の様子 未被熱礫156個（一括取上げ含め）、被熱礫74個（一括取上げ含め）出土している。土坑底面より浮いているものが多い。土坑内の被熱礫の出土割合は高いが、土坑覆土に焼土の混入なし。

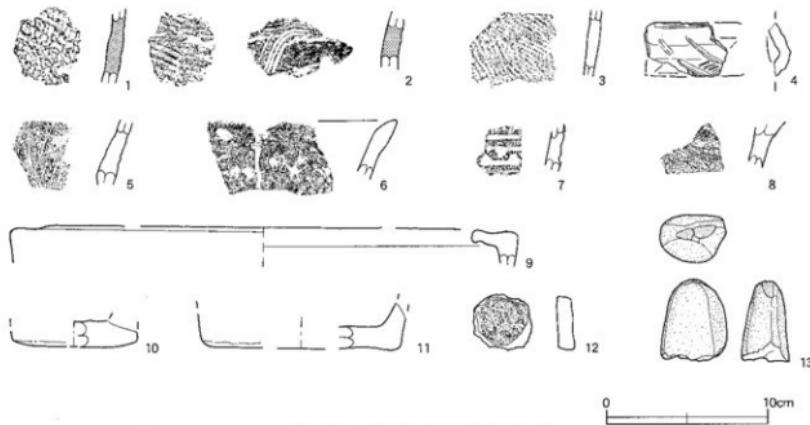
第3号集石(S S-3) (第30図・第31図6~8・10~13 PL 13)

位置 G・H-2・3区から確認。規模 5.4×4.1mの範囲。掘り込み なし。出土遺物 6~8・10~13が本遺構から出土したものである。縄文時代前期の土器片が主体となる。礫の様子 未被熱礫611個（一括取上げ含め）、被熱礫351個（一括取上げ含め）出土している。広い範囲に散在し礫同士の接合資料もある。遺構確認面は西から東に緩やかに傾斜している。

第4号集石(S S-4) (第30図・第31図9 PL 13)

位置 J-10・11区から確認。規模 2.2×1.65mの範囲。掘り込み なし。出土遺物 9の土器が出土している。縄文時代前期の土器片が主体となっている。礫の様子 未被熱礫6個（一括取上げ含め）、被熱礫6個（一括取上げ含め）出土している。





第31図 集石遺構出土遺物実測図

SS

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴				粘土・色調・焼成	備考	
第31図 9	浅鉢	A (31.0) B (2.3)	口縁部が内側に屈曲する浅鉢形土器破片である。口唇部端はやや上につまみ上げられている。外面は丁寧なナデ。内面はケズリの後ナデ。	砂粒○、小石△ 明赤褐色 良	20%	SS-4			
	深鉢	B (1.5) C (7.6)	レンズ状の断面形状を持つ底部破片。底面は丁寧にナデされている。接合縫で剥がれています。	砂粒○ 橙色 良	5%	SS-3			
11	深鉢	B (2.0) C (11.2)	厚手の底部破片。底面はケズリの後ナデ。	砂粒△ にぶい褐色 良	5%	SS-3			
	円筒								
第31図12 13	七切円盤 SS-3		直径(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材質名	備考	
			3.4	3.4	1.0	13.0	土器	板状	
			(4.9)	3.9	2.9	(72.0)	閃綠岩	部分的に被熱	
図版番号	性記番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材質名	備考	
第31図1	SS-3 No.11	七切円盤	3.4	3.4	1.0	13.0	土器	板状	
	13	蔽打器	(4.9)	3.9	2.9	(72.0)	閃綠岩	部分的に被熱	
図版番号	器形	並び文様の特徴	胎土の特徴						備考
第31図1	深鉢底部破片	表面にU字彌文施文。裏面に条痕文施文。	白色粒△、繊維○						SS-1
2	深鉢底部破片	表面に5本単位の櫛状工具による波状文施文。内面は平滑にナデしている。	白色粒△、繊維○						SS-1
3	深鉢底部破片	表面に櫛の小さなU字彌文施文。	砂粒○						SS-1
4	土器の楕状把手	下下両端とも接合面で削離。表面に斜度線と彫刻文の痕跡あり。	石英○、長石△						SS-1
5	深鉢底部破片	表面にヘラ工具による格子目文あり。内外面ざらつく。SI-1-3と類似。	砂粒○						SS-2
6	深鉢口縁部破片	口唇部は舌状をなし、外傾する。表面に凹凸のみ。	砂粒○						SS-3
7	深鉢底部破片	横位の楕状把手とU字彌文施文。内面ナデ。	石英○、長石○、雲母○						SS-3
8	深鉢外反する楕状把手	表面にはケズリ、裏面ナデ。	砂粒○						SS-3

第4節 溝

溝は調査エリア内から全部で6条確認された。第2号溝は財団調査エリア内でも確認されている。

第1号溝（SD-1）（第32図）

位置 調査エリアの北端部のE・F-3区、F・G-2区、G・H-1区に確認された。**主軸** N-58°-E。

形状 直線的に確認された。規模 11.56×1.1m。深さ0.15mである。断面形 浅いU字形をなす。

所見 本溝の時期は、明確にし得ないが近世以降のものか。

第2号溝（SD-2）（第32図 PL5）

位置 調査エリアの北半部のB-6区からD・E-9区を結ぶラインで確認された。**主軸** N-42°-W。

形状 直線的に確認され、一部途切れる。規模 18.51×0.62mと5.00×0.72m。深さ0.12mである。

断面形 浅いU字形をなす。**所見** 本溝の続きは財団調査エリア内でも確認。SI-5付近では底面に硬化面が確認。覆土は黒褐色土である。本溝の時期は中・近世以降のものか。

第3号溝（SD-3）（第33図）

位置 調査エリアの南半部のH・I-12区、D・E・F・G・H・I-13区に確認された。**主軸** TM-1の周溝に達するまでN-52°-E。その後、後円部墳丘に沿うように巡る。

形状 直線的な部分と曲線的な部分がある。規模 25.2×1.48m。深さ1.82mである。断面形 深いU字形をなし、底面には工具跡あり。**所見** 覆土は褐色土でしまりなし。本溝は近現代の根切り溝か。

第4号溝（SD-4）（第33図）

位置 調査エリアの南半部のF-12区付近に確認された。**主軸** N-53°-E。**形状** 直線的に確認

された。規模 5.90×0.65m。深さ0.10mである。断面形 浅いU字形。**所見** 覆土は褐色土でしまりなし。本溝は近現代のものか。

第5号溝（SD-5）（第33図）

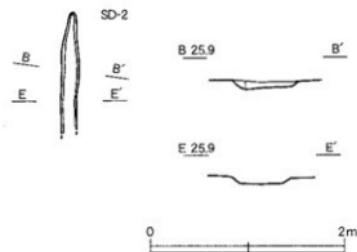
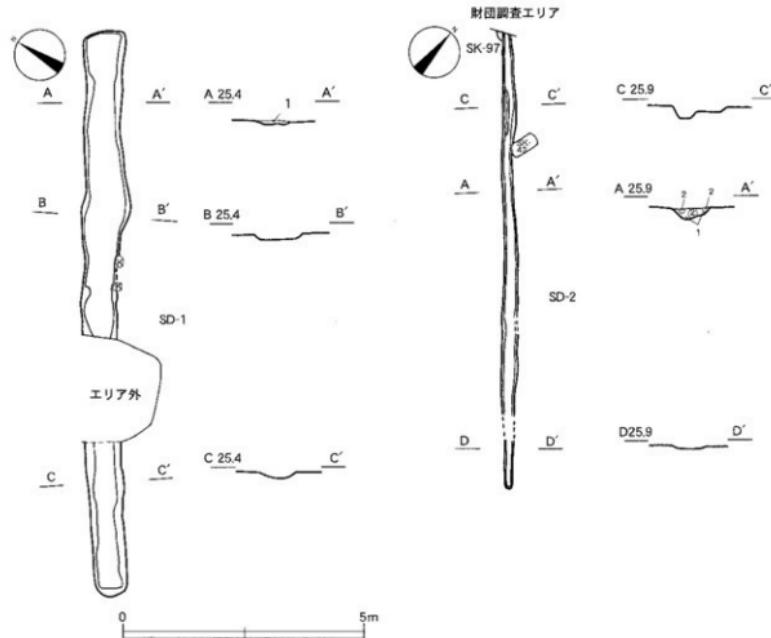
位置 調査エリアの南端部のTM-1内で確認された。**主軸** N-57°-E。**形状** 緩やかな弧状。

規模 17.5×1.56m。深さ0.36mである。断面形 浅いU字形。**所見** 本溝はTM-1より新しい。本溝の覆土は暗褐色土でしまり、中・近世以降のものか。

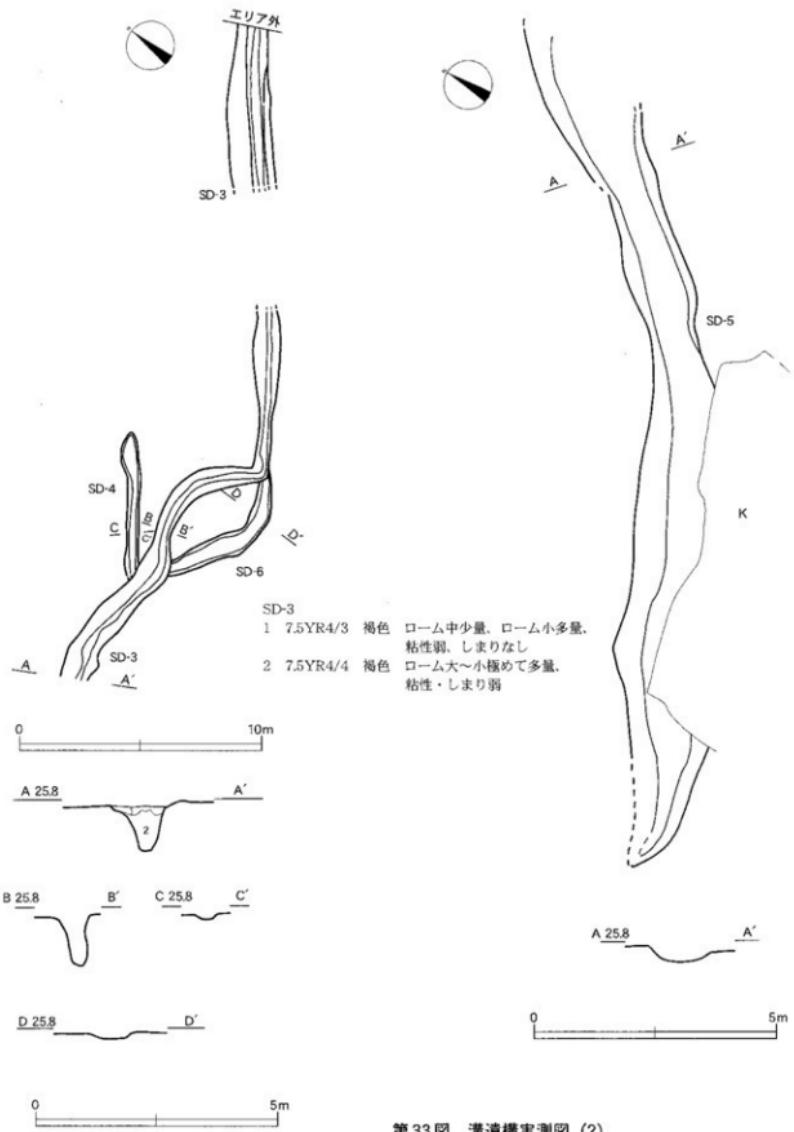
第6号溝（SD-6）（第33図）

位置 調査エリアの南端部のTM-1内で確認された。**主軸** 計測できない。**形状** 緩やかな弧状。

規模 5.99×1.01m。深さ0.16mである。断面形 浅いU字形。**所見** 本溝はTM-1より新しく、SD-3より新しい。本溝は近現代の溝か。



第32図 溝遺構実測図 (1)



第33図 溝遺構実測図 (2)

第5節 古 墳

調査エリア内からは古墳が2基確認された。これらは調査時にTM-1・TM-2と呼称したが、TM-1は土浦市遺跡台帳の下郷古墳群第13号古墳・TM-2は下郷古墳群第15号古墳に相当する。

第13号古墳 (TM-1) (第34~38図 PL 5·6·13)

位置 調査区の南東端のD~H-11~16区に確認され、一部調査区外に存在する。

重複関係 弥生時代の竪穴住居である第6号住居跡、古墳時代終末期以前の第1・2号道路遺構、近世以降の第3・4・5・6号溝、そして鳥居の基礎・現代墓等と重複している。重複関係は第6号住居跡、第1・2号道路遺構よりは新しく、第3・4・5・6号溝、鳥居の基礎・現代墓よりは古い。

現状と確認状況 調査前の状況は山林となっていて、その中に墳丘が確認できた。墳丘上には樺や楡などが生えていた。調査前の墳丘の形状は円墳と考えられた。墳丘上には石の祠が数ヶ所祀られ、墳丘裾に大谷石のブロックが巡り、南側には石の鳥居が建てられていた。また、事業主からの聞き取りによれば、墳丘裾南東側には平成になってから他の古墳出土石棺板石16枚を埋め、その中に古墳出土人骨を納めた大甕(現代墓と呼ぶ)を据え置いたとのことであった。

墳形と規模 小型の前方後円墳と考えられ、全長推定30m強と考えられる。全体的に後円部に比して前方部が短いものと考えら、括れの度合いが緩いものと言える。後円部内径約19.5m、後円部外径約24m、括れ部内幅推定12m。前方部のほとんどは調査エリア外のため、前方部内幅は推定の域を出ないが、ほぼ括れ部内幅と同様なものと考えられる。前方部長は推定10m強と考えられる。主軸方向はN-60°-Wである。

墳丘 墳丘は後円部の中央部分のみに残存し、北東部や南側は大きく崩れている。前方部の土層観察では、ローム上に直接表土が確認され、前方部には墳丘が確認されていない。後円部墳丘の最高位の標高は27.754mである。墳丘西側平坦地と墳丘最高位の比高差は約2mである。盛土下の旧表土上面の標高は約26.3mでほぼ水平に堆積し、盛土の最大厚は約1.2mである。墳丘の構築方法は土層断面図A-A'・B-B'に見れるように、土層内の数ヶ所に凸状の上層を積み、その間の凹みに土層を積む方法がとられているようである。

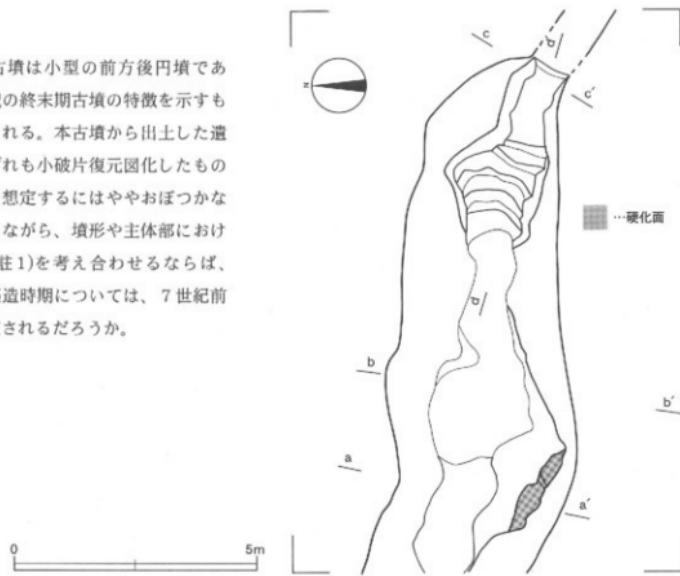
周溝 後円部南側から東側括れ部にかけ、周溝が確認された。周溝は括れ部で最も幅が広く4mを測り、深さも1.2mと深い。周溝が最も幅狭く浅いところは、後円部の北東側周溝で、幅1mを測り、深さ0.2mである。括れ部の周溝内東側でローム地山面に階段状の段差が見られた。この段差には硬化面は見られない。また、主体部に近い括れ部の内法面には硬化面の残るスロープが確認された。

埋葬施設 調査エリア内で主体部は確認されなかったが、事業主のご協力により調査エリア外で確認することができた。主体部は、前方後円墳の括れ部中央で主軸方向に沿い確認され、不整形方の掘り方とその中に箱式石棺が存在した痕跡のみが確認された。箱式石棺の板石の据え付け場所には、白色の粘土が帶状に3方を囲っている状況が確認されたが、板石は皆抜き取られている。主体部の調査は、確認まで留めた。

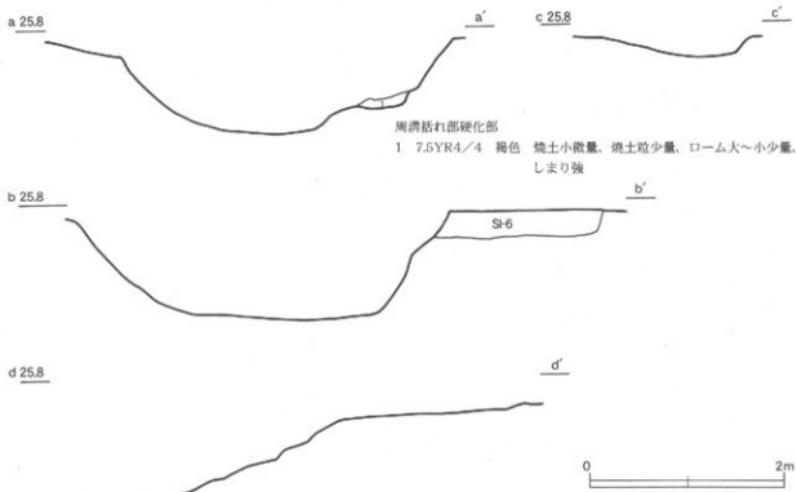
出土遺物 本古墳に伴うと考えられる遺物は非常に少ない。1は土師器壺の小破片で括れ部周溝から出土した。2は須恵器瓶類(平瓶か)と考えられる底部破片で、墳丘裾西側の攪乱中から出土した。3は有孔砥石の破片で、括れ部周溝から出土した。埴輪の破片も数片出土したが流れ込みと考えられ

る。

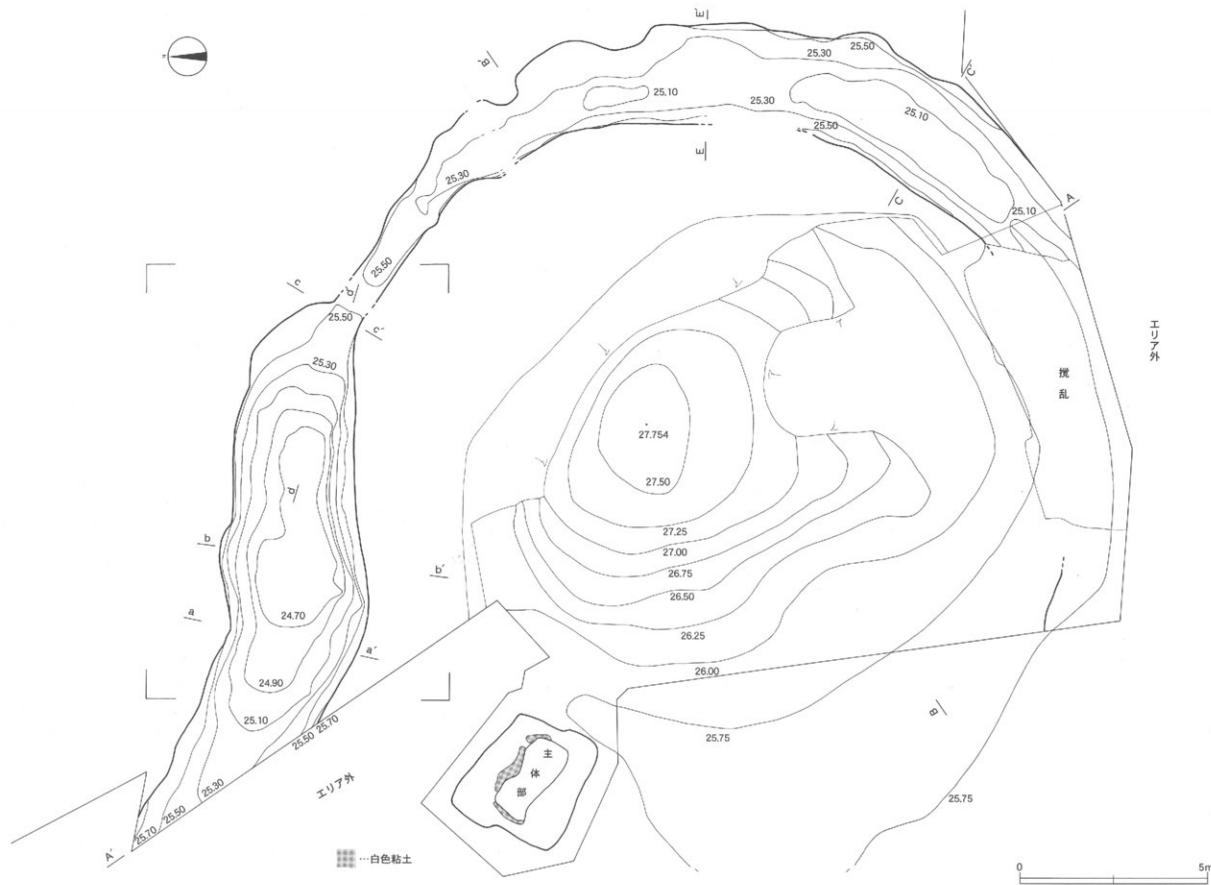
所見 本古墳は小型の前方後円墳であり、本地域の終末期古墳の特徴を示すものと考えられる。本古墳から出土した遺物は、いずれも小破片復元困難したもので、時期を想定するにはややおぼつかない。しかしながら、墳形や主体部における諸特徴(註1)を考え合わせるならば、本古墳の築造時期については、7世紀前半代が想定されるだろうか。



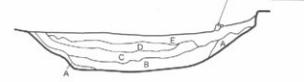
第34図 第13号古墳(TM-1)周溝括れ部平面図



第35図 第13号古墳(TM-1)周溝括れ部断面図



第36図 第13号古墳 (T M-1) 全体図



TM-1盛土

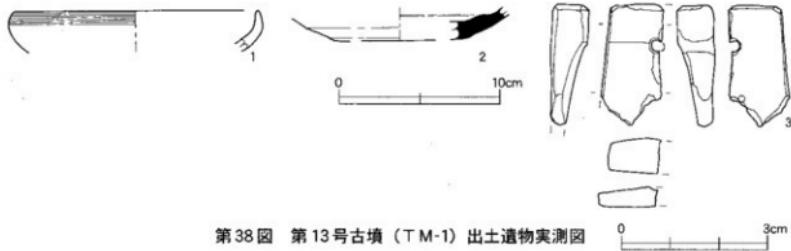
- 0 旧表土 7.5YR2/2 黒褐色 土粒子微細。ローム粒微細。黒褐色大多量。しまり弱
01 純粹文件合併層 7.5YR3/4 棕褐色 ローム粒少量。粘性弱
2 7.5YR 4/3 海色 ローム大・中少量。ローム少・中少量。黒褐色土中量。しまり強
3 7.5YR 4/3 棕褐色 ローム大・中少量。羅褐色土中量。粘性・しまり弱
4 7.5YR 4/3 棕褐色 ローム大・中少量。羅褐色土中量。粘性・しまり弱
5 7.5YR 4/4 海色 ローム大・中少量。ローム少・中少量。黒褐色土中量。粘性・しまり弱
6 7.5YR 4/4 海色 ローム大・中少量。ローム少・中少量。黒褐色土中量。粘性・しまり弱
7 7.5YR 4/4 海色 ローム大・中少量。羅褐色土中量。粘性・しまり弱
8 7.5YR 3/3 棕褐色 ローム大・中少量。羅褐色土中量。粘性・しまり弱
9 7.5YR 4/3 海色 ローム大・中・少少量。黒褐色土大・中少量。粘性弱
10 7.5YR 4/3 海色 ローム大・中少量。羅褐色土大・中少量。粘性弱
11 7.5YR 4/3 棕褐色 ローム大・中・少少量。羅褐色土大・中少量。粘性弱
12 7.5YR 3/3 棕褐色 ローム大・中・少少量。羅褐色土大・中少量。黒褐色土微細。粘性弱
13 7.5YR 4/4 海色 ローム大・中・少少量。羅褐色土中少量。粘性弱
14 7.5YR 4/4 海色 ローム大・中・少少量。羅褐色土中少量。粘性弱
15 7.5YR 4/4 海色 ローム大・中少量。羅褐色土中少量。粘性・しまり弱
16 7.5YR 4/4 海色 ローム大・中・少少量。ローム中量。黒褐色土大・中少量。粘性弱
17 7.5YR 4/4 海色 ローム大・中少量。羅褐色土大・中少量。粘性弱
18 7.5YR 4/4 海色 ローム大・中少量。羅褐色土大・中少量。粘性弱
19 7.5YR 4/4 海色 ローム大・中少量。羅褐色土大・中少量。粘性弱
20 7.5YR 3/3 棕褐色 ローム大・中少量。羅褐色土中少量。粘性・しまり弱
21 7.5YR 3/3 棕褐色 ローム大・中少量。ローム中量。黒褐色土中少量。粘性・しまり弱
22 7.5YR 3/3 棕褐色 ローム大・中少量。羅褐色土中少量。粘性弱
23 7.5YR 3/3 棕褐色 ローム大・中少量。羅褐色土中少量。粘性弱
24 7.5YR 3/3 棕褐色 ローム大・中少量。羅褐色土中少量。粘性・しまり弱
25 7.5YR 3/3 棕褐色 ローム大・中少量。羅褐色土中少量。粘性弱
26 7.5YR 4/4 海色 ローム大・中少量。羅褐色土中少量。粘性弱
27 7.5YR 4/4 海色 ローム大・中少量。羅褐色土中少量。粘性弱
28 7.5YR 3/2 黑褐色 ローム大・中少量。黒褐色土大・中少量。粘性・しまり弱
29 7.5YR 3/2 黑褐色 ローム大・中少量。黒褐色土大・中少量。粘性弱
30 7.5YR 4/4 海色 ローム大・中少量。羅褐色土大・中少量。粘性弱
32 7.5YR 3/4 植物腐化 ローム粒少量。粘性・しまり弱。純粹文件合併層

- 33 7.5YR 4/0 黑褐色 ローム大・中・少少量。羅褐色土大少量。しまり強
34 7.5YR 4/0 黑褐色 ローム中量。ローム少量。羅褐色土多量。黑褐色土少量。しまり弱
35 7.5YR 4/4 黑褐色 ローム大・中少量。羅褐色土多量。黑褐色土少量。粘性弱
36 7.5YR 4/4 黑褐色 ローム中・少少量。羅褐色土中・少少量。粘性弱
37 7.5YR 4/3 黑褐色 ローム大・中少量。ローム中・少少量。黑褐色土大・中中量。粘性弱。しまり弱
38 7.5YR 4/3 黑褐色 ローム大・中少量。羅褐色土中少量。粘性弱
39 7.5YR 4/3 黑褐色 ローム大・中少量。ローム少量。黑褐色土少量。少少量。しまり弱
40 7.5YR 4/3 黑褐色 ローム大・中中量。ローム多量。黑褐色土少量。少少量
41 7.5YR 3/2 黑褐色 ローム大・中少量。ローム中・少少量。黑褐色土大・中少量

- TM-1崩溝
- A 7.5YR 4/6 黑褐色 ローム大・中少量。ローム粒多量。粘性・しまり弱
B 7.5YR 4/3 黑褐色 ローム大・中少量。ローム粒中量。粘性・しまり弱
C 7.5YR 4/4 黑褐色 ローム中少量。羅褐色土大・中少量。粘性弱
D 7.5YR 4/4 黑褐色 ローム中少量。羅褐色土中少量。粘性弱
E 7.5YR 3/4 黑褐色 ローム中少量。羅褐色土中少量。粘性弱
F 7.5YR 3/3 黑褐色 ローム中少量。羅褐色土中少量。粘性弱
G 7.5YR 4/4 黑褐色 ローム大・中中量。ローム少量。ローム粒中量。粘性弱
H 7.5YR 4/4 黑褐色 ローム大・中中量。ローム少量。羅褐色土中少量。粘性弱
I 7.5YR 4/4 黑褐色 ローム大・中中量。ローム中量。ローム粒多量。黒褐色土中量。少少量。黑褐色土中量。しまり弱
J 7.5YR 4/3 黑褐色 ローム大・中少量。ローム少量。粘性・しまり弱
K 7.5YR 4/3 黑褐色 ローム中少量。羅褐色土中少量。粘性・しまり弱
L 7.5YR 4/3 黑褐色 ローム大・中少量。羅褐色土中少量。粘性・しまり弱
M 7.5YR 4/3 黑褐色 ローム大・中少量。羅褐色土中少量。粘性・しまり弱
N 7.5YR 2/2 黑褐色 ローム中少量。羅褐色土中少量。粘性・しまり弱
O 7.5YR 2/2 黑褐色 ローム中少量。羅褐色土中少量。粘性・しまり弱
P 7.5YR 2/2 黑褐色 ローム中少量。羅褐色土中少量。粘性・しまり弱
Q 7.5YR 2/2 黑褐色 ローム中少量。羅褐色土中少量。粘性・しまり弱
R 7.5YR 2/2 黑褐色 ローム少量。羅褐色土大・中中量。粘性弱
S 7.5YR 2/2 黑褐色 ローム少量。羅褐色土大・中中量。粘性弱

力 挖孔

第37図 第13号古墳（TM-1）土層図



第38図 第13号古墳(TM-1)出土遺物実測図

TM-1

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考			
第38図 1	土師器 环	A (16.0) B (2.5)	底盤欠損。胴下半より内側して立ち上り、口縁部は立つ。口唇部は先端尖りぎみ。口唇部外腹と内面には、横方向のナメ模様が残る。	緻密な胎土。赤色粒△ にぶい黄褐色 良	5% 周溝1・2区			
2	須恵器 半瓶	B (1.5) C (7.0)	平瓶の底盤破片か、側部と底面の種が明確ではない。底盤から種々立ち上がる。外面には刷毛ヘラケズの痕跡あり。側部外腹には全体に自然釉が薄く付着している。内面には、自然釉の付着がほとんど見られない。	胎土緻密。黒色粒△ 暗灰黃色 良	5% 埴丘3区			
第38図 3	周溝2区	有孔残石	(3.16)	(1.52)	(0.95)	(5.8)	石材名称 緑泥石岩	孔径3.3

第15号古墳(TM-2)(第39図 PL 7-13・14)

位置 調査区南西端のJ・K-16区に周溝の一部のみが確認された。ほとんどは調査区外にある。

重複関係 S K-95と重複している。重複関係はS K-95が本墳より古い。

現状と確認状況 調査前の状況は山林となっている。調査区外の隣接地に前方後円形が想定できる墳丘が存在する。墳丘の一部は過去に墓地によって削平を受けた。墳丘から調査前に埴輪片が採集された。

墳形と規模 調査区内で確認されたのは、小型の前方後円墳前方部周溝の一部と考えられる。主軸方向は推定N-33°-Wを考える。

墳丘 調査区外に全長約15mの墳丘が残る。墳丘の高さは約1.5mであるが、未調査である。

周溝 前方部北端に巡る周溝のみである。周溝幅は最大で2mで、深さ0.5mを測る。

埋葬施設 確認されていない。

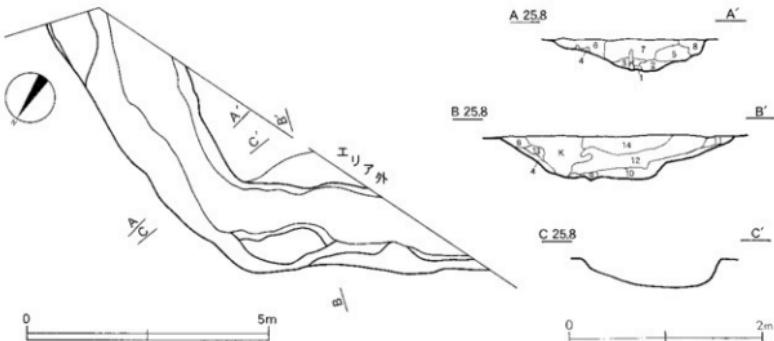
出土遺物 本古墳に伴う遺物は、埴輪片が出土している。いずれも円筒埴輪破片である。円筒埴輪の突帯は低く、断面が三角形や半円形のものが見られる。調整は縱方向のハケ目が見られるのみである。胎土には雲母が多量に含まれる。

所見 本古墳は出土した埴輪の形態的特徴(註2)から、古墳時代6世紀後半代のものと考えられる。

注釈

(註1)塙谷 修「終末期古墳の地域相—茨城県桜川河口域にみられる小型古墳の事例から—」『土浦市博物館紀要』第4号 土浦市立博物館 1992中のI類と同様のものとして考える。

(註2)塙谷 修「霞ヶ浦沿岸の埴輪—6・7世紀の埴輪生産と埴輪祭祀—」特別展示図録『霞ヶ浦の首長—古墳にみる水辺の権力者たち—』霞ヶ浦町郷土資料館 1997中の突断面の分類模式図Ⅱ類「山形」「三角形」に相当すると考えられる。また、同「第3章 考察 霞ヶ浦沿岸の前方後円墳と築造規格」『常陸の前方後円墳(1)』茨城大学人文学部考古学研究室2000の中での円筒埴輪の編年観V期に相当すると考えられ、この年代について著者は6世紀後半～末葉頃と考えている。



1	10YR4/6	褐色	ローム大極めて多量、粘性弱	8	10YR3/4	暗褐色	
2	7.5YR3/3	暗褐色	黒褐色土粒少量	9	7.5YR4/6	褐色	ローム中極めて多量
3	7.5YR3/4	暗褐色	黒褐色土粒少量	10	7.5YR4/4	褐色	ローム中多量、粘性弱
4	7.5YR4/6	褐色	ローム大極めて多量、しまり弱	11	7.5YR4/3	褐色	
5	7.5YR3/4	暗褐色		12	7.5YR3/3	暗褐色	黒褐色土粒微量
6	10YR5/8	黄褐色	粘性弱	13	7.5YR4/4	褐色	
7	10YR3/1	暗褐色	ローム粒微量、黒褐色土粒少量、しまり強	14	7.5YR3/3	暗褐色	しまり強



第39図 第15号古墳 (TM-2) 造構実測図・出土遺物実測図

TM-2

試査番号	器種	針割値(cm)	器形及び文様の特徴		地質・色調・焼成	備考
			内面	外面		
第39回 1	円筒埴輪	B (7.0)	底部破片。外面には縦ハケ調整、内面にはヘラナデ調整痕。厚さは底部付近で最も厚く約1.8cm、上方ほど薄く約1.0cm。底部端がややめくれる。		大型石英、大型長石△ 雲母○ 褐色 不良	10% 周溝3区
		C (10.0)	近で厚く約1.8cm、上方ほど薄く約1.0cm。底部端がやめくれる。			
因版番号 第39回 2	円筒埴輪片	上端に円形透孔。突出度の低い断面三角形の突部。外側には縦ハケ調整。内面ナデ。			石英△、長石△、雲母○	周溝3区
3	円筒埴輪片	上端に円形透孔。内面ナデ。			石英△、長石△、雲母○	周溝3区
4	円筒埴輪片	左端に円形透孔。外側には縦ハケ調整。内面ナデ。			石英△、長石△、雲母○	周溝3区
5	円筒埴輪片	突出度の低い断面三角形の突部。外側には縦ハケ調整。内面ナデ。			石英△、長石△、雲母○	周溝
6	円筒埴輪片	突出度の低い断面三角形の突部。外側には縦ハケ調整。内面ナデ。			石英△、長石△、雲母○	周溝3区
7	円筒埴輪底部分	突出度の低い断面三角形の突部。外側には縦ハケ調整。内面ナデ。底端がやめくれる。			石英△、長石△、雲母○	周溝1区
8	円筒埴輪底部分	底端がやめくれる。外側には縦ハケ調整。内面ナデ。厚さは厚い。			石英△、長石△、雲母○	周溝3区

第6節 道路遺構

道路遺構は2条確認されている。それぞれ第13号古墳(TM-1)の盛土下から確認された。

第1号道路遺構(第40図 PL 7)

位置 TM-1 墳丘盛土下の包含層を取り去る段階で、E・F-14・15区内に南北方向で確認された。

規模 幅最大で60cmを測り、3.5mの長さにわたり帶状に硬化面が確認された。硬化面は断面がやや皿状をなしていた。部分的に現代墓や攪乱により途切れている。

状況 薄い覆土は褐色土を呈し焼土粒が含まれた。

所見 古墳時代終末期以前のものである。

第2号道路遺構(第40図 PL 7)

位置 TM-1 の墳丘盛土下の包含層を取り去る段階で、G-16区の周溝とSD-5に挟まれた場所に、北東-西南方向で確認された。

規模 幅最大で50cmを測り、4.5mの長さにわたり帶状に硬化面が確認された。硬化面は断面がやや皿状をなしていた。南端は攪乱により壊されている。

状況 薄い覆土は褐色土を呈し焼土粒や石英の小破片も出土した。墳丘の盛土下に確認された。

所見 古墳時代終末期以前のものである。



第7節 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物としては、土器・陶器・土製品・金属製品・石器がある。これらは帰属時期の異なる遺構から出土したものや、包含層中の遺物、そして表面採集の遺物などを含んでいる。

土器（第41・42図）

土器としては、縄文土器・弥生土器・中近世・近現代に位置付けられるものを掲載した。

縄文土器は、早期前半から後期前葉に位置付けられるものが出土している。

1は、早期前半の夏島式土器の破片である。2は、早期中葉の無文土器と考えられ、1点のみの出土である。3～7・11・31は、早期末から前期初頭に位置付けられる土器で、現状ではまだ型式の内容が明確になっていない。しかしながら、これらの中には、前期初頭に位置付けられる特徴を持つ3・7などが存在すること、確実に早期末に位置付けられるものが不明なため、およそ前期初頭の範疇で良いと思う。11は下吉井式系土器の特徴を有すると思われる。8～10は、前期初頭の花積下層式土器である。いずれの土器にも3本の縄文原体による側面压痕が渦巻いて施文される。全体的に花積下層式土器の中でも新しい時期の特徴が見られる。32・33は、前期前葉の黒浜式土器の底部破片であり、緩い上げ底となる。12～20・34～37は前期後半の浮島式期の土器である。全体的な特徴として、浅鉢の出土が目立つ。21～25は、前期末葉から中期初頭の特徴を持つ土器である。26～29は、中期前半から中期後半の土器である。26は浅鉢の把手破片と考えられる。27は阿玉台Ⅲ式土器。26・28は中期中葉の土器と考えられる。29は加曾利EⅢ式土器である。30は後期前葉の堀之内式土器破片か。

38～40は、弥生土器破片である。いずれも後期前半の特徴を有する。

41～46は、中・近世の土器や陶器である。41～44は土師質土器で、41・42が内耳鍋、43がかわらけ、44は擂り鉢で43以外は中世後期のものか。45・46は瀬戸美濃系の陶器と考えられる。これらの陶器は、表土中にまとめて捨ててあったものの一部である。46は馬の目皿で18世紀後葉から19世紀初頭(註1)のものとされるが、伝世され後世に廃棄されたものか。

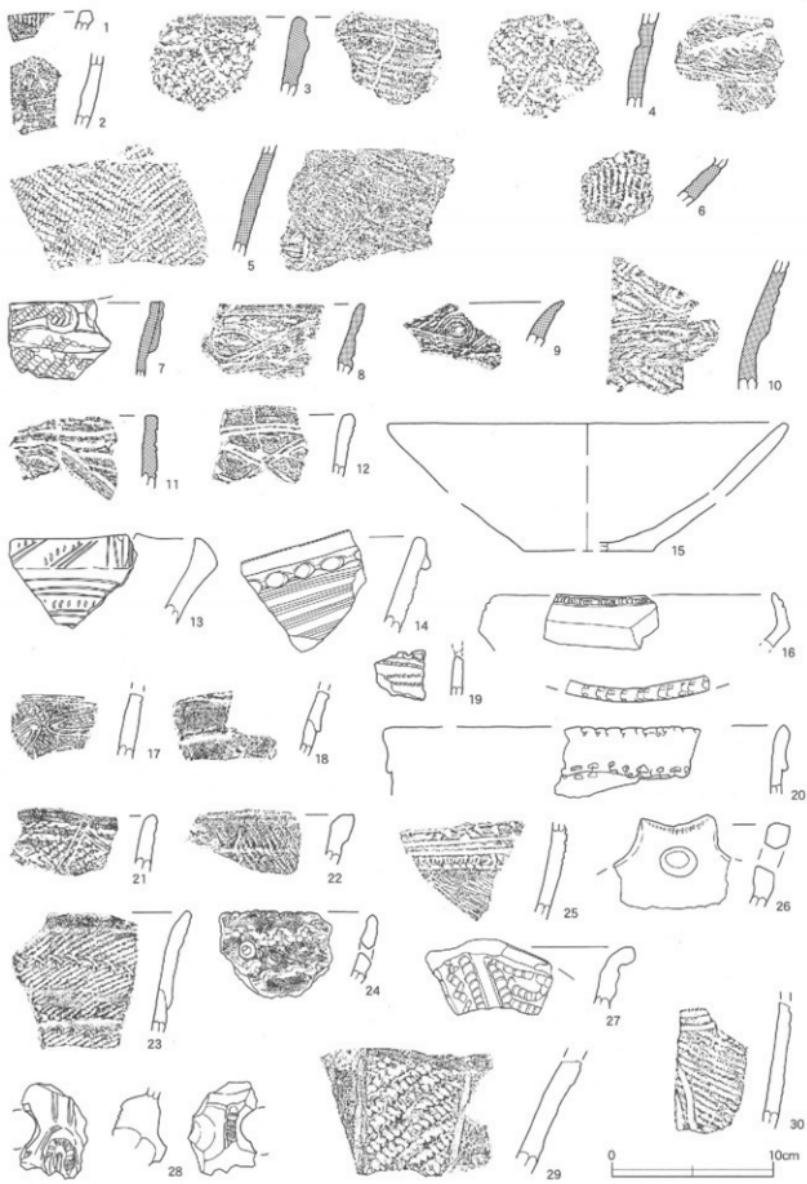
陶器で図示してはいないが、TM-1墳丘内で検出された現代墓には大甕が使われていた。この中には、明治40年代に下郷古墳群10号古墳から出土したと伝えられる人骨が納められていた。この甕内を精査すると、人骨に混じり56～58の鉄鎌や刀子が紛れていた。甕内の人骨は非常に遺存状況が良く、少なくとも2体分は存在する。

土製品（第42・43図 P L 14）

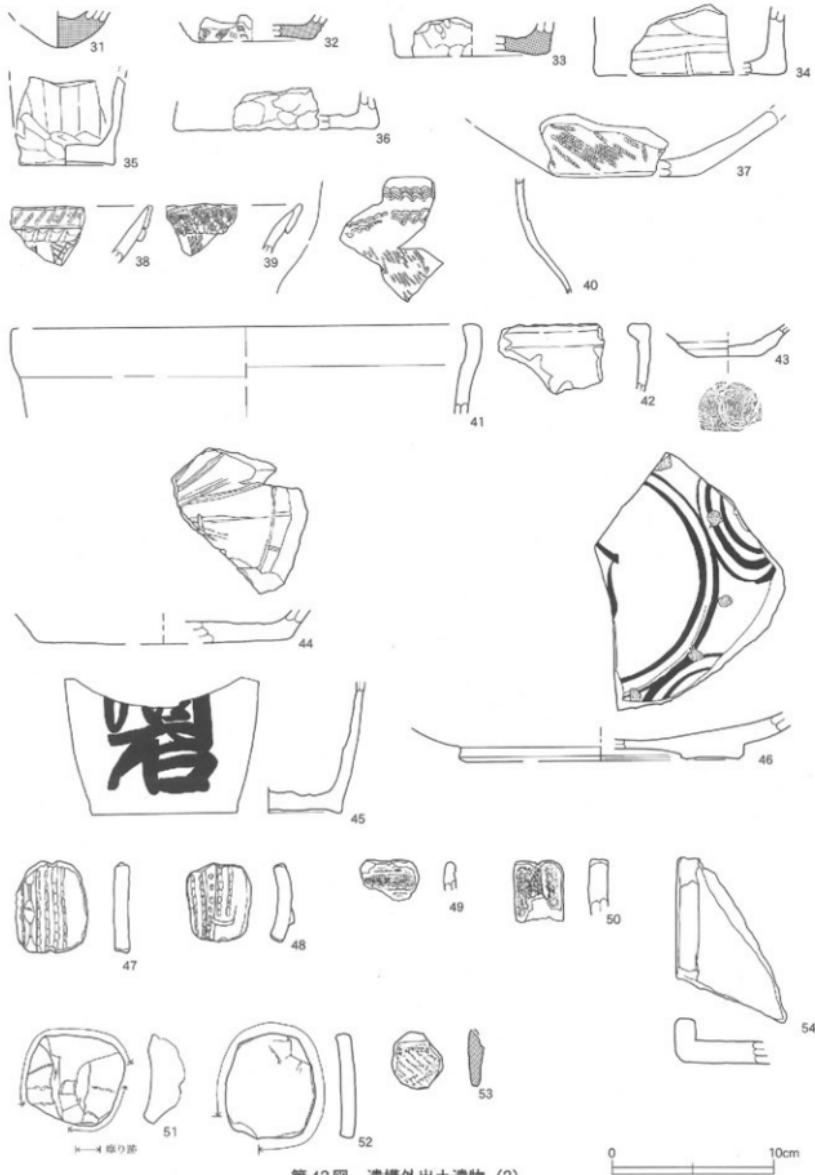
47～50は土器片鱗であり、いずれも縄文時代中期前半の阿玉台式の土器片を利用している。51～53は土製円盤である。51・52は阿玉台式土器の破片の周縁を摩っている。54は瓦質製品の破片。55は前掲の46と一緒に出土したヘツツいである。

金属製品（第43図 P L 14）

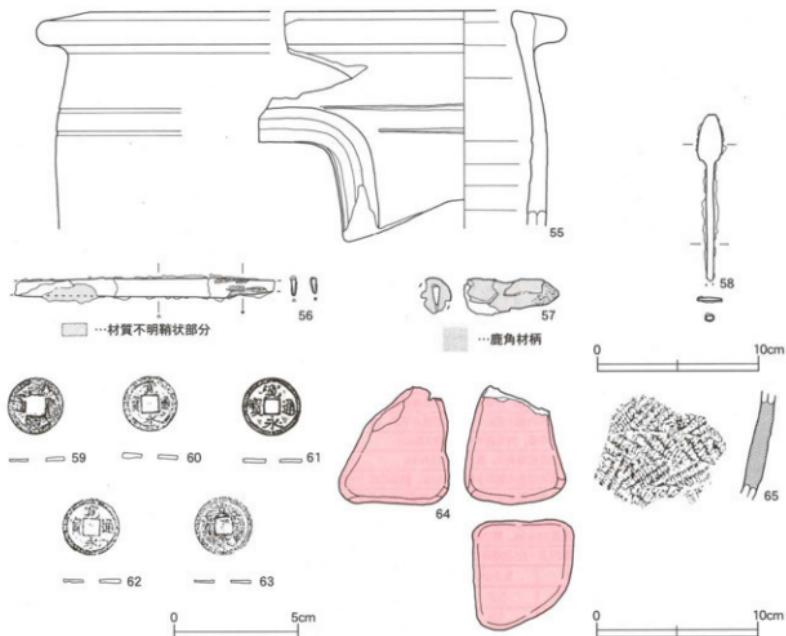
56～58は、上記の大甕内に人骨と一緒に納められていた刀子と鉄鎌である。59～63はTM-1の



第41図 遺構外出土遺物 (1)



第42図 遺構出土遺物（2）



第43図 遺構外出土遺物（3）

遺構外

図版番号	器形及び文様の特徴	胎土の特徴	備考
第41図 1	深鉢削部破片。口唇部が肥厚。器面にLR織文施文。	砂粒○	TM-2
2	深鉢削部破片。内外面無文。外面に擦痕あり。	砂粒○	TM-2
3	深鉢口縁部破片。口唇部は円弧状、薩帶が遡る。器面全体にRL織文施文。内面条痕文。	白色粒○、繊維○	表採
4	深鉢削部破片。器面にRL・LR織文による羽状施文。内面条痕文。	白色粒○、繊維○	SI-5
5	深鉢削部破片。器面にRL・LR織文による羽状施文。内面条痕文。	白色粒○、繊維○	TM-2
6	丸底土器底部付近の破片。RL織文施文。	白色粒△、繊維○	TM-2
7	深鉢口縁部破片。薩帶が遡る。薩帶・粘土紐・地文にLR織文施文。	白色粒△、繊維○	TM-1
8	深鉢口縁部破片。織文原体3~4単位の側面圧痕。刺突文。頭部に隆起部。	白色粒△、繊維○	SI-5
9	深鉢口縁部破片。織文原体3~4単位の側面圧痕。刺突文。頭部に隆起部。胸部地文RL織文。	白色粒△、繊維○	H-7区
10	深鉢口縁部破片。織文原体側面圧痕。円形刺突文。頭部に隆起部。胸部地文RL織文。	白色粒○、繊維○	TM-1
11	深鉢口縁部破片。口唇部平坦。腹部半周に平行沈線・波状文。	繊維○	TM-1
12	深鉢口縁部破片。半周状口縁部。半周竹管状工具による平行沈線。	砂粒○	SI-4
13	深鉢形状口縁部破片。口唇部は外折ぎ状。ヘル状工具による横擦と半周竹管状工具による刺突文。	砂粒○	TM-1
14	深鉢形状口縁部破片。口唇部下に粘土紐付し押圧。半周竹管状工具による平行沈線。	砂粒○、赤色粒△	TM-1
15	底部から外反する浅鉢。内外面及び底面ナデ、ミガキ。	砂粒△、雲母△	SD-2
16	浅鉢口縁部。口唇部が内縮する。口唇部下に半周竹管状工具による弦形文。内外面丁寧なナデ。	砂粒○	C-6区
17	胴部破片。地文RL織文。半周竹管状工具による張羅文。	砂粒△、赤色粒△	表採
18	深鉢輪積み部を有段化させる口縁部破片。ヘル状工具による山形文。	砂粒○	試掘3Tr
19	補修孔付土器。内外面より穿孔。表面には有筋平行線文。	砂粒○	SK-31
20	深鉢輪積み部を有段化させる口縁部破片。口唇部と有段部に半周竹管状工具による刺突文。	砂粒△	SK-3付近
21	深鉢波状口縁部破片。口唇部下に織文原体側面圧痕。地文にLR。半周竹管状工具による山形文。	砂粒○	SK-19
22	深鉢有段口縁部破片。口唇部内折ぎ状。地文にCLR継回転施文。	石英○、長石○、赤色粒△	TM-1
23	深鉢輪積み部を有段化させる口縁部破片。口唇部は舌状。地文にはLr結節織文施文。	砂粒○	G-5区

図版番号	器種及び文様の特徴	胎土の特徴	備考					
第41図24	深鉢補修丸付土器。口唇部に刻み目を持つ口縁部破片。砧鉢脚文施文。裏面に穿孔途中の孔あり。	白色粒○、赤色粒△	SI-1					
25	深鉢側面部破片。平行沈線と二角形刻文。竹管状工具による円形刺突文。地文にL記施文。	石英○、長石△	H-6区					
26	浅鉢把手。中央に孔がある。内面に縞模持つ。口唇部にはヘツ状工具による刻み目。	石英○、長石△、雲母△	F-8区					
27	深鉢口縁部破片。口唇部が屈曲。内面に縞模持つ。疊起唇に沿って角形文施文。	砂鉄○、雲母○	SD-2					
28	深鉢口縁部把手手波片。左縁に孔がある。疊滑が内外面に添付。その上に刻み目。	石英○、長石△、雲母○	SK-49					
29	深鉢側面部破片。左縁に孔がある。疊滑が内外面に添付。その上に刻み目。	砂鉄○、小石△	TM-2					
30	深鉢側面部破片。花輪により区画された一部が壊れています。地文にはL記施文。	石英○、長石△、雲母△	H-6区					
第42図31	尖底土器の底部片。外面上部斜面の付く貝殻腹縫による刺突文。内面調整不明瞭。	繊維△	TM-2					
32	底部破片。底部は上げ毛。地文にRL施文され。半纏竹谷状工具による爪形文。	繊維○	TM-1					
33	深鉢底部破片。底部は上げ毛。地文にRL施文。	鐵細○、白色粒△	G-5区					
34	深鉢底部破片。外側擦痕、直面ナデ。	砂鉄○、赤色粒△	TM-1					
35	深鉢底部破片。外側擦痕、直面ナデ。	砂鉄○、赤色粒△	試掘1Tr					
36	深鉢底部破片。内外面ナデ。	石英○、長石○、雲母○	TM 2					
37	深鉢底片。表面にRL施文。内面ナデ。	砂鉄○	SI-4					
38	複合口縁の下端部に沈線を引き。勝松工具による押圧。頭部に切子目。口唇・口縁に綱文施文。	石英○、長石○	TM 1					
39	複合口縁の下端部に、棒状工具による文々刺突。頭部には5本単位の御垂文。口唇に燃糸文施文。	石英○、長石○	TM-1					
40	頭部の口縁部にSI 6.1の口唇と同様な御垂文と燃糸文。地文燃糸文。	石英○、長石○、雲母△	TM-1					
41	土師質土器。内面焼成跡。口縫線跡らむ。口部平底。陶化物付着。復元口径29cm。	石英△、長石△、雲母△	TM-1					
42	土師質土器。内口縫線跡。口唇部が内側に突出する。口唇部はV字型。内外面ナデ。	白色粒○、赤色粒△	E-12区					
43	土師質土器。からら。底面に切子目。内外面ナデ。底径8.8cm。	赤色粒△	TM-1					
44	十節質土器。瘤り体。内面に放射状の沈線あり。復元底径15.6cm。	石英△、赤色粒○	TM-1					
45	瘤戶・美濃系陶器。悪利底部。再現灰白色の瘤が全体にかかる。頭部には「～酒窓」と筆書き。	灰黄色の繊維な胎土	一括					
46	瘤戶・美濃系陶器。馬の口縁。内面に灰白色の施釉。内面に馬の目又。底面蛇口高台。	灰色の緻密な胎土	一括					
47	瓦質製品。端部が折れ曲がる。折れ曲がる端部擦れている。墨褐色。	石英△、長石△、雲母△	TM-1					
第43図55	ヘツつ。復元口径26.4cm。残高13.4cm。異口縫線口縫線部に軋土粘り付ける。	赤色粒△、雲母△	一括					
65	紀文・底部分部内側破片。0段落多量のL記・RL別頭部による羽根彫文。繡文の単位が嵌入。	石英○、白色粒○、黑鐵△	貝ブロック					
図版番号	注記番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材質名等	備考
第42図47	H-7区	土器片舞	5.5	4.4	0.8	30.9	土 磨	上下に刻み
48	SK-35No.1	土器片舞	4.5	4.0	0.8	25.0	土 器	上下に刻み
49	SI-4	土器片舞	(2.5)	3.5	0.7	(7.3)	土 器	欠損品
50	SK-13	七面片舞	(3.8)	3.0	3.5	(18.0)	土 器	欠損品
51	H-7区	十割円盤	5.5	6.0	2.0	57.0	土 器	圓絶壁
52	弧形3'7r	十割円盤	6.4	5.5	0.9	48.0	土 器	圓絶壁
53	TM-1	十割円盤	3.5	3.0	0.9	9.0	土 器	円形に割れ
開裂番号	注記番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材質名等	備考
第43図56	現代墓	刀 子	(16.1)	1.2	0.4	(21.4)	鐵	調部分繩か
57	現代墓	刀子の柄	(5.9)	2.2	1.8	(17.2)	鐵・虎角	直角材倉存
58	現代墓	鍔 鍔	(10.3)	1.6	0.2	(9.6)	鐵	
回収番号	注記番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材質名等	備考
第43図59	現代墓	鍔 鍔	2.35	0.75	0.1	1.4	銅	銅部分繩か
60	TM-1 2区	寛永通寶	2.3	0.65	0.12	2.7	銅	埴丘表土出土
61	TM-1 3区	寛永通寶	2.4	0.6	0.12	3.1	銅	埴丘表土出土
62	TM-1 4区	寛永通寶	2.3	0.7	0.12	2.1	銅	埴丘表土出土
63	TM-1 4区	寛永通寶	2.4	0.7	0.1	1.9	銅	埴丘表土出土

註記

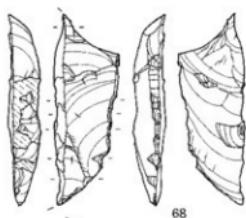
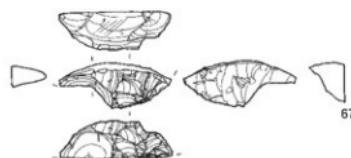
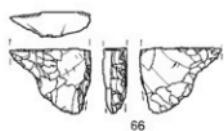
(件1) 長佐古真也「江戸遺跡出土の瘤戸・美濃系陶磁器」『図説 江戸考古学研究事典』江戸遺跡研究会編2001

墳丘表上から出土したものである。

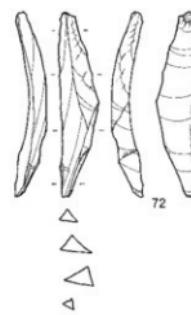
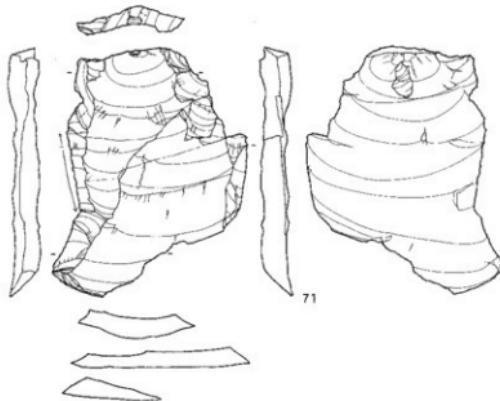
石器（第43～48図 P L 14）

本調査区内の遺構外から130点の石器を検出した。以下各時代・器種別分類を行い特徴を記す。旧石器時代の資料としては、ナイフ形石器1点、搔器類2点、楔形石器2点、剥片4点、石核1点の合計10点を抽出した。全点ローム層以外からの出土である。ナイフ形石器(66)は褐色の旧風化面と乳白色の新風化面があり、器体の一部に残存する旧風化面に認められる二次調整の状況から、当初はナイフ形石器であったと判断したため、ここで再度紹介する。右側面に施した二次調整剥離が80度以上の急斜度剥離である。搔器類には、栃木県高原山産黒曜石製の緩やかに曲線を呈する資料(67)と、直線状刃部をなす(硬質頁岩製)の資料(68)がある。楔形石器は教育財団調査エリアの出土資料と比較して、この時代の資料と判断した。剥片類には微細な剥離面がある剥片(71・72)と、高原山産黒曜石製の資料(73・74)があり、剥離面を介した接合関係を示す資料(73・74)も含まれる。石核(75)では、一面に礫表皮を残したまま剥離方向が一点に集中する状況に剥片剥離が行われていた事を認めた。おそらく製作された剥片の形状は不定形剥片が主体であったと考えられる。

縄文時代の石器としては、槍先形尖頭器1点、有茎尖頭器1点、石鏸8点、二次調整石器3点、楔状石器8点、石錐1点、剥片類77点、石核2点、打製石斧1点、磨製石斧1点、研磨・敲打器17点の合計120点を検出した。槍先形尖頭器(76)は周縁部を中心に整形加工を施すが、基部側は加工程度が低い。有茎尖頭器(77)は、右側逆刺端がやや摩滅する。石鏸は完成・部分折損品(78～83)と未完成(84～85)がある。83は非常に細かな整形剥離を施した後、凹凸に関係なく全面が摩滅している。「トロトロ石器」と呼称される、異形部分磨製石器に類似する摩滅状況である。二次調整石器は、剥片の一部に二次調整を施した石器で、88などは先頭部を意識した整形と考えられ、石鏸を中心とした小型剥片石器の製作途中の形態と考えている。楔状石器(89～95・107)としたものは、両極打撃が確認されネガ面によって構成される資料である。これらは、このような形の形成を目的として製作されたものではなく、更に加工を施し他器種製作の素材であるとの考えにより、「楔形」ではなく「楔状」とした。78の石鏸の基部は通常多用される押圧剥離による整形ではなく、ステップフラクチャーを生じ潰れ線状打面が認められた。この潰れ線状打面の残存は、楔状石器が素材として使用された可能性を示す物として注目すべきである。石錐(96)は錐部先端を折損後も使用したらしく、回転運動によると考えられる稜線摩滅(範囲図示)が認められた。剥片類は3cm前後の資料が主体を占める。剥片剥離では潰れ線状打面・打面破砕でバルブが生じていないことから、両極打撃による工程によって生産されたものと考えられる。石核には黒曜石・メノウの資料がある。ここまで小型剥片石器群は、節理面の発達が弱い良質のチャートが多用されている。打製石斧(112)は礫の角部分を利用した擦状の形状で左側縁と刃部に調整加工を施している。側縁に潰し加工は認められない。磨製石斧(97)は剥離による整形部分が研ぎ残されている。刃部には幅1mmの線状痕で構成される摩滅面が認められる。研磨・敲打器類には、「磨り石」「敲き石」「石皿」などの石器が含まれている。この器種は加工による分類ではなく、使用痕による分類が中心である。64には表面に赤色顔料が厚く付着し、顔料粉砕に使用したものか。SI-2の周辺から出土した。98は石皿で両面に窪みを生じさらに片面には1cm前後の逆円錐形の窪みが多数認められる。111は幅1mmの細溝が多数分布しており、金属刃の研ぎによって生じた可能性が高く、古墳時代以降の石器と考えられる。



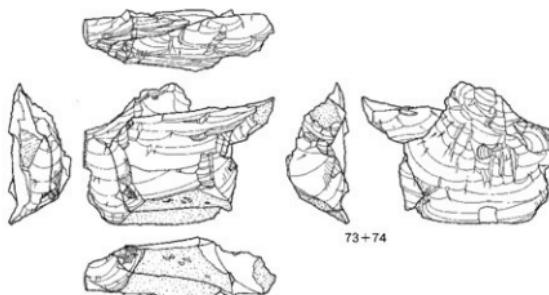
△
△
△
△
△



△
△
△

第44図 遺構出土遺物 (4)

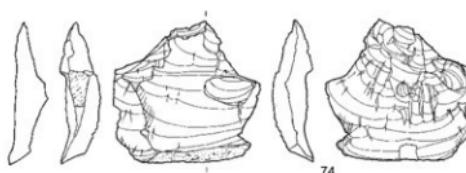
0 10cm



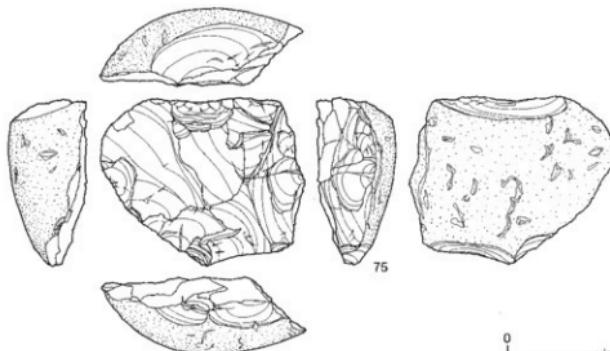
73+74



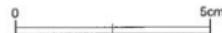
73



74



75



第45図 遺構外出土遺物 (5)



第46図 遺構外出土遺物 (6)



第47図 遺構外出土遺物 (7)



第48図 遺構出土遺物（8）

図版番号	登記番号	諸種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材名	備考
第43図64	SI 2 No.27	研磨器	7.2	5.3	6.8	400.6	安山岩	赤色顔料付着
第44図66	SI-3 3L5	ナイフ形石器	(1.65)	(2.1)	0.63	(2.1)	硬質頁岩	石器に再加工
67	K-12区	研磨器	(1.15)	(2.83)	0.98	(2.4)	黒曜石(高原山産)	
68	SK-50	磨器	(4.93)	(1.69)	0.80	(5.1)	硬質頁岩	
69	SI-12L5	楔形石器	2.09	1.87	1.13	4.6	ガラス質黑色安山岩	
70	H-6K	楔形石器	1.52	(2.55)	0.65	(3.0)	ガラス質黑色安山岩	
71	TM-1 1区	剥片	6.27	5.85	0.65	17.2	メノウ	
72	TM-1	剥片	4.76	0.98	0.51	1.9	珪質岩	
第45図73	TM-1周溝1区	剥片	2.91	4.3	1.22	9.0	黒曜石(高原山産)	
74	TM-1	剥片	3.66	3.79	1.00	10.0	旭曜石(高原山産)	
75	SI-3 3区	石核	4.32	5.39	1.97	50.6	ガラス質黑色安山岩	
第46図76	SK-73	槍先形尖頭器	3.66	1.42	0.50	2.8	チャート	
77	SI 1No.43	有茎尖頭器	2.69	0.99	0.39	0.7	チャート	
78	SK-85	石礫	2.41	1.38	0.55	1.6	ガラス質黑色安山岩	
79	TP-3No.5	石礫	1.65	1.25	0.60	1.0	メノウ	
80	SI 1No.6	石礫	1.46	1.2	0.36	0.5	チャート	
81	TM-1 4区	石礫	(1.74)	1.56	0.44	(1.2)	チャート	
82	SK-75	石礫	(1.83)	1.42	0.30	(0.6)	チャート	
83	SI-4No.144	石礫	2.52	1.24	0.40	0.7	チャート	全体が摩滅
84	TM-1	石礫	2.7	2.62	1.13	5.7	チャート	未製品
85	C-6区	石礫	2.77	2.11	0.78	4.5	チャート	未製品
86	SI-4No.598	二次調整石器	2.68	1.99	0.77	4.1	チャート	
87	G-6K	二次調整石器	2.22	1.28	0.81	2.8	浅鉢岩	
88	ブレ	二次調整石器	2.28	2.25	0.81	3.2	チャート	
89	TM-1 4区	楔状石器	3.11	1.92	1.31	9.4	チャート	
第47図90	G-3KNo.2	楔状石器	2.61	1.81	0.92	3.9	チャート	
91	C-5区	楔状石器	2.22	3.37	0.69	4.6	チャート	
92	C-6区	楔状石器	2.28	3.08	0.95	6.8	チャート	
93	B-8区	楔状石器	2.48	1.25	1.02	3.3	チャート	
94	TP-3No.2	楔状石器	2.68	2.06	0.96	5.2	チャート	
95	TM-1 3区	楔状石器	4.38	1.79	1.64	13.1	チャート	
96	F 9・10区	石錐	2.97	1.50	0.92	3.9	チャート	先端削摩耗
97	TM-1 1区	磨製石斧	6.2	3.23	0.88	32.4	緑色巖灰岩	刃部純角化
第48図98	TM-1HNo.1	石皿	(19.1)	(9.8)	(7.0)	(1.210)	閃綠岩	被熱赤化
99	SD 2No.2	研磨・敲打器	9.9	(5.3)	4.7	(320)	安山岩	
100	TM-1	研磨・敲打器	(6.1)	(5.8)	(3.5)	(140.6)	安山岩	
101	TM-1 1区	研磨・敲打器	8.4	7.7	3.5	285.5	花崗岩	被熱赤化
102	SK-45	研磨・敲打器	6.0	4.3	3.0	106.3	安山岩	
103	TM-1 1区	研磨・敲打器	7.75	4.75	3.0	137.4	安山岩	
104	TM-1周溝2区	研磨・敲打器	13.0	4.7	4.5	827.1	閃綠岩	
105	H 7区	敲打器	(5.9)	(6.1)	(3.6)	(163.7)	安山岩	
106	TM-1 1区	敲打器	5.1	4.9	2.15	83.1	石英斑岩	被熱赤化
107	D-9KH	楔状石器	10.8	5.9	(3.6)	(325.8)	ホルンフェルス	
108	TM-1 4区	砾石	5.65	4.7	2.45	57.0	砂岩	
109	TM-1 1区	敲打器	9.35	4.65	3.6	163.8	浅鉢岩	
110	TM-1 2区	研磨・敲打器	9.5	5.7	4.6	354.2	ホルンフェルス	
111	TM-1 2区	砾石	13.1	4.5	(2.0)	(183.9)	安山岩	
112	TM-1周溝2	打製石斧	11.7	5.5	3.3	247.7	砂岩	

第4章 調査エリア外貝ブロック (第43図 PL7)

この貝ブロックは、茨城県教育財団調査エリアの切り土工事後の法面にて2000年7月に発見された。発見の状況は、切り土法面に確認された深さ数mの擾乱坑断面におよそ30×30cmの貝ブロックが確認された。この擾乱坑には、重機による痕跡が残っていた。また、坑壁面が焼け、一部炭化した生木なども出土しているため、同所の付近の木の伐採・処理に伴って掘られたものと考えられる。露出していいた貝ブロックは、擾乱坑内に黒褐色土混じりの塊として投入されたものと考えられる。

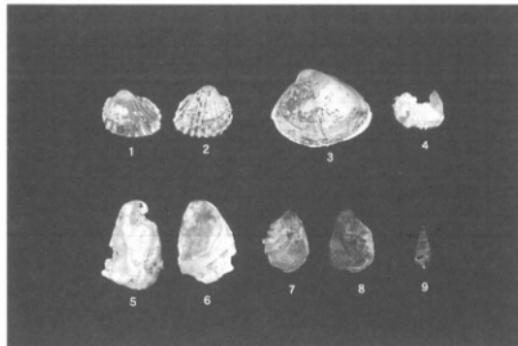
この地点は、財団調査エリア内のC2b7区付近の擾乱(2000(財)教育財団の全体図参照)に相当する。同報告書内でも、同所付近の第2号竪穴状遺構から貝片2点が出土している記載が見られる。

この貝ブロックの貝については、でき得る限り採集した。以下については、その採集した貝ブロックの内容について記す。

貝ブロック内にて確認された貝の種類は、ハイガイ・マガキ・ハマグリ・カワアイ・ナミマガシワの合計5種類である。一番多いのはマガキで、右左が確認できるもので右が48個・左が45個である。2番目はハイガイで右が36個・左が47個である。ハマグリは右が2個・左が5個であった。この他に、ナミマガシワ1点、カワアイが1点確認されている。出土した貝はいずれも小型のもので、ハイガイは長さ2.5～3.0cm位のものが大多数である。最高で3.2cmのものである。マガキは遺存状況が良くないが、およその高さは6cm前後と考えられる。

出土したマガキには、被熱して暗い灰色に変色したものや、円縁や他の貝などに付着した痕跡をとどめるものも見られた。

これらの貝以外に貝ブロック内からは、礫が数点と土器片数点が出土した。土器は第43図の65であり、前期の花積下層式土器から関山式土器の時期のものと考えられる。この貝ブロックは、貝の種類と出土土器の時期の間には整合性があるといえ、同様な時期と考える。



調査エリア外貝ブロック出土貝

(1・2ハイガイ、3ハマグリ、4ナミマガシワ、5～8マガキ(7・8は被熱)、9カワアイ)

第5章 調査のまとめ

今回の調査では縄文時代・弥生時代・古墳時代が中心となり遺構・遺物が確認された。以下はそれぞれの時代の成果及び問題点等について若干触れてみたいと思う。

1 旧石器時代層序の検討

今回の調査エリア内では、4ヶ所(TP 1~4)の調査区を設けて旧石器時代の遺物の検出に努めたが、遺物の集中出土上等は確認できなかった。ここでは、隣接する教育財団調査エリアでの調査成果について触れておきたい。報告書によれば、「石器は、南北約4.1m、東西約3.9mの円形状の範囲内に存在し、特にC3a3区に集中している。層位的には、褐色のソフトロームからソフトロームとハードロームの漸移層の標高25.182m~25.619mにかけて出土している。」とある。出土層位については、「立川ローム最上部のガラス質火山灰層に比定される。」としている。今回の調査では、先の地点の南方約10mのTP 1において基本層序を観察した。どちらの地点も台地中央の平坦部であり、大幅に層序の変化はないものと考えられる。このことから、この石器ブロックの層位は、今回確認した基本層序第6・7層に相当すると考えられる。このことから推察すると、先の石器ブロックの出土層位は、「立川ローム最上部」ではなく、始良丹沢火山ガラスを濃密に包含する層位及びその下層から出土したと考えられる。出土石器の報告内容についても、再検討が必要かと思われる(註1)。

2 縄文時代前期を中心とした特徴

縄文時代の遺構は、前期初頭から中期中葉の時期のものが確認されている。

今回確認された前期初頭花積下層式期の竪穴住居跡は、教育財団調査エリア内で確認された住居跡群とは距離を置き1軒のみの検出であった。しかしながら、先の調査を含め、全体的に考えた場合、県内における数少ない花積下層式期の集落跡の調査事例であるといえる。県内では古くから同期の貝塚の存在については注目されてきたが、集落遺跡としての印象は薄い(註2)。千葉県方面に目をやると沼南町石揚遺跡(註3)や同成田市子ノ神遺跡(註4)などの良好な集落遺跡が調査されているが、やはり同期の集落遺跡は僅少である。この時期の遺跡内で竪穴住居跡が群在する在り方や、竪穴住居跡内の柱穴や炉の構造に関しては、特徴的といえる在り方・構造を示すものが多い。このような特徴は本遺跡内でも同様に見られる。また、遺跡構内からの円錐多量出土や楔状石器の出土も特徴的である。

今回の第3号住居跡から出土した土器の特徴は、縄文原体側面圧痕を持つ上器が非常に少なく、不明瞭な有段口縁のものが多い。地文は別々の縄文原体横位回転による羽状縄文が主体を占め、単位幅は広い。放射肋のある貝殻による施文土器も見られる。これらの土器の位置付けは、吹野富美男氏の花積下層式第II段階(註5)に相当するものと考えられる。そして、同住居跡出土の表面縄文・裏面条痕文土器については、同氏の花積下層式第I段階のものに相当すると思われる。これに比べ、教育財団調査エリアで確認された花積下層式期の竪穴住居跡は、その多くが先の花積下層式第II段階よりも新しい様相が多く認められる。同一台地上での集落の変移・変遷が想定される。

前期後半の竪穴住居跡は1軒確認され、出土した土器の文様等の特徴から、松田光太郎氏の考える浮島Ia式新段階(註6)の土器に相当するものと考えられる。この住居跡内北側に存在する柱穴とは異

なる形態のP 11からは、ほぼ完形に復元できる土器が逆位で出土した。浮島式期の同様な位置・形態のピットが見られる住居跡として、市内では権現前遺跡第3号住居跡がある(註7)。また、本住居跡の主柱穴と考えられるP 7からは、敲打器に転用された磨製石斧が出土し、先の例を含め興味深い出土例といえる。

3 弥生時代後期前半の石英礫破片多数・多量出土

今回の調査では、弥生時代の竪穴住居跡が3軒確認された。これらの竪穴住居跡群は、近接して確認された。これらの住居跡から出土した土器の特徴は、口縁部全体が厚みのある複合口縁を持つものと、口縁部下端のみが肥厚し強調されるものとがある。前者のものではその下端部に指頭圧痕や棒状工具で沈線を引きそのまま押圧している。また、後者では、口縁部下端のみを強調した指頭や棒状工具による押圧隆起線となる。口唇部は縄文施文のものと、内外より押圧するものがある。頸部には竹管状・柳葉状工具による縦区画がなされる。地文には附加条1種(付加2条)や絡条体(燃糸文)や直前段反撃りも見られる。底面にはいずれも木葉痕が残る。

このような土器の特徴は、後期前半の土器の特徴で、特に海老沢稔氏の茨城後期弥生編年のII期(註8)を中心とした土器の特徴を示すものと考えられる。これに対し、財团調査エリアの出土土器は、密な横走文の施文など全体的に後出的な特徴が目立つようと思われる。

今回の調査での特徴的な事例として、第4号住居跡内の微細な石英礫破片の多数・多量(註9)出土があげられる。このような事例は、市内原田遺跡群の西原遺跡で注目された。同遺跡調査報告書では石英(註10)の名称ではなくアブライト(半花崗岩)礫の名称を用いているが同一のものである。この礫破片出土の特徴として「大きさは様々で統一性は見られない。…簡単な使い捨ての礫器の様なものとして使用した可能性も考えられ」と位置付けられている。特にその出土状況については炉の周辺から出土する傾向があると指摘された。今回の調査では、出土した破片等の内90%以上が微細なもので占められており、重量におけるある意味での統一性が見られたが、炉の周辺から出土していることは同様である。

そして、これら石英礫破片多数・多量出土が見られる住居跡の時期については、市内の弥生時代竪穴住居跡を通観すると、後期前半の範疇のものから多く見られる傾向がある。原田遺跡群の各遺跡の石英礫破片の出土状況を調べると、後期後半に入りその出土重量や個数は急激に減少するようである。この石英礫破片中には、敲打痕付石器と呼んだ丸みを帯びた自然面と敲打痕が観察されるものがあり、転石を利用し、敲くまたは敲かれる使用方法を持つ石器と考えている。その使用目的については今後検討を要する。これらの石英礫破片多数・多量出土は、現状で土浦市域を中心として特徴的に見られる。同時期の周辺部(註11)での出土数・量は少ない。

この他、異なる石材の石器との関連も今後の検討課題となろう。また、第5号住居跡出土2の土器内には石器や円礫が入った状況で出土し、特異な出土状況といえ興味深い(註12)。

4 古墳群に伴う土壤墓群

今回の調査では古墳が2基調査され、第13号古墳・第15号古墳共に前方後円墳と考えられる。これらはその形態や出土遺物の特徴から、前者が7世紀前半で後者が6世紀後半に位置付けられる。すで

に調査済みの財團調査エリアの古墳5基を含めてその占地を考えると、台地北東側には古墳群が営まれず、古墳群によって囲まれた空間地が存在する。この空間地を中心として複数形態の土坑が群在して確認され、その形態から墓壙と考えられる。これら土壙墓の形態は大きくA・B・Cの3種類に分けられ、これらから伴出する遺物は非常に少ない。しかしながら、A類の1基からは5世紀末葉段階の赤彩された土師器坏が出土し、他の1基からは無茎鉄鏹が出土した。B類やC類に伴う出土遺物は皆無である。これらの土壙墓のすべては、古墳と重複関係を持つものが無く、古墳群との関連が想定できる。

同様な土壙墓が古墳群と一緒に発見された例として、市内十三塚A遺跡(註13)や新治村田宮古墳群(註14)・鹿嶋市大塚古墳西遺跡(註15)・下館市八丁台遺跡(註16)などがあげられる。また、古墳群以外の墳墓と一緒に確認された事例として、市内石橋南遺跡(註17)があり、藏骨器を伴う火葬墓も同一調査エリア内から見つかっている。これらの中で、伴出遺物が明確なものは①田宮古墳群第23号土坑、②八丁台遺跡第10・42号土坑や、③石橋南遺跡第1号土壙墓がある。①は今回分類のB類形態と同様で、6世紀後半から7世紀前半に位置付けられる須恵器提瓶が出土した。②では両方とも今回分類のC類形態に類似し、一方から9世紀前葉の須恵器坏と刀子が出土し、他方から同時期の須恵器坏が出土した。③では今回分類のB類形態に類似する有段構造を持ち、9世紀前葉頃の倒位の須恵器坏が出土した。

これらの事例から、先の3形態の中でA形態とB・C形態では、時間的な前後関係が考えられる。そして、B・C形態については、古墳時代以降にも引き継がれる可能性が考えられる(註18)。

註釈

- (註1)座田恵一氏に御教示頂いた。特に楔形石器の多数出土は特徴的と言えること。
- (註2)貝塚遺跡として水戸市大串貝塚・小川町野中貝塚・大洗町道理山貝塚などが古くから注目されてきた。集落遺跡としては茨城町南小割遺跡がある。これらでは花崗層式でも新しい段階または二ッ木式の範疇で捉えられるものが出土している。(財)茨城県教育財團「南小割遺跡・権現堂遺跡・親塚古墳・後原遺跡ー茨城中央工業団地造成予定地内埋蔵文化財調査報告書一」1999
- (註3)(財)千葉県文化財センター「石掃遺跡ー手賀の丘少年自然の家建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一」1994
- (註4)(財)印旛郡市文化財センター『川栄遺跡群 ドゥ・スポーツカントリー成田ゴルフ場造成予定地内埋蔵文化財調査報告書(1)』1999
- (註5)吹野富美男「茨城県における縄文時代早期終末から前期初頭土器群についてー遠下遺跡第5群土器の再検討ー」『研究ノート』3号 1994 で吹野氏は、谷藤保彦「群馬県における早期末から前期初頭の土器」『第7回縄文セミナー早期末から前期初頭の諸様相』1994を参考に、茨城県中部から北部の上器様相の変遷を述べた。
- (註6)松田光太郎「浮島式土器の研究」『古代探叢』IV 早稲田大学考古学会 1995による。
- (註7)土浦市遺跡調査会「権現前遺跡」2000の中の第3号住居跡では、住居北壁に接して長径1m・短径70cm・深さ30cmの楕円形ピットが見られた。ピット内からは、深鉢形土器の胴部～底部が割れて出土している。
- (註8)海老沢 稔「茨城県における弥生後期における土器編年」『東日本弥生時代後期の土器編年』東日本埋蔵文化財研究会福島県実行委員会 2000及び海老沢 稔「恋瀬川流域における弥生後期の土器変遷について」『茨城県史研究』62 茨城県立歴史館1989

- (註9)弥生時代後期前半の住居跡群内で石英礫破片多数・多量出土が見られないものもあり、同時期の住居跡同士での補完関係を示しているのかもしれない。
- (註10)千代田町雪人ふれあい自然公園の矢野健也氏によると、遺跡内から見つかる「アブライト(半花崗岩)」は石英の純度が高く、石英と呼んでも差し支えないのではとのご教示を頂いた。そして、定形的な石器を作るのに不向きな材料であるとのこと。この石材の転石は筑波山塊に源を持つ天の川やその支流の雪入川上流部などで採集できるとのこと。
- (註11)土浦市内では他に六十塚遺跡・和台遺跡で出土している。市外では美浦村陣屋敷遺跡や野中遺跡で微量出土しており、玉髓や流紋岩の剝片も出土している。本報告で石英としたものを「野中遺跡」では「ベグマタイトの石英質部」と表現している。
土浦市遺跡調査会「六十塚遺跡－田村・神宿土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第9集－」1998
陸平調査会「陣屋敷遺跡」陸平研究報告1 1992
美浦村教育委員会「野中遺跡－第2次発掘調査報告書－」美浦村文化財調査報告10 2001
- (註12)類似例として、那珂町の伊達遺跡では十王台式土器の中に鉄斧が入って出土している。那珂町史編さん委員会「那珂町の考古学」1990
- (註13)(財)茨城県教育財團「寺家ノ後A遺跡・寺家ノ後B遺跡・十三塚A遺跡・十三塚B遺跡・永国十三塚遺跡・鎌倉街道 茨城県教育財團調査報告第60集」1990
- (註14)(財)茨城県教育財團「田宮古墳群 茨城県教育財團文化財調査報告第57集」1990
- (註15)(財)鹿嶋市文化スポーツ振興事業団「大塚古墳・113号古墳・大塚西遺跡－鹿島浄水場拡張に伴う発掘調査－」1997
- (註16)(財)茨城県教育財團「八丁台遺跡 茨城県教育財團文化財調査報告第138集」1998
- (註17)土浦市教育委員会「石橋南遺跡－田村・沖宿地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第7集－」1997
- (註18)(註15)と同じ。同書の中で本田 勉氏はA類形態とした「2段式土坑」の墓壙の隸属年代を7世紀後半から10世紀と想定している。

参考文献

- 江坂彌彌「茨城県野中貝塚調査報告」「考古学雑誌」第39巻第3・4合併号 1954
茨城県史編さん委員会「茨城県史料＝考古資料編 先土器・縄文時代」1979
江坂彌彌「化石の知識 貝塚の貝」東京美術考古学シリーズ9 1983
村田文夫「考古学ライブラリー－36 縄文集落」ニュー・サイエンス社 1985
常澄村教育委員会「大串貝塚 常澄村埋蔵文化財調査報告第2集」1986
(財)茨城県教育財團「原田北遺跡Ⅰ 原田西遺跡 茨城県教育財團文化財調査報告第80集」1993
(財)茨城県教育財團「原田北遺跡Ⅱ 西原遺跡 茨城県教育財團文化財調査報告第85集」1994
(財)茨城県教育財團「原出口遺跡 茨城県教育財團文化財調査報告第94集」1995
(財)茨城県教育財團「下郷古墳群茨城県教育財團文化財調査報告第167集」2000
海老澤 發 黒澤春彦「原田竪跡群(上浦市)－新治台地の大集落－」『茨城県における弥生時代研究の到達点～弥生時代後期の集落構成から～』茨城県考古学協会 『王町教育委員会 1999
黒澤春彦「土浦周辺における弥生時代後期の様相」『土浦市立博物館紀要』第11号 2001
樋村宣行・土生朗治・白石真理「茨城県における5世紀の動向」『東國土器研究』第5号 東国土器研究会 1999



航空写真（国土地理院 昭和 57 年撮影）



遺跡全景



試掘調査状況



基本層序



第1号住居跡完掘



第1号住居跡P 11土層



第1号住居跡P 11遺物出土



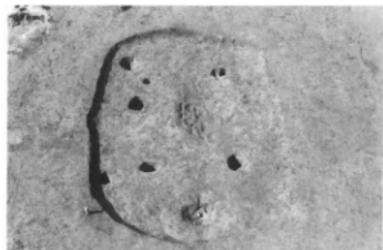
第2号住居跡完掘



第3号住居跡完掘



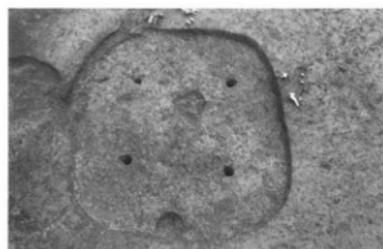
第3号住居跡遺物出土



第4号住居跡完掘



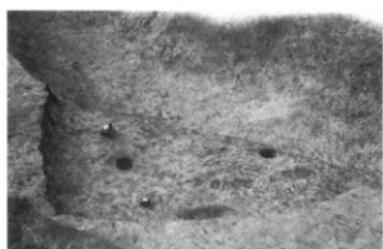
第4号住居跡石英出土状況



第5号住居跡完掘



第5号住居跡遺物出土



第6号住居跡完掘



第6号住居跡遺物出土



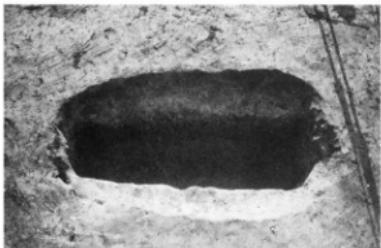
第1号土坑遺物出土



第14号土坑完掘



第21号土坑完掘



第3号土坑完掘



第13号土坑土层



第13号土坑完掘



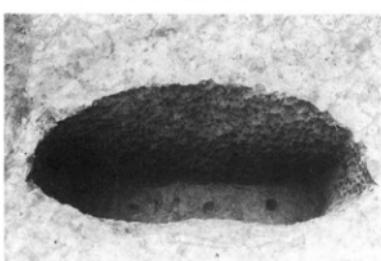
第37号土坑土层



第34号土坑完掘



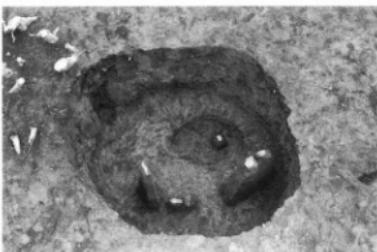
第36号土坑完掘



第17号土坑完掘



第 76 号土坑完掘



第 63 号土坑遗物



第 28 号土坑完掘



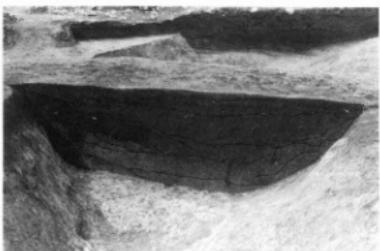
第 2 号沟完掘



第 13 号古填完掘



第13号古墳調査前



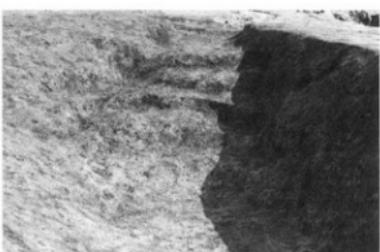
第13号古墳周溝土層



第13号古墳墳丘土層



第13号古墳周溝括れ部スロープ遺構



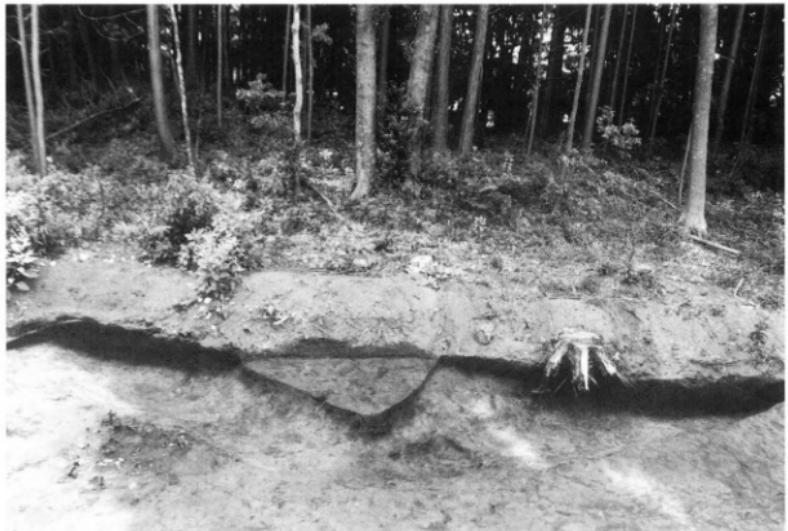
第13号古墳周溝内階段状遺構



第13号古墳主体部確認



第13号古墳墳丘検出現代墓



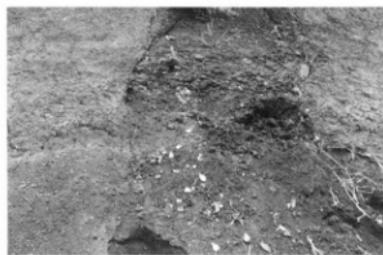
第15号古墳完掘



第1号道路遺構



第2号道路遺構



調査エリア外貝ブロック



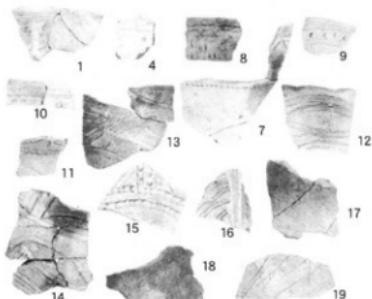
作業風景



第1号住居跡 2



第1号住居跡 3・5



第1号住居跡 1・4・7～19

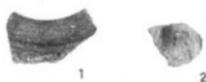
第1号住居跡 6



—



第1号住居跡 20



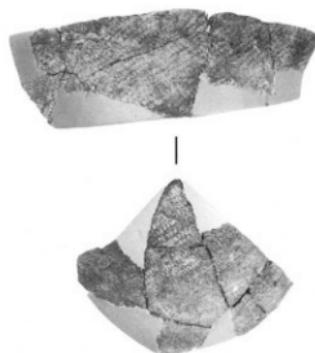
第2号住居跡 1・2



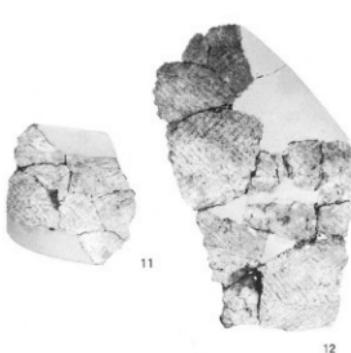
第2号住居跡 3・4



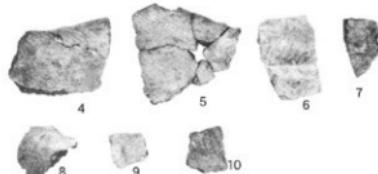
第3号住居跡 1



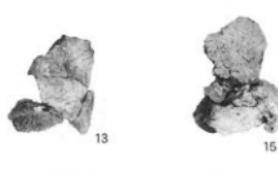
第3号住居跡3



第3号住居跡11・12



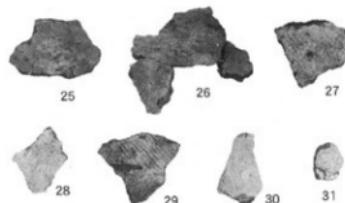
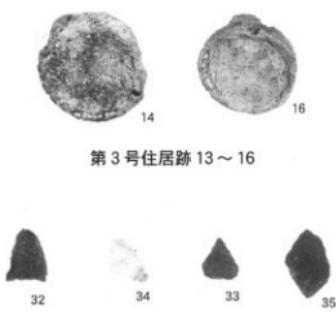
第3号住居跡4～10

13
15

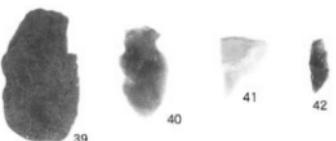
第3号住居跡13～16



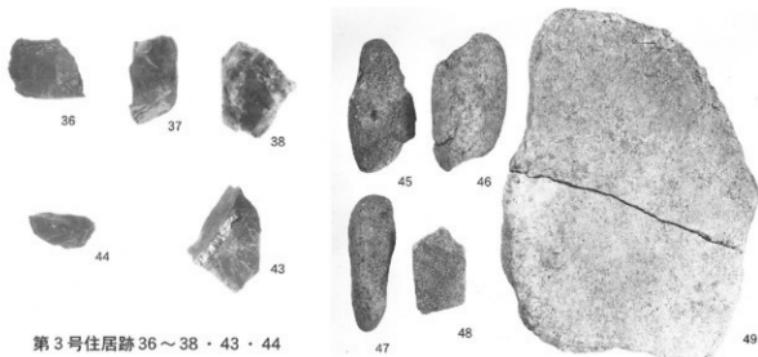
第3号住居跡17～24



第3号住居跡25～31

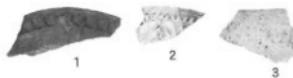


第3号住居跡32～35・39～42



第3号住居跡 36～38・43・44

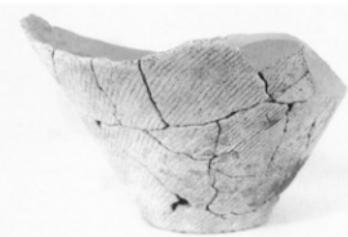
第3号住居跡 45～49



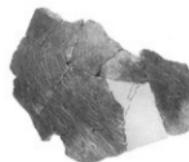
第4号住居跡 1～3



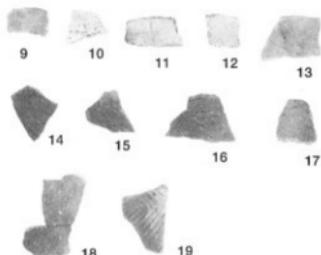
第4号住居跡 6～8



第4号住居跡 5



第4号住居跡 4



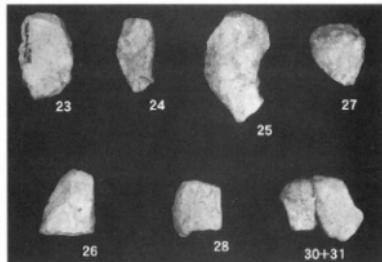
第4号住居跡 9～19



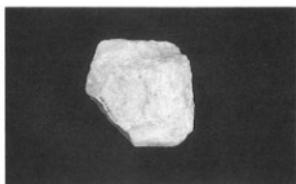
第4号住居跡 4 拡大



第4号住居跡 20～22



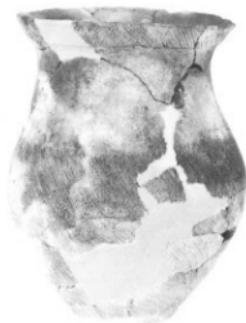
第4号住居跡 23～28 + (30+31)



第4号住居跡 29



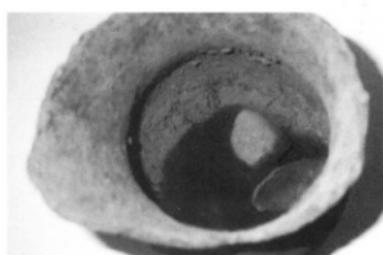
第5号住居跡 2



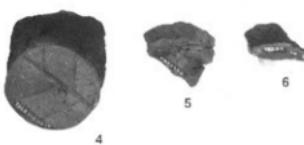
第5号住居跡 1



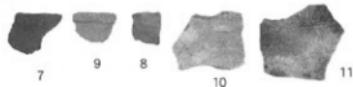
第5号住居跡 3



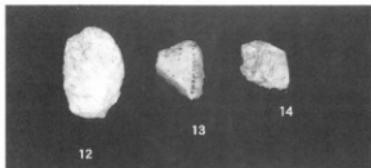
第5号住居跡 2 内石器(18-19)



第5号住居跡 4～6



第5号住居跡 7～11



第5号住居跡 12～14



第5号住居跡 15～19



第5号住居跡 20



第6号住居跡 1



第6号住居跡 2・3



第6号住居跡 4



第6号住居跡 5

第6号住居跡 1 拡大



第1号土坑 1

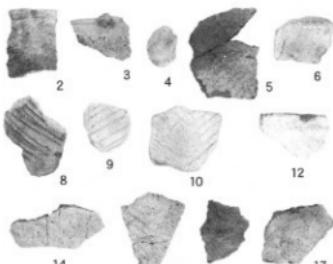


11



13

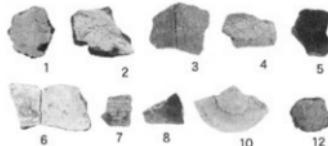
土坑出土繩文土器



土坑出土繩文土器



第18号土坑出土鐵鎌 7 (表裏)



集石出土繩文土器



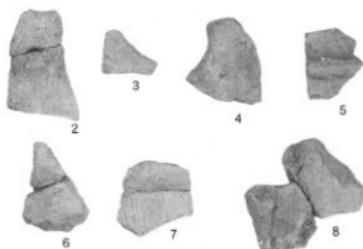
集石出土繩文土器·石器



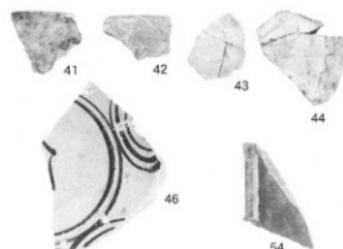
第13号古墳出土遺物



第15号古墳出土埴輪 1



第15号古墳出土埴輪



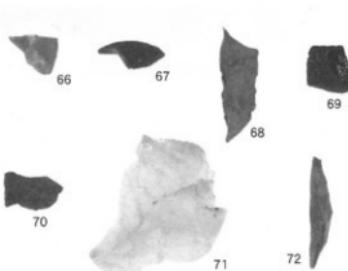
遺構外土器・陶器・瓦質製品



遺構外(現代墓) 陶器



遺構外土製品 47～53



遺構外旧石器 66～72



遺構外石器 76・77

遺構外石器 83



遺構外石器 64

遺構外(現代墓)鐵製品 57



遺構外(現代墓)鐵製品 56



遺構外(現代墓)鐵製品 58

報告書抄録

ふりがな	しもごういせき しもごうこふんぐん						
書名	下郷遺跡・下郷古墳群						
副書名	佐々木建設株式会社土砂採取工事に伴う埋蔵文化財調査報告書						
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編集者	関口 満 福田礼子	著者名	関口 満 富田恵一				
編集機関	下郷古墳群遺跡調査会						
所在地	〒300-0812 茨城県土浦市上高津1843 上高津貝塚ふるさと歴史の広場内 TEL.0298(26)7111						
発行年月日	西暦2001年7月31日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
しもごう いせき 下郷遺跡	つちうらし 土浦市 たむらまち 田村町	08-203 322	36度 5分 20秒	140度 14分 45秒	20000817 ~ 20001104	約1,700m ²	土砂採取 工事による。
しもごう こふんぐん 下郷古墳群	つちうらし 土浦市 たむらまち 田村町	08-203 323-013 323-015	36度 5分 20秒	140度 14分 45秒	20000817 ~ 20001104	約1,700m ²	土砂採取 工事による。
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
下郷遺跡	集落跡	縄文時代 弥生時代 古墳時代 中世以降	堅穴住居跡 土坑 集石 堅穴住居跡 土坑(墓域) 道路遺構 溝	3軒 約30基 4基 3軒 20基 2条 6条	縄文時代前期初頭・ 前期後半の土器・石器・十製品 弥生時代後期前半の 土器・石器・鐵製品 土師器・須恵器・鐵鍛 内耳土器・潮戸美濃 系陶器・瓦質製品	前開部底の堅穴住居跡から小舟形が多量出土。 また、チャート質の横状石器等が出土。 前開後半の堅穴住居跡から石製石斧・底部 欠損土器が出土。 弥生時代後期前半の堅穴住居跡内から石英製の 鍛打盤が見られる石器や鍛造片が多量出土。 複数の形態的特徴を持つ長塚形が古墳の周辺に 確認された。	
下郷古墳群	古墳	古墳時代 現代	古墳 墓	2基 1基	土器・須恵器・磁石・鐵 大甕・人骨・鹿角装月子・鉄鍛	第15号古墳から円筒埴輪片出土。 第13号古墳埴輪丘幅から人骨等を埋納した大甕 が出土し、伝承第10号古墳上遺物とされる。	

佐々木建設株式会社土砂採取工事
に伴う埋蔵文化財調査報告書

下郷遺跡・下郷古墳群

発行日 2001(平成13)年7月31日発行
編集 下郷古墳群遺跡調査会

〒300-0811 土浦市上高津1843
上高津貝塚ふるさと歴史の広場内
TEL 0298-26-7111

発行 土浦市教育委員会
〒300-0812 土浦市下高津2丁目7-36
印刷 菊池印刷株式会社
〒300-0811 土浦市上高津911-1
TEL 0298-21-2525
